

中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第20回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって	1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社(者)一覧	2
2017年度中国日本商会役員名簿.....	3
2017年度社会貢献委員会委員名簿	5
2017年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿	6
程海波団長挨拶.....	7
主催、共催団体の概要	8
第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団 団員名簿.....	9
第20回訪日ホームステイ受け入れリスト	10
第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程	11
第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト	12
< 訪日記録 >	
オムロン京都太陽 (5/31)/担当: 北京交通大学.....	15
京都大学 (5/31)/担当: 对外経済貿易大学	17
日立中央研究所 (6/2)/担当: 清華大学	19
一橋大学 (6/2)/担当: 北京外国語大学	22
三井住友銀行本店 (6/5)/担当: 北京郵電大学	24
日比谷松本楼(6/5)/担当: 中国人民大学	26
中国大使館(6/5)/担当: 对外経済貿易大学.....	28
三菱商事 (6/5)/担当: 清華大学	30
ホテルニューオータニ(エコセンター)(6/6)/担当: 中国人民大学	33
歓送会(6/6)/担当: 北京外国語大学.....	35
学生たちの感想文から	37
学生たちの観た日本	59
学生たちの撮った写真	77
第20回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト(中国語のみ).....	1

第20回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団報告書の刊行にあたって

本報告書は、「走近日企・感受日本」事業の第20回訪日団の報告書です。

本事業は、中国人大学生を訪日視察に招待派遣するもので、中国日本商会在会員からの寄付金を原資として、2007年から年に2回実施しており、今回の節目となる第20回までで29大学622名の学生に参加いただきました。

次代の中国を担う若者を日本に派遣し、日本の実像に触れてもらう機会を提供する本事業は、日本企業への訪問・視察、大学生との意見交流、日本人一般家庭でのホームステイなどの豊富なプログラムを通じて、日中両国民の相互理解の増進に大きく貢献しているものと自負しております。

中国からは、2016年に前年比27.6%増の637万人が日本を訪れています。本事業開始当時とは状況が異なっていますが、若い世代の人たちが初めて訪れる日本で見て聞いて感じて得られる感動はその後の人生や日中友好に少なからず好影響をもたらすことは不変であると信じております。

さて、第20回訪日団は、2017年5月30日から6月6日までの8日間、清華大学、中国人民大学、对外経済貿易大学、北京外国語大学、北京郵電大学および北京交通大学の6大学から選抜した30名で編成され、一同、感動とともに無事終了することができました。

視察企業は、オムロン京都太陽(京都)、日立中央研究所(東京)、三井住友銀行(東京)、三菱商事(東京)、ホテルニューオータニエコセンター(東京)の5社。その他、京都大学、一橋大学における中国人大学生との交流、中国大使館の訪問、日比谷松本楼の視察、一泊二日のホームステイ体験など、多彩なプログラムを実施しました。ホームステイの受入れにご協力いただいた企業は12社(旭硝子、アルプス電気、伊藤忠フィナンシャルマネジメント、キャノン、新日鐵住金、全日本空輸、テルモ、日本航空、丸紅、三井物産、三菱ケミカル、三菱商事)にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の多大なる協力と貢献のもとに実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会に全面的なご協力をいただくとともに、訪日団の受入れや本報告書の編集には、一般財団法人日中経済協会に多大なるご尽力をいただいております。加えて、寄付金については、中国側では中国友好和平発展基金会、日本側では公益社団法人企業市民協議会(CBCC)に適切な管理を行っていただいております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力をいただいているすべての関係者に厚くお礼を申し上げます。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに勝る喜びはありません。

中国日本商会 会長 上田明裕

2017年6月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」 寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】750万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠(中国)集団有限公司
3	新日鐵住金株式会社
4	住友商事(中国)有限公司
5	全日本空輸株式会社
6	東芝(中国)有限公司
7	トヨタ自動車(中国)投資有限公司
8	日本航空株式会社
9	日立(中国)有限公司
10	丸紅株式会社 丸紅(中国)有限公司
11	株式会社みずほコーポレート銀行
12	三井物産株式会社
13	三菱商事株式会社
14	三菱電機(中国)有限公司
15	三菱東京UFJ銀行(中国)有限公司

【寄付金】350万円以上～750万円未満

1	日本電気株式会社
2	キヤノン(中国)有限公司
3	住友化学投資(中国)有限公司
4	ソニー(中国)有限公司
5	三井住友銀行(中国)有限公司

【寄付金】100万円以上～350万円未満

1	あいおいニッセイ同和損保株式会社
2	旭化成株式会社
3	旭硝子(中国)投資有限公司
4	アルプス(中国)有限公司
5	岩谷産業株式会社
6	日本たばこ産業株式会社
7	日本郵船株式会社
8	NTTグループ
9	JTB新紀元国際旅行社有限公司
10	JX日鉱日石エネルギー株式会社
11	双日株式会社
12	第一生命株式会社
13	株式会社電通
14	東京海上日動火災保険株式会社 東京海上日動火災保険(中国)有限公司
15	日揮株式会社
16	日産(中国)投資有限公司
17	野村證券株式会社
18	三井化学株式会社
19	三井住友海上火災保険株式会社 三井住友海上火災保険(中国)有限公司
20	三井住友信託銀行
21	三菱ケミカルホールディングス株式会社
22	三菱重工業(中国)有限公司

【寄付金】10万円以上～100万円未満

1	株式会社 IHI
2	アルパイン(中国)有限公司
3	株式会社荏原製作所
4	エプソン(中国)有限公司
5	華昇富士達電梯有限公司
6	住金物産株式会社
7	住友生命保険相互会社
8	ソニー生命保険株式会社
9	大和証券株式会社
10	宝酒造株式会社
11	電源開発株式会社
12	東工物産貿易有限公司
13	東曹達(上海)貿易有限公司
14	トヨタモーターファイナンスチャイナ
15	日本生命保険相互会社
16	テルモ(中国)投資有限公司
17	日本農林中央金庫有限公司
18	ハウス食品株式会社
19	日立高新技术(上海)国際貿易有限公司
20	株式会社ブリヂストン
21	北京丘比食品有限公司
22	三井不動産諮詢(北京)有限公司
23	三菱マテリアル株式会社
24	三菱UFJ証券有限公司
25	三菱UFJ信託銀行
26	明治安田生命保険相互会社
27	明宝工程塑料商貿(上海)有限公司
28	矢崎(中国)投資有限公司
29	理光軟件研究所(北京)有限公司
30	株式会社ワコールホールディングス
31	成川 育代(個人会員)
32	柳田 洋(個人会員)

2017年度中国日本商会役員一覧

2017年7月度現在

	商会役職	氏 名	会社名	役職
1	会長	上田 明裕	伊藤忠	常務執行役員 東アジア総代表
2	副会長	山洞 正一	アサヒグループホールディングス	中国総代表
3	副会長	小澤 秀樹	キヤノン	副社長執行役員
4	副会長	西浦 新	新日鐵住金	常務執行役員 中国総代表 北京事務所長
5	副会長	古場 文博	住友商事	常務執行役員 東アジア総代表
6	副会長	阿部 信一	全日本空輸	上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長
7	副会長	大西 弘致	トヨタ自動車	専務役員 中国本部長
8	副会長	篠田 邦彦	日中経済協会	北京事務所 所長
9	副会長	田端 祥久	日本貿易振興機構	北京事務所 所長
10	副会長	横尾 定顕	パナソニックチャイナ	役員 中国・北東アジア地域総代表
11	副会長	小久保 憲一	日立製作所	執行役常務 中国総代表
12	副会長	鳥居 敬三	丸紅	常務執行役員 中国総代表
13	副会長	岡 豊樹	みずほ銀行	執行役員 中国総代表
14	副会長	金森 健	三井物産	専務執行役員 中国総代表
15	副会長	平井 康光	三菱商事	執行役員 東アジア統括
16	副会長	富澤 克行	三菱電機	執行役員 中国総代表
17	副会長	小原 正達	三菱東京UFJ銀行(中国)	副董事長
18	理事	亀倉 隆志	岩谷産業	常務執行役員 中国総代表
19	理事	西村 康	双日	常務執行役員 中国総代表
20	理事	椿本 光弘	豊田通商	常務執行役員 東アジア総代表
21	理事	松原 圭司	阪和興業	執行役員 中国総代表
22	理事	陶 履徳	日鉄住金物産	北京事務所 所長
23	理事	上田 敏裕	旭硝子(中国)投資	董事長 総経理
24	理事	吉澤 務	川崎重工管理(上海)	董事 総経理
25	理事	青山 傑	コスモ石油	北京事務所 首席代表
26	理事	市川 正人	クボタ	北京事務所 首席代表
27	理事	池松 克紀	JFEエンジニアリング(北京)	総経理
28	理事	西村 伸吾	JXTGエネルギー	執行役員 中国総代表
29	理事	明石 宏二郎	東京電力	北京代表処 首席代表
30	理事	今井 正志	アルプス(中国)	総経理
31	理事	吉田 直樹	NEC	執行役員 中国総代表
32	理事	堂園 憲治	NTTコミュニケーションズ(中国)	北京分公司 総経理
33	理事	宇平 直史	NTTデータ	執行役員 中国総代表
34	理事	本間 雅之	NTT DOCOMO China通信技術	董事長
35	理事	後藤 雄次	京瓷(中国)商貿	董事・総経理

36	理事	井神 淳	北京凱迪迪愛通信技術	董事長
37	理事	高橋 洋	ソニー(中国)	董事長&総裁
38	理事	須毛原 勲	東芝	中国総代表
39	理事	北野 滋	富士通(中国)	総経理
40	理事	小原 弘嗣	マルチメディア振興センター	北京代表処 首席代表
41	理事	棕野 貴司	旭化成	執行役員 中国総代表
42	理事	瀨瀬 義隆	アステラス製薬(中国)	董事長兼総経理
43	理事	中西 稔	花王(中国)投資	董事長 総経理
44	理事	西 広信	住友化学投資(中国)	総経理
45	理事	陳 偉東	日健中外科技(北京)	総経理
46	理事	柴崎 崇紀	テルモ	上席執行役員 中国総代表
47	理事	寺師 啓	東レ	北京事務所 所長
48	理事	本田 和秀	凸版印刷	北京事務所 首席代表
49	理事	松崎 宏	三井化学	理事 中国総代表
50	理事	高尾 昌二	三菱化学控股管理(北京)	董事長
51	理事	柯 豪俊	住友生命	北京事務所 首席代表
52	理事	諸 紅霞	大和証券	北京事務所 首席代表
53	理事	和田 健治	日本銀行	北京事務所 首席代表
54	理事	篠原 康人	三井住友海上火災保険(中国)	北京分公司 総経理
55	理事	川端 良彦	三井住友銀行(中国)	副社長
56	理事	岸上 輝充	三井住友信託銀行	北京代表処 首席代表
57	理事	米倉 真	日通国際物流(中国)	北京分公司 所長
58	理事	江利川 宗光	日本航空	執行役員 中国総代表 北京支店長
59	理事	高泉 宏康	日本郵船	中国総代表
60	理事	今井 誠	イトーヨーカ堂(中国)投資	董事長
61	理事	石毛 二郎	JTB新紀元	総経理
62	理事	大谷 隆一	上海博報堂広告有限公司	北京分公司 総経理
63	理事	谷口 利英	全日空国際旅行社	総経理
64	理事	高橋 修三	長富宮中心	常務副総経理 ホテル総支配人
65	理事	馬場 章正	北京電通広告	董事 総経理
66	理事	戸村 滋見	北京発展大廈	董事 総経理
67	理事	田淵 真次	日中経済貿易センター	専務理事 北京事務所長
68	理事	中下 裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所 中国総代表
69	理事	厚谷 禎一	KPMGアドバイザリー(中国)	ディレクター
70	理事	萩原 徹	国誉家具(中国)	北京分公司 総経理
71	理事	小金井 英生	世達志不動産投資顧問(上海)	北京分公司 総経理
72	理事	越智 博通	北京陸通印刷	董事長
73	理事	堀内 博史	ハウス食品(中国)投資	北京分公司 総経理
74	監事	三浦 智志	監査法人トーマツ	パートナー
75	監事	越智 幹文	国際協力銀行	首席代表

2017年度社会貢献委員会委員名簿

	氏 名 （会社名・役職）
社会貢献委員長	鳥居 敬三 （丸紅 常務執行役員 中国総代表）
委員	山洞 正一 （アサヒグループホールディングス 中国総代表）
委員	上田 明裕 （伊藤忠 常務執行役員 東アジア総代表）
委員	小澤 秀樹 （キヤノン 副社長執行役員）
委員	西浦 新 （新日鐵住金 常務執行役員 中国総代表 北京事務所長）
委員	古場 文博 （住友商事 常務執行役員 東アジア総代表）
委員	阿部 信一 （全日本空輸 上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長）
委員	大西 弘致 （トヨタ自動車 専務役員、トヨタ自動車(中国)投資 董事長）
委員	篠田 邦彦 （日中経済協会 北京事務所 所長）
委員	田端 祥久 （日本貿易振興機構 北京事務所 所長）
委員	横尾 定顕 （パナソニックチャイナ 役員 中国・北東アジア地域総代表）
委員	小久保 憲一 （日立製作所 執行役常務 中国総代表）
委員	岡 豊樹 （みずほ銀行 執行役員 中国総代表）
委員	金森 健 （三井物産 専務執行役員 中国総代表）
委員	平井 康光 （三菱商事 執行役員 東アジア統括）
委員	小原 正達 （三菱東京UFJ銀行(中国) 副董事長）
委員	富澤 克行 （三菱電機 執行役員 中国総代表）
委員	江利川 宗光 （日本航空 執行役員 中国総代表 北京支店長）
委員	石毛 二郎 （交通公社新紀元国際旅行社 董事 総経理）

2017年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	鳥居 敬三	丸紅 常務執行役員 中国総代表
【WG座長】	篠田 邦彦	日中経済協会 所長
アサヒグループホールディングス	飯塚 喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集团有限公司	堀尾 卓	東アジア総代表室 部長
キヤノン(中国)有限公司	福井 穂高	コーポレートコミュニケーション戦略本部副総経理
新日鐵住金諮詢(北京)有限公司	濱崎 由基	部長
交通公社新紀元国際旅行社有限公司	石毛 二郎	董事 総経理
住友商事(中国)有限公司	中原 誠	人事部 部長
	米 健	中国総代表助理
全日本空輸株式会社	新井 哲朗	銷售部
東芝(中国)有限公司	東口 雄一郎	総裁室 室長
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田 弘毅	渉外部主査
日中経済協会	澤津 直也	副所長
日本航空株式会社	藤井 智之	営業部 マネージャー
日本貿易振興機構 北京事務所	日向 裕弥	副所長
日立(中国)有限公司	宮田 剛志	信息資源本部 公共関係部 副総経理
丸紅(中国)有限公司	松園 大	中国総代表助理
みずほ銀行(中国)有限公司 北京支店	林 彦伯	グローバルコーポレート業務部
三井物産(中国)有限公司	佐々木 有司	業務部 部長
三菱商事(中国)商業有限公司	李 征	企画業務部 副部長
三菱電機(中国)有限公司	原 正英	副総経理
三菱東京UFJ銀行(中国)北京支店	張 婷	企画部 北京本部
【オブザーバー】	菊池 信太郎	日本大使館 広報文化センター 書記官
【オブザーバー】	柴戸 ひとみ	日本大使館 経済部 書記官
【訪日中のアテンド等】	横山 勝明	日中経済協会 (東京) 参与

第20回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团報告書 団長挨拶

2017年5月30日から6月6日にかけて、第20回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日団一行34名は、日本での8日間の訪問を行いました。中国日本商会、日中経済協会そして訪問先の関係者の多大なるご支援ならびにご協力の下、代表団の訪日活動は無事そして円満に期待通りの成果をあげることができました。

今回の代表団は清華大学、中国人民大学、對外経済貿易大学、北京外国語大学、北京郵電大学そして北京交通大学の優秀な学生により構成されています。日本滞在期間中、私達は京都、神奈川、東京等を訪れ、三菱商事、三井住友銀行、日立製作所中央研究所、オムロン京都太陽、ホテルニューオータニなど5つの有名企業の見学の他、京都大学や一橋大学の学生達との交流、中華人民共和国駐日本国大使館への表敬訪問、孫中山・梅屋庄吉両氏の一生の友情の舞台となった松本楼への訪問、さらには中国日本商会各会員企業の従業員宅でのホームステイ体験など、充実したスケジュールの下で多くの収穫を得ることができました。また今回の訪問を通じて、日本企業の進んだ技術や経営理念そして環境保全意識を学び、茶道や座禅などの日本の伝統文化を体験し、日本の人々と深い友情を育むことができました。団員らは充実した今回の8日間において、細かな観察や思考を通して様々な角度や側面から認識した日本について日記形式にまとめました。ここに団員らの日本訪問における思いを皆様へご紹介いたします。皆様にはこの報告書から、彼らの収穫や感動といったものを感じ取って頂ければ光栄に存じます。

今年は日中国交正常化45周年にあたり、両国関係はさらなる改善そして発展における重要な好機を迎えています。国の交わりは民の親しさにあります。日中関係のさらなる発展には、両国の人々、特に若者世代の幅広いサポートと積極的な関わりが求められます。日中両国の若者らが手を携え、共に学び進歩することで、日中友好における架け橋となることを心から願っております。中日友好協会としましても、日本の各界の皆様と共に両国の民間及び草の根交流をより活発化し、両国の人々、特に青少年同士の相互理解と友情の増進を図り、日中関係の継続的な改善そして発展へのためまぬ努力をしていく所存でございます。

最後に、今回の代表団の訪日に際して多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会及び関連各企業の皆様に、心より感謝申し上げます。

第20回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团 団長

中日友好協会副秘書長

程海波

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2017年7月末日現在、市内法人会員587社、市外法人会員60社、個人会員13名、賛助会員13名の合計673社(名)を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同发展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓名	性別	所属		専攻
団 長	程海波	男	中日友好協会	副秘書長	
団 員	王徳標	男	清華大学	土木水利学院	建設管理
団 員	顧欣宇	女	清華大学	電機系	電気工程とその自動化
団 員	韓儲銀	男	清華大学	熱エネルギー工程系	エネルギーと動力工程
団 員	鐘 玲	女	清華大学	化学工程系	化学工程
団 員	連鵬龍	男	清華大学	精密計器系	観測制御技術と計器
団 員	姜雨荷	女	中国人民大学	環境学院	環境・資源管理
団 員	陳子鑫	男	中国人民大学	理学院物理系	物理学
団 員	李雅嫻	女	中国人民大学	情報学院	情報と数学
団 員	秦 宇	男	中国人民大学	情報学院	コンピュータ科学
団 員	呉成庚	男	中国人民大学	環境学院	資源・環境経済学
団 員	閔一萱	女	對外経済貿易大学	外国語学院	日本語(経済貿易)
団 員	李黛雅	女	對外経済貿易大学	外国語学院	日本語(経済貿易)
団 員	林子恵	女	對外経済貿易大学	外国語学院	日本語(経済貿易)
団 員	陳 卓	男	對外経済貿易大学	外国語学院	日本語(経済貿易)
団 員	張元浩	男	對外経済貿易大学	外国語学院	日本語(経済貿易)
団 員	艾倍兆	女	北京外国語大学	日本語系	日本語文学
団 員	秦諾雅	女	北京外国語大学	日本語系	日本語文学
団 員	郝琦璘	女	北京外国語大学	日本語系	日本語文学
団 員	徐 杭	女	北京外国語大学	日本語系	日本語文学
団 員	何雨婷	女	北京外国語大学	日本語系	日本語文学
団 員	李美婷	女	北京郵電大学	人文学院	日本語
団 員	張少臻	男	北京郵電大学	人文学院	日本語
団 員	汪佳偉	男	北京郵電大学	人文学院	日本語
団 員	都 平	女	北京郵電大学	人文学院	日本語
団 員	王芙蓉	女	北京郵電大学	人文学院	日本語
団 員	趙 政	男	北京交通大学	機械・電子制御工程学院	機械工程
団 員	王紫嫣	女	北京交通大学	經濟管理学院	物流管理
団 員	原露恬	女	北京交通大学	電氣工程学院	電気工程とその自動化
団 員	申婉玉	女	北京交通大学	土木建築工程学院	土木工程
団 員	任二祥	男	北京交通大学	電子情報工程学院	電子科学と技術
団員(引率教員)	左漢卿	女	北京郵電大学	人文学院日本文化研究所教師	
団員(引率教員)	王 烜	女	北京交通大学	学生業務処副処長	
団員(事務局)	王 麟	男	中日友好協会	都市・経済交流部職員	

第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日 付	日 程	宿 泊
1	5/30 (火)	16:50北京→21:20 関西 (NH980便) 21:20 関西国際空港着 22:00～22:30 夕食:関西空港 22:30～24:00 夕食後京都へ移動 24:00 ホテル着	京都 京都ロイヤルホテル&スパ 京都市中京区河原町通三 条上ル恵比須町426番地 TEL:075-223-1234
2	5/31 (水)	8:30ホテル発 9:30～12:00 ●企業訪問① オムロン京都太陽 12:30～13:30 昼食:京都 14:00～20:00 ◎大学交流① (含む懇親会) 京都大学 20:30 ホテル着	京都 京都ロイヤルホテル&スパ
3	6/1 (木)	8:15ホテル発 ★ソフト文化視察 ①京都 9:00～10:00 嵐山 (周恩来記念碑) 10:30～12:30 高台寺茶道体験及び座禅体験 13:15～14:00 昼食:京都 14:32京都→16:35小田原 ひかり524 (新幹線体験) 17:30 箱根湯本温泉着 ★温泉体験 夕食:温泉旅館内にて和食会席料理	箱根湯本温泉 箱根天成園 神奈川県足柄下郡箱根町 湯本682 TEL:0460-83-8511
4	6/2 (金)	8:00ホテル発 10:00～12:30 ●企業訪問 ②日立中央研究所 13:00～13:30 昼食:都内 14:00～18:30 ◎大学交流 ② (含む懇親会) 一橋大学 20:30 ホテル着	東京 ホテルニューオータニ 東京都千代田区紀尾井町 4-1 TEL:03-3265-1111
5	6/3 (土)	終日 学生ホームステイ	学生:ホームステイ 東京 引率者:ホテルニューオータニ
6	6/4 (日)	夕方まで学生ホームステイ 夕方 ホテル集合 東京都内自由行動	東京 ホテルニューオータニ
7	6/5 (月)	9:00ホテル発 9:30～11:30 ●企業訪問 ③三井住友銀行 12:00～13:30 ★ソフト文化視察 ②日比谷松本楼 (含む昼食) 14:00～15:30 ●中国大使館訪問 16:00～19:00 ●企業訪問 ④ (含む懇親会) 三菱商事 20:30 ホテル着	東京 ホテルニューオータニ
8	6/6 (火)	9:30～11:30 ●企業訪問⑤ホテルニューオータニ エコ視察 12:00～13:45 歓送会 (ホテルニューオータニ) 14:00 ホテル発 羽田空港へ移動 15:00 羽田空港着 17:20羽田→20:10北京 (NH963便) 20:15 北京首都国際空港着 (到着後、自由解散)	

第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

1. オムロン京都太陽（5月31日）

荒井 裕晃	企画部 企画G	
山口 裕	企画部 企画G	グループリーダー

2. 京都大学（5月31日）

川添 信介		副学長・理事(学生・図書館担当)
韓 立友	国際高等教育院	准教授
ルチラ パリハワダナ 同上		教授
河合 淳子	同上	教授
吉田 万里子	同上	教授

馬淵 光正	教育推進・学生支援部 国際教育交流課	課長
白石 賢一	同上	課長補佐
植村 五枝子	同上	交流支援掛長
城野 真衣	同上	交流支援掛員

高吉 慧	京都大学PUKU実行委員会	代表
于 再治	同上	スタッフ
他 京都大学生	29名	

高橋 和男	京都府 国際課	課長
山本 隆裕	同上	副課長
山口 紳	同上	主事

斉藤 健一	コーディネーター	
吉田 浄	同上	

3. 日立製作所 中央研究所（6月2日）

三和 祐一	研究開発グループ 技術戦略室 技術統括センタ 産学官連携部	部長
豊田 善章	研究開発グループ 中央研究所 企画室 研究戦略ユニット	ユニットリーダ・主任研究員
孫 慶華	研究開発グループ テクノロジーイノベーション統括本部 システムイノベーションセンタ メディア研究部	研究員
劉 珊珊	営業統括本部 グローバル事業推進本部 中国部	
下瀧 美奈子	研究開発グループ 技術戦略室 技術統括センタ 研究管理部	
新原 敏夫	同上	
山本 義道	研究開発グループ 管理統括センタ 国分寺総務部 総務ユニット	主任

4. 一橋大学 (6月2日)

中野 聡	大学院社会学研究科	教授・副学長(国際交流、広報、社会連携担当)
青木 人志	大学院法学研究科	教授・中国交流センター代表
王 雲海	大学院法学研究科	教授
玉田 政樹	学務部国際課国際企画係	係長
中山 リカ	学務部国際課国際企画係	
池田 祐子	学務部国際課国際企画係	
他 一橋大学生	牧野瑛美里さん他13名	

志波 幹雄	中国交流センター顧問
井田 武雄	中国交流センター顧問
瀬川 拓	日本合成化学 顧問・如水会北京支部 前会長

5. 三井住友銀行 (6月5日)

藤盛 耕嗣	東アジア統括部	部長
福井 晋平	東アジア統括部 企画グループ	部長代理
田中 慈恵	東アジア統括部 業務推進グループ	
	兼 ホールセール統括部 アジア業務推進企画グループ	部長代理補
姚 文婕	同上	
曾 子洋	国際金融法人部 金融法人第二グループ	

6. 日比谷松本楼 (6月5日)

小坂 文乃	代表取締役社長
今井 康雄	営業部 部長

7. 中国大使館 (6月5日)

汪 婉	大使夫人 友好交流部	参事官
邵 宏偉	友好交流部	一等書記官
潘 林	友好交流部	二等書記官

8. 三菱商事 (6月5日)

松井 俊一		顧問
小山 雅久	調査部 経済調査チーム	アドバイザー
田口 絢子	業務部 アジア・大洋州チーム	課長
池澤 健太郎	同上	
藤井 宏侑	同上	
坂上 智子	同上	
飯田 剛司	業務部	部長代行
西原 真司	業務部	部付 アジア・大洋州担当

桜井 大地	調査部 経済調査チーム	課長
郝 秋香	調査部 産業調査チーム	
何 晨璐	調査部 経済調査チーム	
樫場 紀子	自動車北アジア部 中国チーム	

9. ホテルニューオータニ（6月6日）

山川 剛	関西営業所	所長
田島 浩一	宿泊営業部 国内営業課	アシスタントディレクター
山田 聡	料飲営業部 料飲営業一課	シニアセールスマネージャー
野川 靖彦	ルームディビジョンフロントオフィス課	主任
三浦 光昌	ファシリティーマネージメント部	
	ファシリティーマネージメント課	課長
山本 健	宿泊営業部 国内営業課	アシスタントディレクター
西村 博夫	宿泊営業部 国内営業課	課長
西野 瑤子	バンケット サービス	マネージャー

京都の太陽

北京交通大学学生代表

見学日時：2017年5月31日（水） 9:30-12:00

見学場所：オムロン京都太陽株式会社

見学概要

1時間の車での移動を経て、京都の朝日を浴びながら、私たちは9時半にオムロン京都太陽株式会社に到着した。見学の初めに、工場内の作業スタッフからオムロン京都太陽株式会社の成り立ち等の状況についての紹介があり、その紹介を通じて同社はオムロン株式会社と社会福祉法人太陽の家が共同出資して設立された会社であることを知った。その後、スタッフからオムロン株式会社のここ一年における各分野での業績及び従業員の出身地域の見取り図についての紹介があり、さらに企業のPRビデオを通じてオムロンの「われわれの働きで、われわれの生活を向上し、よりよい社会をつくりましょう」の企業理念について知ることができた。

次いで、私たちは工場内部の見学を行い、3フロアの見学を通じて私たちは、企業の社会的価値及びその経営理念を実現するための努力について知ることができた。1階は重度の障がい者のリハビリスペースで、2階は正式採用されたスタッフの作業場で、3階では電源及び血圧計を生産している。

工場にはまた生産管理の担当者がおり、彼らはスタッフへの定期的な健康診断を行い、日々の状況により作業時間を調整するなど、業務の手配や調整を行っている。また工場のスタッフである彼らは生産ラインや製品の設計に関わっている。工場では作業スタッフが自らの意向を簡単な絵として表現し、デザインスタッフとともにデザインプランを検討することを推奨している。「3S（整理・整頓・清掃）」の管理規則は工場全体の秩序だった運営をもたらしており、スタッフ用の特製の自動販売機は従業員への思いやりを体現している。



最後は質疑応答で、工場側から入社時の面接要件、従業員の起業への見解、1階の訓練生の待遇状況、従業員の体調不良時の対応、企業のPR方式等について詳しい回答が得られた。そして程団長の挨拶によりオムロン京都太陽株式会社での見学を終えた。

なぜですか？

問：オムロン京都太陽株式会社における障がい者に対する面接の流れとは？

答：入社する障がい者は主に健康相談関連の試験をパスする必要がある、身体機能について全面的な評価を行い、基本的な食事やお手洗いの使用の能力については必須事項であり、後は個人の仕事への意向による。

感想

企業と福祉の架け橋であるオムロン京都太陽株式会社は、障がい者への就業の機会の提供に注力し、安定した仕事と社会福祉を確保し、障がい者が自身の労働を通じて生きがいを取り戻す環境を構築している。

またオムロンは作業スタッフの正常な業務の実現のため、手や脚にハンデのあるスタッフのための開封用の吸盤道具、記憶力にハンデのあるスタッフのための部品装着用の指示灯など様々な作業台や道具を作っている。そしてスタッフがより便利に業務を行えるよう、彼らの業務における需要を満たすため、専門的な道具の製作室を設けている。また同時に、各人の状況に基づき、同社は特別指定の生産ラインを構築し、左手のみが使えるスタッフと右手のみが使えるスタッフと一緒に配置するなど、各自の特徴を発揮させ、共同での生産を行っている。全スタッフの公平性を保証し、ハンデを理由とした心理的負担を生まないう、同社は全てのスタッフが座ったまま作業ができるようにしており、全ての作業台の高さを統一している。こうすることで、車いすに乗ったスタッフも複数の部署で作業ができ、一部スタッフの作業状態が不安定で随時調整が必要な点への対応を行っている。

同社の経営理念や管理モデルに私たちは大きな啓発を受けた。困難に対してはあらゆる方法を検討することで実現不可能と思われる物事を克服していく、小さな力でも自分たち自身の手で変革をすることはできるといったこと以外に、企業の社会的責任とは何か、何が企業における社会やあらゆる人々への貢献という信念なのかを教えられた思いがした。No charity, but a chance！（保護より働く機会を）私たちもこうした精神に習い、彼らへの尊重や理解をしていく必要がある。

京都大学での見聞と交流

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2017年5月31日（水）14:00-20:00

見学場所：京都大学

見学概要

まず、皆が2つのグループに分かれ、京都大学の学生の引率の下で京都大学のキャンパスを見学した。

それから皆は吉田国際交流会館を訪れ、京都大学国際高等教育院の韓立友准教授から京都および京都大学の紹介を受けた。

その後、全団員が4つのグループに分かれ、京都大学の学生と「多文化共生」、「キャリアプラン」、「サブカルチャー」、「大学の在り方」の4つのテーマに沿った討論を行った。討論の後、KUINEP 講義室で各グループが討論結果の発表を行い、京都大学の教授からのコメントを頂いた。

最後に、皆はカンフォーラでの交流会に参加し、食事をしながら楽しい交流を行った。また京都大学の学生からは出し物の披露があり、訪日団からは歌の披露があった。そして程海波団長からの閉幕の挨拶により、京都大学での活動は滞りなく終了した。



なぜですか？

- (1) 京都大学には「吉田寮」という宿舎があり、学生が自主管理を行っている。京都大学は学生の意向や権利を非常に尊重している。学生が自主管理をしている「吉田寮」に関して、老朽化の問題から大学側が改築を望んでいるが、学生がそれを拒んでいるため、強硬な工事ができないことから大学側も学生と交渉を続けており、改築作業も全く進んでいない。



- (2) 日本における物理、化学、生理学・医学関連の初のノーベル賞受賞者はいずれも京都大学から誕生している。京都大学の自由な校風は本当に感心させられるものであり、自由で革新的そして反抗的でもある。校門前には首相打倒の看板が立てられており、京都大学の学生はかつて学長や警察を打倒したことがあるという。またその自由で革新的な校風から研究であれ学習であれ、自身の興味や趣味が基になっている。そして教授も科学研究ではなく

教育を念頭に全人類のため教師として人材を育てている。その他、京都大学の学生との討論においては、彼らの英語のレベルが想像以上に素晴らしかった(中国では日本人の英語はあまり上手ではないという話をよく耳にするが、実際はそうではなかった)。また日本の学生はとても親切で、交流の際もとても楽しそうであった。

(3) 日本の国立大学にはこれまで学生の募集に関する不祥事がなく、制度を厳しく守り、すべての学生を平等に扱っている。日本の大学の学長は選挙を通じて選ばれるが、学長を希望する人はさほど多くない。

感想

京都大学に着いてすぐ、ここは中国国内の大学とは違ったものだと感じた。ここには特別立派な校門はなく、しかもその校門前には「反動的言論」が書かれた看板が立てられ、キャンパス内のポスターの多くも学生が書き殴ったものであり、これまで接したことのない感覚であった。

また京都大学の学生との交流においても、日中両国の若者の考え方の違いを感じることができた。私たちのグループの討論テーマはサブカルチャーであったため、私たちは「ネット有名人文化」、モバイルゲーム、テレビドラマ文化等のサブカルチャーについて議論をした。そして議論の際、日本の学生の考え方の中国の学生との違いを感じることができた。例えば、中国の学生が「ネット有名人」の話の際に、ネット有名人の彼らは少し名前が売れるとタオバオでのネットショップ経営をするといった話をしたところ、日本の学生はそれを不思議に思い、「洋服のデザイン、品質、ブランド、店舗はどうなのか？」といった質問を受けた。こうした些細なところから、両国の若者の文化や思想面の違いを感じることができた。

その他、韓立友准教授による京都および京都大学の紹介を聞いた私は、京都大学に留学したい思いが芽生えた。京都大学は独立独歩で、自由を尊重している。京都大学の自由性と革新性、そして教授の教育第一の精神には本当に感服させられた。京都大学の学生は政治に対して自身の見解を持ち、それらは外部の影響を受けることはない。また学生は就職ではなく自身の興味に基づいて学習をしている。これらは一流の学者の育成により有利であることは推して知るべし、である。学生の個性が尊重されるほど物事への新たな見解が形成される、これは社会の発展に必要なものである。そして教授が教育を重視する点に関しても私たちが学ぶべきものであり、大学の教授は、学生が社会に足を踏み入れる前における学生に大きな影響をもたらすことのできる最後の存在と言え、真剣に教育を行う教授は、学生に自分の仕事への情熱と他人への思いやりを示すものであり、学生も自然と自分のすべき物事へ真剣に接するようになる。京都大学の教授は科学研究よりも教育を重視しており、全人類のため教師として人材を育てている。これには中国国内の教育体制について改めて考えずにはいられなかった。

風光明媚な日立

清華大学学生代表

見学日時：2017年6月2日（金） 10:00-12:30

見学場所：株式会社日立製作所中央研究所

見学概要

2017年6月2日の午前、第20回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日代表団は日立製作所中央研究所での見学を行った。同研究所の技術戦略部門部長からは熱烈的な歓迎を受け、他、同研究所の状況等についての紹介があった。

日立製作所は電気機器製造会社であり、1910年に設立された。また同社は情報、通信システム、電力システム、社会・産業システム、電子装置システム、金融サービス等10の部門で構成されている。売上額は1兆343億円で、研

究開発費は3337億円、総従業員数は335,244名、研究者は約2700名(2015年度)となっている。

また企画部門リーダーのスピーチから、私たちは同研究所における研究開発方針の変化により研究開発組織も変化していくことを知った。現在の組織は主に以下のように区分されている。

- 一. 社会イノベーション協創センタ(CSI):東京、北米、南米、中国、欧州に拠点が分布している。
- 二. テクノロジーイノベーションセンタ(CTI):日本国内に拠点があり、技術開発を主導している。
- 三. 基礎研究センタ(CER):今後10、20年において応用が可能な技術の研究をしている。

この他私たちは、同研究所が1942年4月(昭和17年)に設立され、10年後、20年後のイノベーション研究を行い、現時点の研究も継続するという理念であることを知った。彼らは未来の課題の研究は現在の問題の解決に繋がる可能性があり、現在の問題の研究は、未来の研究における方向性の発見に繋がる可能性があると考えており、「社会イノベーション事業で世界に伝える」べく、努力を続けている。

日立の現在における研究課題には、電気エネルギー伝送プロセスにおけるロスを減らす新型Si系材料の研究、顧客の移動ルートを把握分析し、物品の配置位置の顧客購買率への影響を調査するといった人の行動や動向を把握するセンサー、医療・健康、画像診断等がある。

また将来的な研究課題には、物性(電子顕微鏡)、情報(大規模並列コンピューター)、ライフサイエンス(再生医療)、人の幸福度の向上の研究等がある。

日立にはフェロー制度と返仁会という独特の研究文化がある。簡単に言えば、フェロー制度とは特別な貢献をした技術スタッフに役員待遇を与えるもので、返仁会とは博士学位を持つ日立の従業員によるネットワークである。日立では顧客との共同開発の方法を推進しており、彼らは通常顧客の需要に基づきソリューションを提案し、顧客の意見を得た後に製品の生産を始め、その後顧客の意見を基に絶えず製品の改良を行っている。

会議の最後は中国人の研究スタッフによる音声合成技術TTS(text to speech)の紹介で、この技術についてはすでに生産及び使用をすることができるが、日立はそれに磨きをかけるために現在も洗練・整備を行っている。





これらの紹介を聞いた後、私たちはスタッフの案内の下、日立の一部の製品や研究所の敷地内の景色を見て回った。そこでは私たちは湖と山が織りなす景色に驚かされた。想像していた味気ない研究所の雰囲気とは全く異なっており、まるで観光スポットのような景色であった。この景色はとても素晴らしく、美しいハクチョウも見かけた。

製品の見学ではまず初めに3億年のデータ保存ができる石英ガラスを見学し、その後、指静脈認証システムの製品を見学した。日立は世界で最初に指静脈認証をセキュリティシステムに応用した企業で、同技術は現在最先端の技術である。同システムは赤外線を使い素早く正確に相手の身分を認証するもので、本人拒否率は0.1%以下、他人受入率は0.0001%以下である。同システムは自動ドア、自動車のハンドル及びATM機などで応用がされており、市場占有率は80%以上に達している。



日立は基礎研究と理論研究は互いに補完し合うもので重要であるとし、この二つを同時に行う方針をとっている。その他、ここでは経営陣が研究任務を設定し、末端の技術スタッフが建設的意見を提供するという研究方法をとっている。

なぜですか？

問：日立は製品及び技術の開発プロセスにおいてどのような戦略をとっていますか？

答：日立は顧客へのソリューションの提供のために、顧客との事前の意思疎通を行っている。そして顧客の要望を十分に把握した後、技術の開発やソリューションの提供を始める。技術の開発プロセスにおいては、さらに顧客と意思疎通を継続することで、速やかに顧客のフィードバックを獲得し、それにより製品の改善を行っている。そして、全体の技術ソリューションが整備された後、日立は製品または技術を顧客や市場に投入する。

問：日立の「フェロー制度」を知っていますか？日立はなぜこうした制度を実施していますか？

答：日立では優れた技術人材に役員待遇を提供しており、これが「フェロー制度」である。この制度により優れた技術人材は第一線の開発スタッフに指導や提案などを行っている。またこれは日立における一種の人材確保制度となっている。日本では一部の企業において日立のような「フェロー制度」を採用している。

問：日立はなぜ基礎研究と技術・製品の開発を並行して行っていますか？

答：日立の理念は今後10年、20年を目標とする基礎研究の実施と同時に現在の課題の解決に努力するというもので

ある。基礎研究は日立の将来の製品及び技術開発に保障を提供するもので、日立に持続的な発展をもたらしている。また製品及び技術の開発は日立の基本業務そして基礎研究に方向性を示しており、基礎研究と市場との関連性維持に繋がっている。

問：日立は技術の変化のスピードにどのように対応していますか？

答：技術は日ごとに新しくなっており、変化のスピードもどんどん速くなっている。多くの技術においては、開発が終了する前に別の新しい技術に取って代わられている。日立は「上から下」、「下から上」の二つの角度から技術開発を考え、基礎技術と製品市場の二つを出発点とし「技術-開発-製品」チェーンを考えることで、技術や市場の動向をしっかりと把握し、技術の変化のスピードに対応している。

感想

日立は世界トップ 500 の一員である日本企業である。1910 年の創業以降、同社は「優れた自主技術・製品の開発を通じて社会に貢献する」という企業理念に基づき、社会における事業革新を推進し続けている。今回の日立への訪問で、私たちは同社の最先端の科学技術やイノベーションの成果を体感することができた。

同社から私たちに紹介のあったいくつかの現在の研究項目は私たちに技術革新の魅力を感じさせるものであった。音声合成技術を通じ、PC 上でテキスト入力をすると言音生成が正確で流暢な人の話す声に近い合成音声が生成される。同技術に関しては中国も同社と提携を行っている。

私たちはさらに日立の病院運営改善シミュレーションシステムを見学した。同システムでは実際の病院の状況と同じ環境が構築され、バーチャルの病院において例えば先進的な計器の導入や各科のベッド数の調整などを行うことで、いかに病院の収益を増やすかを調べることができる。こうした変化についてはひとたび失敗すれば大きな損失に繋がるため、当然実際の病院において試験的に行うことはできない。日立は同システムにより中国の病院における患者が多すぎるという問題の解決に繋げるべく、同システムの中国への紹介を予定している。

また最も驚いたのは、日立が開発した 3 億年のデータ保存が可能な石英ガラスである。一つの普通の石英ガラスがレーザーにより情報をその中に記録することで、ブルーレイディスク並みの記録密度を有し、ハードディスクは 10 年しか保存できず、紙でも 1000 年しか保存できない中、石英ガラスについては 3 億年の保存が可能になる。しかも普通の光学顕微鏡でその中の情報を読み取ることができる。これは人類文明の億年単位での保存に繋がるもので、心が非常に奮い立つ発明である。

指静脈認証システムは人の生活をより便利にするものである。地下鉄駅などでカードを通す必要がなく、手をかざすだけでよくなれば、どんなに便利だろうか。これは指紋認証や虹彩認証に次ぐさらなる偉大な発明であり、より安全なものとなっている。現在の技術では写真を通じて指紋や虹彩の情報を獲得することができるが、指静脈の情報については獲得することができない。

日立では科学技術の偉大さと思議さを体験でき、科学技術のイノベーションへの興味を持つことができた。



一橋大学での考察と交流

北京外国語大学学生代表

見学日時：2017年6月2日（金）14:00-18:30

見学場所：一橋大学

見学概要

6月2日の午後、第20回「走近日企・感受日本」訪日団一行は、一橋大学で約4時間半の交流を行った。一橋大学は東京都国立市にあるトップクラスの国立大学で、「アジアのハーバード」と呼ばれている。同大学はまた日本で唯一の人文及び社会学分野専門のエリート大学で、日本における難関国立大学「旧帝一工神」の一員であり、トップクラスの商業学府である他、法学、国際関係、社会学、言語学等の人文社会学分野においても高い名声を得ている。

一橋大学に到着後、まず初めに同大学の先生や学生らが私たちを連れて、長い歴史や文化的含蓄のある兼松講堂や図書館を見学した。その後私たち一行は美しい自然環境のキャンパスにて記念写真を撮影した。

見学が終わった後、私たちは学生交流会の会議室に集まり、一橋大学中国交流センターの先生から一橋大学の歴史及び現状等についてのお話を聞いた。次いで、私たちは一橋大学の学生らと日中の婚姻状況や就職状況などのテーマに関して討論を行った。討論では、時折中国と日本の学生の意見がぶつかり合うなどし、こうした思想的な交流や学習を通じて私たちはお互いに友情や友好関係を深めることができた。

夕刻の懇親会では、私たち一行は一橋大学の先生や学生らと食事をしながら交流を図った。リラックスした楽しい雰囲気の中、私たちは一橋大学の方々のぬくもりと親切さを感じることができた。

なぜですか？

問：一橋大学の外国人留学生における中国人留学生の比率はどのくらいですか？

答：一橋大学は日本で唯一の人文・社会学専門のエリート大学で、非常に人気がある。同大学では中国人留学生の比率は半数近くとなっている。

分析：

1. 一橋大学は世界でも名高いトップクラスの国立大学で、学術的雰囲気も素晴らしく、人材を多く輩出している。
2. 一橋大学は日本でもトップクラスの商業学府であり、商学ランキングでは長年日本一の地位にある。また法学、国際関係、社会学、言語学等の人文社会学分野における実力もまた日本で三本の指に入っている。
3. 少人数制のエリート教育、10名前後、ゼミナール方式。



感想

一橋大学を訪れる前、すでに日本で留学をしている先輩が冗談で、毎週一橋大学のイケメンを見て目の保養をしていると言っていた。そして今回一橋大学を見学した後、先輩の話は完全に冗談というわけではないと思った。一橋大学の学生らは確かに顔立ちも良く、自分の考えをしっかり持っていて、思考も活発であったし、勿論女子学生も皆とても優秀であった。

一橋大学の学生らと日中の婚姻状況や就職状況について討論を始める前、皆は討論の際に誰も発言をしないなど気まずい雰囲気になることを心配していたが、討論の際、一橋大



学の女子学生が事前に8つの問題を準備していて、皆に問題の順番に沿って討論をするように段取りをした。また彼女は、発表時の総括がしやすいように皆の討論内容のキーワードをまとめていたが、こうした些細なところに彼らの周到さや優れた組織能力が表れていた。またこれも私たちと彼らとの差であり、彼らに学ぶべきところだと思った。

現代化とヒューマンケアが共存する企業

北京郵電大学学生代表

見学日時：2017年6月5日（月） 9:30-11:30

見学場所：株式会社三井住友銀行

見学概要

訪日団は2017年6月5日午前9時15分に三井住友銀行に到着した。そして同銀行のスタッフの案内により会議ホールに向かい、9時30分から同銀行のスタッフによる同銀行の歴史、関連分野、会社理念および主要業務についての紹介が始まった。その後、同銀行の中国籍のスタッフによる同氏の業務経験の紹介と質疑応答があった。ここでは訪日団の学生からの質問への詳細な回答が得られた。最後に訪日団の団長から三井住友銀行のスタッフによる紹介や発言についての総括及び銀行側へのお礼の品の贈呈が行われた。その後、ライジングスクエア1階のデジタル地球儀や2階のデジタルパネル(叡智の柱)を見学し、1階のホールで銀行のロボット及び代表者と記念写真を撮影した。

なぜですか？

問：三井住友銀行の中国語訳と英語訳では、なぜ順序が違いますか？

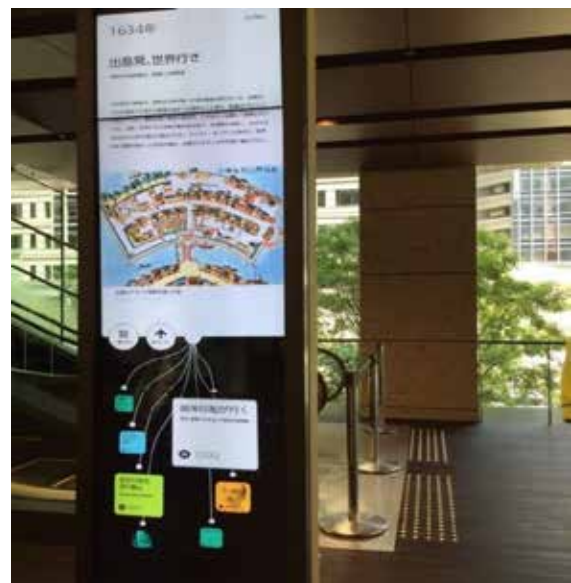
答：三井住友銀行の中国語訳は三井住友銀行で、英語訳ではSUMITOMO MITSUI BANKING CORPORATIONと、一つは三井が前で、一つは住友が前になっている。これは公平さとバランスの表れである。

問：三井住友銀行は中国の何ヵ所の大学において奨学金を設けていますか？

答：三井住友銀行は、上海外国語大学、華東師範大学、蘇州大学、浙江大学、中山大学及び天津外国語大学の6大学において「三井住友銀行(中国)有限公司奨学金」を設けている。

問：ここ三井住友銀行の本店に何があるか知っていますか？

答：三井住友銀行にはデジタル地球儀とデジタルパネル(叡智の柱)がある。



感想

三井住友銀行の建物内に足を踏み入れるとすぐにある種の近代的な感覚を覚えた。そして企業紹介の際には他者への思いやりが感じられた。例えば、同銀行は今回唯一、全部の見学において中国語を使い紹介を行った企業で、同銀行の歴史や理念そして企業文化に至るまでしっかりと理解することができた。スタッフも私たちが知らない専門知識からではなく、自分が銀行においてどのように働いているかといった紹介から話を始めることで、皆の緊張を和らげ、場の雰囲気を整えていた。その中で最も印象深かったのは、デジタル地球儀とデジタルパネル(叡智の柱)であった。デジタル地球儀はタッチパネルでしかも立体的、映像もあり、好きな箇所をタッチすると、その地方において現在発生している物事を見ることができた。また地球儀の表面には動いている雲や流動している海もあった。そしてデジタルパネル(叡智の柱)では日本の歴史、社会、経済等の紹介がされており、日本の銀行で最初の女性労働者が三井住友銀行のスタッフであったこと等、手軽にたくさんの情報を閲覧することができた。

大きな愛に国境はない

中国人民大学学生代表

見学日時：2017年6月5日（月）12:00-13:30

見学場所：日比谷松本楼

見学概要



日比谷公園にある松本楼は周囲の緑により引き立ち、こうして100年以上経営されてきた。訪日団一行は松本楼の外観を觀賞し、本格的な西洋料理を堪能し、松本楼社長からの梅屋庄吉氏と孫中山氏の過去の出来事についてのお話を拝聴した。社長のお話により私たちは、この小さな松本楼と歴史的な関係がある梅屋庄吉氏と孫中山氏の事績について知った他、お話を通じて「大きな愛に国境はない」とは何なのかについて知ることができた。

なぜですか？

問：松本楼がある公園の歴史及び他所との違いは？

答：松本楼のある日比谷公園は日本で最初の洋風近代式公園であり、また日本が初めて建造した公園である。日本の歴史においては、それまで独立した公園というものではなく、多くが寺院や神社の境内を公園化したもので、1873年(明治6年)に、日本に公園制度が生まれた。そして紆余曲折を経て日比谷公園は1902年(明治35年)に正式に着工し、翌年に開園された。

問：梅屋庄吉、孫中山両氏と松本楼との関わりは？

答：松本楼のオーナーは梅屋庄吉氏ではない。1903年(明治36年)、日比谷公園が西洋風の公園に倣い公園内にレストランを建設し、当時の貴族議員であった小坂梅吉氏が公開入札により経営権を獲得した。孫中山氏が日本を訪れた際は、梅屋庄吉氏と幾度も松本楼を訪れ、各界の有力者や志士と関係を深めた。その後、小坂梅吉氏の孫と梅屋庄吉氏の孫娘が縁組みを、また孫中山氏と宋慶齡女史が梅屋庄吉氏の仲立ちにより結婚し、宋慶齡女史は自らが愛用した現存する日本最古のヤマハピアノを松本楼に寄贈し、現在も1階ロビーに展示している。また松本楼の現社長は梅屋庄吉氏の曾孫である。現在では梅屋庄吉、孫中山両氏の名は、松本楼と切り離すことができないものとなっている。



感想

今回松本楼を見学して、日比谷公園の美しさ、松本楼の威厳、本格的な西洋料理の美味しさ以上に、梅屋庄吉氏の心の広さ、その国境を超越した大きな愛そして社会全体また人類全体への思いやりが私たちにとって印象深いものであった。

裕福な家庭に生まれた梅屋庄吉は、本来おしゃれで気ままな一生を過ごし、贅沢を尽くすことができたが、彼は幼いころから貧しい人々を思いやっていた。彼はチャレンジ精神に富み、14歳にして船で上海に赴き、当時賑わっていた上海租界における西洋の列強の鼻高々な様子と中国の人々の地位の低さとの違いを目にし、中国民族の発展の手助けをしたいとの思いが生まれた。1895年、香港で孫中山氏と知り合って以降、二人は意気投合し、その後梅屋庄吉氏は全力を挙げて孫中山氏の革命への資金援助を行い、中国の革命事業における自らの貢献をした。

日中両国に関して、確かに歴史的には友好的な付き合いがあり、また戦争の時期もあった。友好的な時期における交流については平和環境における交流と言えるが、梅屋庄吉氏が戦争時期において一日本国民として孫中山氏の手助けをし、中国の救済のために力を尽くしたことは、その先見性の高さが感じられる。梅屋庄吉氏は一国の視点で問題に対応するのではなく、彼は社会全体そして人類全体の視点から考え、孫中山氏に対し国境を超越した手助けをしたのである。

その一方で、現在、私たち大学生は勤勉さこそあるが、信念が欠けているようである。キャンパスでの私たちは、ほしいままに青春の素晴らしさを謳歌しているが、それと同時に多くの時間が無駄に流れている。今日では報国の志を立てることは稀なこととなっており、真に天下のため志を立て、平民のため天命を全うし、聖人のため孔孟の教えを継続し、万世のため太平を構築する人はほとんどいない。そしてこうした責任は私たちにも掛かっているのだろうか。国籍や専攻を問わず、高等教育を受けている、特に中国国内での一流とされる大学の学生としては、社会、世界、人類についての思いが心に少しもなければ、それは自分の学問に申し訳が立たないのではないだろうか。これは私たち各人がそれぞれの分野における大人物にならなければいけないということではなく、心に「社会をより良くする」という思いを持ちながら学習や仕事をすることで、功績や業績の如何を問わず、21世紀における大学生の身分に恥じないようにするということである。自分の全てを捧げるとまではいかなくとも、最低限個人の目標を追求すると同時に社会全体そして人類全体にわずかでも利益をもたらすことが大切である。

梅屋庄吉氏の国境のない大きな愛は、彼の責任感そして自身の使命感への認識を示している。私たち若者も彼に学び、自分の社会的責任感を高め、その大きさを問わず自分の使命と向き合わなければならない。

帰国—中国大使館訪問にて

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2017年6月5日（月）14:00-15:30

見学場所：中華人民共和国駐日本国大使館

見学概要

初めに、訪日団の程海波団長からあいさつがあり、今回の訪日における数日間の活動内容の紹介と、今回の中国大使館における交流への期待を述べられた。

その後、駐日大使夫人の汪婉参事官からあいさつがあり、その中では今回代表団の訪日に際し支援をされた関係者への感謝の言葉と、第11期の中国駐日大使就任以降(2010年以降)における日中の複雑な関係についての紹介があった。

次いで、訪日団の6大学の各学生代表者から「文化と発展」、「訪日期间における感動」、「美しく優しい日本」、「ホームステイでの感想」等のこの数日間の日本滞在を通じた感想の発表があった。

その後、汪婉参事官は訪日団の学生が提起した問題や疑問に対し丁寧な回答を行い、さらに私たちへの期待と祝福の言葉を述べられた。そして最後に皆で記念写真を撮り、中国大使館への訪問をつつがなく終えた。



なぜですか？

(1) 尖閣諸島事件の発生の原因は、日本側が当時の日本国内の緊張を和らげるためであったかもしれない。当時日本は民主党が政権を握っており、政治的な摩擦が際立っていた。その他福島原発事故も国民のパニックを引き起こしていた。そのため日本は国内の危機の緩和のため、人々の注意力を尖閣諸島の問題に移行した可能性がある。



- (2) 2012年は日中の国交において最も緊迫した時期であった。日本が尖閣諸島を購入したことは中国国民による抗議を引き起こした。その後2014年になり、自民党が政権を握り、APECの会議期間中、習近平総書記が安倍首相と会見したことが両国関係の転換点となった。現在日中関係は比較的安定し、改善に向かっているが、未だ多くの複雑で敏感な要素が存在しており、両国関係は正に「前途多難だが前進あるのみ」という重要な時期にある。
- (3) アメリカを除き、先進諸国の中では日本の人口が最も多く、「少子化」の問題がある中でも1億2000万の人口を維持している。また日本の国土面積はイギリス、フランス、ドイツ等の先進国よりも大きい。そしてEU20数ヵ国と中国との貿易総額でも5000億ドル程度に過ぎない中、日中の昨年の貿易総額は2700億ドル以上に達している。
- (4) 日本在住の華人・華僑は約80万人で、さらに毎年平均10万人の中国人学生が日本へ留学している。昨年、中国を訪れた日本人は200万人台に減少している。

感想

大使館でのこの日の午後は、暫しの帰国をしたような感覚であった。

大使夫人である汪婉参事官はとても上品で、彼女自身はまた東京大学において清朝末期の歴史研究をした大家であり、親しみやすい方であった。汪婉参事官からは第11期の中国駐日大使就任以降(2010年以降)における、複雑で困難な日中関係についての説明があった。説明を聞いた後多くの感想が生まれ、日中関係の友好的な発展に何らかの貢献をしていきたいと思った。統計では、90%の日本人は中国への好感がなく、しかも多くの日本人の中国への印象は過去の物資が欠乏していた時代のままとのことで、その原因としては日本のメディアによる客観性に欠けた報道がある。これはとても残念な事であり、日中両国は一衣帯水の隣国であることから、皆が客観的な態度で問題に対応しなければならず、事実に基づき説明をしていく必要がある。

汪婉参事官は訪中をする日本人の多くは公務によるもので、自発的なものはとても少ないというお話をされていた。これも日中両国間の交流不足が反映されていると思う。意思疎通によって初めて理解ができるため、交流は一際重要なものである。これには私たち若者世代が自発的に日本人の人々との交流を拡大するなど、新たな認識を開拓していく必要がある。両国間の誤解を解き、友好を促進するには政府の働きのみでは不十分である。

また汪婉参事官のお話を聞いてから、国家間の政治問題に対して新たな認識が生まれた。一部の突発的な政治問題(例えば尖閣諸島の問題)の出現の原因には多くの要素が関わっており、私たちは冷静にそうした問題への分析や判断をすべきであると思った。また同時に、国の民である私たちの行いは社会のルールや法律の求めに合致する必要がある、日本車を破壊する、日系企業の工場を焼き払うといった過激な行為はしてはならず、緊急時であるほど、国に迷惑をかけるべきではないと思った。

この他、各大学の代表学生の発言からは、幾度となく伝統文化の継承の問題が提起されていた。ある学生からは、ホームステイの際、日本の中学生の教科書には多くの中国の伝統的な詩歌が収められていたことを知ったという話があった。また私のホストファミリーの娘さんも魯迅の作品を読んでいた。また日本では座禅や茶道などを体験したが、これらは実際のところ中国から日本に伝わったものである。中国の伝統文化には多くの素晴らしさがあり、伝統文化の継承というのも、その形式により内在する精神の伝承をするということである。経済が急激に発展している現代社会において、精神の拠り所は私たちにとってより重要なものになっている。祖国における青年世代として私たちはしっかりと伝統文化を学び、中国の伝統文化の継承をしていく必要がある。

総合商社三菱商事

清華大学学生代表

見学日時：2017年6月5日（月）16:00-19:00

見学場所：三菱商事株式会社

見学概要

三菱商事は日本国内及び海外の約90カ国に200以上の拠点と1200社以上の提携パートナーを持つ日本最大の総合商社である。地球環境・インフラ事業、新産業金融事業、エネルギー事業、金属、機械、化学品、生活産業の7つのグループに商業サービス部門を組み入れ、絶えず事業を拡大し、提携パートナーとともに現地での開発、生産、製造等を行っている。将来的に三菱商事は公明正大のモットーに則り、より良い社会の構築を己の責務とし、全力でさらなる成長の実現を目指していく。

三菱商事の創業以来の社是である『三綱領』は、所期奉公（事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する）、処事光明（公明正大で品格のある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する）、立業貿易（全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る）というものである。

見学概況

2017年6月5日午後、中華人民共和国駐日本国大使館への訪問を終えた第20回中国大学生訪日団一行は、三菱商事株式会社を訪れ、同社の顧問である松井氏、調査部の小山氏らスタッフからの熱烈な歓迎を受けた。

初めに松井氏から歓迎の挨拶があった。その中で松井氏は、私たちの訪問に中国での勤務当時を思い起こしたと述べられた。松井氏はかつて中国で4年間勤務した経験があり、その4年間を通じて中国への見方が変わり、中国の発展の奇跡について知ることができたとのことで、松井氏は文化交流の重要性を強調した上で、私たちが若いうちに日本に来て交流できることへの羨ましさを述べられた。そして挨拶の最後には松井氏から、私たちがこうした交流・学習の機会を活用し、今回の訪日期間において多くの収穫が得られることを願っているとの言葉を頂いた。

松井氏の挨拶の後、私たちは三菱商事株式会社の紹介ビデオ「The Power to Create the “Next”」を観賞した。この紹介ビデオでは主に三菱商事株式会社の世界的な事業展開の状況と企業文化が紹介されており、同社の事業を可視化することで同社についてより良く知ることができ、また皆の三菱商事への興味を引いていた。

訪日団の学生に三菱商事についてより良く知ってもらうため、同社調査部の小山氏からは同社の世界における位置づけ、同社の発展の歴史、投資対象、中国における事業及び社会貢献活動についてさらに詳しい紹介があった。これらの紹介を通じて私たちは、三菱商事が多くの業界をカバーする総合的企業で、自社の利益のみならず社会利益を重視し、積極的に社会貢献に取り組んでいることを知った。小山氏からの紹介の後、学生らは同社の福利、事業、企業文化や方針などについて松井氏に質問し、多くの回答が得られた。



ここで指摘すべきは、日本政府の「一帯一路」への対応が不明確である状況において、三菱商事は「一帯一路」の将来を見通し、積極的に参与し貢献をしている。こうした点こそが、三菱商事が世界で活躍できる理由なのかもしれない。

以上の会社紹介の後、私たちは三菱商事のスタッフと交流を図った。彼らは私たちのために美味しい食事や飲み



物を準備してくれ、皆は楽しい雰囲気の中交流することで、同社についてさらに知識を得ることができた。

そして懇親会が終わり、雨が降る中、三菱商事の皆さんとお別れをした。

なぜですか？

問：三菱グループと中国のエネルギー業界との密接な関係について知っていますか？

答：三菱グループは中国のエネルギー市場には直接参入していないものの、中国のエネルギー業界における三大国営企業である中国石油天然気集团公司、中国海洋石油总公司、中国石油化工股份有限公司と密接な交流及び提携を行っている。三菱グループのトップもまた、福島での原発事故により電力が不足した際、中国の三大国営エネルギー企業が日本に大きなサポートを提供し、被災地におけるエネルギー危機が乗り越えられた。最近の中国でのメタンハイドレート採掘成功について、三菱グループとしても中国との技術協力を展開し、エネルギーにおける新時代を切り拓いていきたいと述べている。

問：三菱グループは中国における水質汚染対策産業の発展の見通しについてどのように見えていますか？

答：中国における水質汚染対策業界は発足間もなく、同市場はとても大きく、三菱グループとしても自身の汚染対策技術に自信を持っているが、企業は利益を追求しなければならず、水質汚染対策における投資額は非常に大きく、投資回収の期間が長い。そのため、三菱としては中国国内または世界において新たな提携パートナーを模索し、共同で新たな事業展開をしていくことを望んでいる。

問：横浜の三菱みなとみらい技術館について教えてください。

答：横浜にある三菱みなとみらい技術館は、三菱が環境、宇宙、海洋、建築、エネルギー等人の生活に関する技術の紹介をメインとした最先端の科学技術展示館である。ここではロケットエンジンの実物、原子炉、MRJ、人工衛星等の各種模型があり、日本の最先端技術の現状を知ることができる。また同時に、館内では沢山の楽しいゲームを体験することができ、見学に来る子どもたちは遊びを通じて知識を得、さらに興味を呼び起こすことができる。

感想

この日の午後私たち訪日団一行は三菱商事を訪れ、同社のスタッフによる紹介を聞いた後、懇親会に参加をした。三菱商事は日本国内及び海外の約 90 ヶ国に 200 以上の拠点を持つ日本最大の総合商社で、事業分野は地球環境・インフラ事業、新産業金融事業、エネルギー事業、金属、機械、化学品、生活産業等各方面をカバーしている。今回三菱商事を見学できたことは非常に幸運であった。

三菱商事の企業理念は印象深いものであった。その企業理念である三綱領は、所期奉公、処事光明、立業貿易で、企業としての位置付けはとて高く、「全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る」というものである。私はこれこそ中国の企業が学ぶべき点であると思った。三菱商事は多くの重要分野において非常に大きな業績をあげており、それらの分野における進歩をもたらすなど、世界の工業、経済等の発展に大きな貢献をしている。三菱商事は 1918 年に創業し、間もなく 100 年を迎える。この 100 年においては、戦後の解散等の紆余曲折を経験したが、三菱は三綱領の理念に則り、努力を続け、最終的に現在の規模までに成長した。こうした精神は私たちが学ぶべきものだと思う。中国において創業から 100 年以上の歴史を持つ企業はとて少ないが、日本では三菱商事のような 100 年以上の歴史を持つ企業はとて多い。事業をするには、高い位置付けと着実な姿勢により万難を排してこそ最終的に大きな業績を実現することができるのである。

私の専攻はエネルギーと動力であるため、三菱商事のエネルギー分野にはとて興味があり、質疑応答の機会に三菱商事と中国企業との提携やメタンハイドレート関連の問題について質問をし、満足できる回答が得られた。三菱商事のトップもまた中国企業との提携を強化し、エネルギー事業の発展を推進していくという意向を示し、さらに東日本大震災時の中国のエネルギー企業によるサポートへの感謝を述べられた。私は、世界各国の発展にとて非常に重要なエネルギー分野においては、提携を強化しウインウインを目指すべきであると思う。三菱商事は中国が提唱する「一帯一路」構想へも積極的に参与しており、今後も中国企業と素晴らしい提携関係を構築していくと確信している。

「エコと経済」の両立は不可能ではない

中国人民大学学生代表

見学日時：2017年6月6日（火） 9:30-11:30

見学場所：ホテルニューオータニ東京

見学概要



訪日団の最後の見学場所はホテルニューオータニで、担当スタッフの案内の下、私たちは同ホテルのエネルギー制御施設、水処理施設、生ごみ処理施設を見学し、それら施設に関する解説に耳を傾けた。中でも水処理施設や水の循環のプロセス、そして生ごみからの堆肥作成と環境に優しい食品のサプライチェーンについて重点的な紹介があった。そして見学の最後にはホテル内の日本庭園を見学し、都会の中での自然の素晴らしさを体験した。

なぜですか？

問：ホテルニューオータニの新しさは何処に表れているのか？

答：一般的に、ホテルにおける新しさは、建物自体の新しさ、装飾の新しさ、サービススタッフの新しさに表れるが、より高度なものとしては理念の新しさがある。ホテルニューオータニは日本のホテル業界のトップとして豊富な資金力を有しているが、社会の発展プロセスにおいて、同ホテルは利益の追求を至上命題としてきたわけではなく、経済効率と環境保護、資源の節約を組み合わせ、持続的発展が可能な経営路線を歩み、真に企業の社会的責任を果たしており、一見「魚と熊の掌（両立不可能の意味）」である経済効率と環境・資源における調和を実現し、互いに補完し合っている。



問：環境への優しさは本当に経済効率をもたらすのか？

答：ホテルニューオータニにおけるエネルギー制御と資源の循環再利用は、同ホテルの管理・運営における大きな特徴であり、これら環境対策は企業の社会的責任の実行と同時に、ホテルニューオータニにより良い経済効率をもたらしている。担当者の紹介によると、水の再生の項目のみで、年間200万人民币元相当の経費を節約しているとのことである。こうしたことから、「澄んだ水と青い山こそ金山・銀山である」という言葉は確かに道理にかなったものと言える。

感想

魚と熊の掌は両方同時に得ることはできない、かつて多くの人がこの言葉を使い環境保護と経済発展の関係を表現してきた。しかしホテルニューオータニのエコ施設の見学を終え、「グリーン経済」は机上の概念ではなく、目の前に実在していたことがわかった。

ホテルニューオータニは水処理施設を自ら建設し、廃水を利用可能な水に再生し客室のトイレやローズガーデン用に活用している。水処理施設そのものについては私たち人民大学の環境学院の学生二人にとっては馴染みがあり、彼らはかつて北京高碑店の污水处理場を見学したことがあった。だが、こうした施設が財政の支援を受ける污水处理場ではなく一ホテルにあることに、彼らは非常に啓発を受けたようだった。多くの場合、私たちは財政がどのように市場と提携し、環境保護・資源節約関連プロジェクトに融資をし、プロジェクトの実行を推進するかを考えがちである。しかし、考え方を換え、一部の環境対策プロジェクトを完全に企業へ移行することも可能だと考えられる。例えばホテルニューオータニでは、水の再生により毎年約 200 万人民币元の経費を節約しており、企業の運営コストの削減のみならず、水資源の節約にも貢献している。中国の企業、特にサービス業においては、廃水の汚染度合が工場よりも低いため、このような水の再生技術を使い企業自身の経費節約をすることはできないのであろうか。政府は優れた PPP モデルの構築、公共事業の発展の推進以外にも、企業の公共事業への依存からの脱却を推奨し、廃棄物を循環利用することで将来のために資源を残す必要がある。

資源以外の面では、環境に優しい食品のサプライチェーンについても大きな啓発を受けた。ホテルニューオータニでは生ごみへの集中処理を行い、堆肥設備により生ごみを肥料とし、食品供給業者へ提供し、業者はその肥料を使い作物を栽培しホテルに提供という循環を形成している。こうしたモデルは双方の経費節約のみならず、ホテルにおける食品の安全をより良く保証している。仮に上述の資源の節約が正の外部性を有し、直接的に後の世代に幸福をもたらすとすれば、「生ごみ-肥料-食糧供給」のモデルは間接的に社会全体に幸福をもたらしていると言える。

日本の社会全体には、環境の保護や資源の節約に関して私たちが学ぶべき点が沢山ある。例えばハイブリッドカー、電気自動車の幅広い利用、都市の緑化における自然回帰、生態ルールに基づいた管理、ごみの分類回収等、これらはいずれも政府・企業・市民の三者の協力による環境保護への努力を反映している。

現在、持続可能な発展の理念が世界的に認められ、汚染の後に対策を講じるという発展方式は今後増々立ち行かなくなっていく。中国経済のニューノーマルにおいて、環境保護と経済発展の両者の間は単純なゼロサムゲーム、トレードオフの関係ではなく、新たな理念・技術を通じてうまく調和させることで共に発展させることは可能なのである。マクロ経済の転換という契機を利用し、経済発展におけるグリーン化を確実に推進し、環境保護と経済発展を「魚と熊の掌」から国の発展における両翼・両輪にしていく必要がある。

歓送会

北京外国語大学学生代表

日時：2017年6月6日（火）12:00-13:45

場所：ホテルニューオータニ東京

概要

歓送会では、先ず中日友好協会の程海波副秘書長から挨拶があり、皆が今回の訪日活動の成功の祝杯を挙げた。その後、訪日団の各6大学の代表者からそれぞれ今回の活動への総括があった。皆今回の訪日は、日本を感じ、日本を知り、日本を好きになった素晴らしい体験であったと感じている。きれいで整然とした環境、細やかなサービス、ホストファミリーの心遣いの行き届いたおもてなし、そして進んだ企業理念などいずれも私たちにとって印象深いものであった。皆の輝く目からは、彼らの今回の活動を通じての成長が見えるようで、彼らの心の中に生まれた日本への興味と好意が感じられるようであった。次いで『和你一樣(あなたと同じ)』を合唱し、歓送会は終了した。合唱が終わる時、それはつまりお別れの時であり、一部の学生からはつらさでのどが詰まったような声が聞こえ、またホストファミリーへの名残惜しさの眼差しを目にした。

今回の訪日では、知識や日本への新たな認識のみならず、多くの思いやりや温かさを体感することができた。私たちは自分が見て聞いたことをより多くの人へ伝え、彼らに日本の人々の友好的な姿勢を感じてもらい、日中の友好に自分なりの貢献をしたいと思う。



なぜですか？

6月6日、歓送会のこの日、日本の各新聞のトップには「安倍晋三首相が5日夜に都内での活動の際の講演で、中国が提唱する『一帯一路』構想について、条件が整えば協力をしていくと言及した」とする記事が掲載された。

チャイナネットの情報によると、6月6日付で外交部の華春瑩報道官が定例記者会見において、日本側の「一帯一路」における中国側との協力の意向に関して、「一帯一路」は日中両国の互惠協力、共同发展を実現する新たなプラットフォーム、「モデルケース」であり、日本側の「一帯一路」の枠組みにおける中国側との協力を歓迎すると述べている。

安倍首相

関連ニュースはこちら

中国の一帯一路「自由で公正に」

毎日新聞 2017年6月5日 21時11分 (最終更新 6月5日 21時20分)

中国 政治一般 アジア・オセアニア 速報 国際



安倍首相 = 中村延徳撮影

安倍晋三首相は5日、東京都内で講演し、中国が提唱する現代版シルクロード経済圏構想「一帯一路」について「国際社会の共通の考え方を十分に取り入れることで、環太平洋の自由で公正な経済圏に良質な形で融合していくことを期待する」と述べた。同構想は具体的な計画に不透明な部分も多く、自由で公正なルールに従うよう中国にくぎを刺した。

一帯一路はインフラ投資を通じ、アジアからアフリカ、欧州につながる地域の発展を目指すプロジェクト。中国主導のアジアインフラ投資銀行（A I I B）が資金面で支えると

みられ、首相はA I I Bを念頭に「（インフラは）透明で公正な調達によって整備されることが重要だ。借入れをして整備する国にとって、債務が返済可能で、財政の健全性が損なわれないことが不可欠だ」と指摘した。

首相は米国が離脱した環太平洋パートナーシップ協定（T P P）の発効を追求する考えを改めて強調。中国が主導する東アジア地域包括的経済連携（R C E P）についても「T P Pに結実したルールを基礎としてこそ、質の高い協定ができる」と指摘した。日本と欧州連合（E U）との経済連携協定（E P A）の早期合意を目指す考えも強調した。【遠藤修平】



感想

皆がこぞって集合写真を撮り始めた時になって、初めて慌ててどうして良いかわからなくなった。それと言うのも、どうお別れをしていいかわからないまま、ここを離れなければならなくなったからである。この時まるで子どものように、多少のやりきれなさを感じていた。このやりきれなさには多くの無念と名残惜しさが込められ、どちらの比率が大きいのかはすぐにはわからなかった。

歓送会が終わり、皆が名残を惜しみ、ホストマザーの多くは涙していた。わずか2日間の関わりが人と人にこれほど深い絆を生み出したのである。これは真心を通わせた交流であったと言える。私たちは素晴らしいものを発見するという心を胸に日本を訪れ、彼らは親切で細やかな心遣いで私たちをもてなしてくれた。この8日間の体験について全てを完全に記憶することはできないかもしれないが、彼らの優しさはずっと記憶に残り、常に私たちが温和でしっかりした人間であるよう戒めてくれると思う。

最後にバスに乗り窓の外の彼らに手を振る時になって、初めて私たちは大人らしく今回のお別れと向き合うことができた。心残りが有るからその後のより多くの交流があり、お別れは次回の再会のためなのである。そして再会の時には私たちが今以上に立派になっていたいと思う。

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第20回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 清華大学

氏 名： 顧欣宇

この日の午前10時、私たち5人は清華大学の北東ゲート近くのサブウェイに集合し、一緒に車で首都国際空港に向かい、11時に到着した。飛行機は当初14:30の離陸予定だったが、2時間遅れたため私たちは約5時間の自由時間ができた。普段これほど長い自由時間はないので、私にとってはこれ以上ない楽しい時間だった。私は普段携帯に保存している気に入った言葉などをノートに整理し、高価な昼食を食べ、頼まれた商品を免税店で購入するなどしてから飛行機に搭乗した。

先生方の手配はとても行き届いていて、私たち清華の学生は同じ列に座った。出発前、皆は互いに見知っていたわけではなかったため、機内で私は王徳標、韓儲銀さんと色々な話をし、互いに生い立ちやポリシーなどについて語り合ったことで相手の人となりを知り、親しくなることができた。私たちはさらに実家や恋愛状況、そして価値観などについて語り合った。

おしゃべりの時間はあっという間に過ぎ、私たちは関西国際空港に到着した。機内の日本人乗務員について私が最も印象深かったのは、とても礼儀正しかったことである。飛行機を降りた私たちは、関西国際空港のビュッフェレストランでの夕食となった。これは私にとって初めて日本式のレストランでの食事となった。これまで寿司や刺身といったものは食べたことはあったが、本場の日本料理の食事環境や食品自体へのこだわりはとても印象深いものであった。

大阪での時間はこの食事の時間のみであった。食事の後バスで京都のホテルに向かう際、関西空港は海を埋め立てて造られたと知った。私たちは今海の上に浮かんでいるのである。耐えきれずに窓から外の海の景色を眺めたが、本当に美しかった。私はこの静かな美しさを何と表現すればいいのかわからない。驚くほどの美しさであった。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 呉成庚

多忙な学生生活から抜け出し、5月30日午前に訪日活動が正式に始まった。

各大学の学生が続々と空港に到着し、訪日団のメンバーが集結した後になって、飛行機が遅れるという知らせを受けた。しかしこのフライトの遅れにより、私はその後今回の訪日における大きな意義について知ることとなった。

本来14時過ぎのフライトが16時半に遅れたため、日本に到着したのは現地時間の21時過ぎであった。この遅れは本来の計画を乱し、空港のレストランもサービス時間を1時間延長したほどであった。税関を抜け、ゲートから出るとすぐ、私たちを待っていたレストランのスタッフ、そして横山先生やガイドの中島さんそしてJTBのスタッフを見かけた。彼らはきっと長い時間待っていたであろうが、皆笑顔で私たちを出迎えてくれた。横山先生は口数がさほど多くなく、想像とは違っていたが、私たちを辛抱強く待っていてくれたのにはとても感動した。またガイドの中島さんは車内で様々な紹介や注意事項の説明などをしてくれ、多少の疲れを見せながらも私たちに笑顔で細やかなサービスしてくれた。

深夜の京都には北京のようなにぎやかさはなく、小都市のような静けさであった。日の出を静かに待つその様は、来て間もない私も同じであった。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 陳卓

飛行機の轟きと共に私たちを乗せたNH980便は高度を上げ、北京の夕暮れの中、今回の訪日の旅が始まった。

1万メートルの上空では、その視界は地上とは全く違っており、遠くには黒い大地とダークレッドの夕焼けが繋がっていた。また飛行機は宇宙に浮かんでいるように時に左右に揺れ、時に上下に大きく揺れていた。雲と霧に包まれると空が真っ暗になった錯覚を与え、雲から抜けると四方は明るく広々とし、安心感をもたらしてくれた。こうした環境、1万メートルの上空にある飛行機の中で、私は「カニかなんかの一對のボロ爪になってしいんとした海の底を急いで渡ってたほうがよかったね」の詩を思い出し、静けさの中の暗い波とうねりは、海の向こうの日本はどのような国なのか、日本にはどういった人々がいるのか、今回の訪日ではどのような出来事が待っているのだろうかということを考えていた私のこの時の気持ちを表していた。だから私は日本への到着を待ち望みながら、高度11,172メートル、機外温度マイナス52度、飛行速度982km/h、目的地まで1時間12分といった飛行機の運航状況と、現在渤海上空にあり、すでに山東半島の最北端を過ぎ、韓国を通過中、日本の領空に突入といった地図上の飛行機の位置を見ていた。そして夜9時過ぎにやっと関西国際空港に到着した。

この時間の日本は夜の闇に佇み、高層ビルの灯りだけが視界に入った。明日には日本をこの目にすることができ

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 徐杭

「人生においては、歩いて歩いても、いつもちょっとだけ間に合わない。」

訪日初日、残念なことに雨で飛行機が遅れたが、その退屈で仕方ない時間を使い、『歩いて歩いても』を読み終えることができた。この日本の映画監督の著書は、日常の料理のように、日本の家庭内の些細な感情をきめ細やかに描き、まるで映画を観ているかのような感覚であった。そしてその画面は私に、間もなく降り立つ土地への一種の言葉にできない親近感を感じさせた。家族間に絆が溢れながらも話が合わず、互いに傷つけ合う無力さ、そして愛する人へ胸の内を打ち明ける際に常に一步遅かったりするという無念さなど、私たちはこれほど多くの共感できるものを持っているのである。

飛行機を降り、あわただしくホテルに向かった。すでに夜も遅く、道中は自分の中にある興奮を抑えることができなかった。2年前からこの国との繋がりを運命づけられていた私が初めてこの地を踏みしめたのである。どれだけ感情が高ぶっても大袈裟ということはないだろう。窓の外の夜の闇に眠っている街を見ながら、心に突然形容しがたい喜びが溢れてきた。まるで明日の朝にはこの街にサプライズを届けることができるかのような感情である。ちょっと幼稚かもしれないが、自分では密かに楽しんでいる。静かな夜の街に身を置くと、この街に静かに受け入れられたような感覚が生まれた。だが2日間という時間では、このあでやかな京都という街の一部しか知ることができないであろう。私たちには歩いて歩いても、いつも手に届かない美がある。これについては将来にとっておこう。

最後に、初めまして日本。どうぞよろしく。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名： 北京郵電大学

氏 名： 張少臻

この日私たちは早くに空港に到着した。皆は初めての出国ということで、今回の訪日の旅への期待と緊張が入り混

じっているようであった。

訪日のスタートは搭乗手続からで、ANAスタッフの「いらっしゃいませ」から訪日の旅が始まった。

残念な事に天候が理由で、私たちの飛行機の出発が遅れることになった。中国では日常的に飛行機の遅れがあるため、ひどい遅れでなければ、2、3時間の遅れであれば人々は受け入れる。しかしながらANAの機内で、私は思いもかけず日本人の素晴らしさ、または賞賛すべき点を見つけた。

まず初めに、乗務員がお詫びの言葉を繰り返していた。飛行機の遅れは彼らの責任ではないのだが、彼らのお詫びの言葉にANAの乗客への尊重や思いやりを感じ、遅れたことへの不満も消え去った。さらに素晴らしかったのは、本来3時間のフライト時間を道中急いだことで、2時間程度で目的地に到着したことである。出発が遅れたため到着した時は遅い時間ではあったが、近くにいた日本人のおばあさんの「よかった、間に合った」の一言には心が温かくなる思いがした。ANAが1時間という時間を取り戻してくれたことで、私たちは1時間多く二日目の準備をすることができた。これには感謝の思いである。

日本に到着後、私たちはとても優秀なガイドの方と対面した。彼女の流暢なネイティブのような中国語にはとても驚かされた。そして皆に交通費として1万円が渡された。交通費までも気に掛けてくれていたとは知らなかったので、嬉しかった。こうしたことから日本人の細やかさと日中双方の今回の活動への重視度合が感じられた。

初日は飛行機とバスでの移動で終わったが、些細なところから性格というものは見て取ることができる。また、日本に到着しての感想だが、出国前は言葉の通じない国に行くことに不安を感じていたが、飛行機を降りて、または京都に到着して、多くの漢字と中国人とさほど変わらない外見に、出国したという感覚すら感じられず、まるで中国のどこかの街に来たような感覚であった。日中の文化にはやはり多くの部分で共通点が存在している。

もう時間も遅くなったので、これ以上については書かないでおく。今日は移動のみで、日本に関して大して知識を得たとは言えないので、二日目のスケジュールに期待している。

日 付：5月30日（火）1日目

大学名：北京交通大学

氏 名：申婉玉

多少の緊張の混じった期待の中、私たちは訪日の旅をスタートさせた。

雲の上から「井」の字のように並んだ中国の田畑が次第に青い空と一体になった海面に変わる様を眺めながら、間もなく知っているが馴染みのない国に到着するのだと急に気が付いた。そして機内では、私はすでにこの国の優しさを感じていた。

優れたサービスは航空会社が備えるべき特徴であるならば、私を感動させたのは必然的に心温まる些細な部分である。機内では乗務員から4種類のおもちゃから一つを選ぶように勧められた。初めはそれらにさほど興味はなかったのだが、折り紙のパッケージを開けると、その細やかな紹介と中身の彩り豊かさに引き付けられた。優れた企業というのは決してすべての面で他者より優れているわけではなく、その違いというのは、思いついたことを実行するかしないかである。こうした点は正に日本企業の「人間本位」の管理理念を表している。

乗務員のお別れの挨拶とともに、私たちは日本というこれから私たちに多くの知識と感想をもたらす国に入国した。これからの数日、まさに税関のやさしいピンク色のカウンターのように、厳密さは冷たさとは違い、細やかさは融通がきかないのとは違い、そして私自身こうした優しさを周囲の人にもたらしたいと願うように、これら私を感動させる多くの場面が繰り返されると信じている。

そして、明日はさらに気持ちの良いものになると信じている。

日 付：5月31日（水）2日目

大学名： 清華大学

氏 名： 連鵬龍

お早う、京都。

今日の予定では午前にもムロン京都太陽を見学し、午後に京都大学を訪問することになっていた。訪問先に向かう道すがら、中島さんから道中の観光スポットの歴史や文化についての紹介があり、この長い歴史を持つ古都には、毎年数多くの観光客が訪れているとのことであった。

京都において長い歴史があるのはその文化だけではなく、京セラ、日本電産、任天堂といった企業も長い歴史を有している。私たちが午前に見学したオムロンもその中の一社である。大学一年の夏に参加した「中国大学生光電設計コンテスト」はオムロンが支援していたのを覚えている。今回見学したオムロン京都太陽はとても特徴があり、同社は中村裕氏とオムロン創業者の立石一真氏が共同で設立した会社で、障がい者を主力とした工場である。「No charity , but a chance!」同社では障がいを持つ従業員に自らの価値を実現する機会を与えている。そしてまた同社からは国際的大企業としての心と責任感についても考えさせられた。

純和風の昼食の後、私たちは京都大学を訪れた。英語は多少苦手だが、それでも私はできる限り京都大学の学生と交流を図った。京都大学は日本でもトップクラスの大学で、その自由と独立の精神により多くの人材を育成しており、現在まで9名のノーベル賞受賞者と2名のフィールズ賞受賞者を輩出している。京都大学に流れる自由と反発の血液には尊敬すべきものがある。私自身の考え方とは少なからず違っているため、それらをすべて受け入れるのは難しいが、それでも私はこうした個性のある大学に頭が下がる思いである。

さようなら京都大学、また会いましょう。

お休みなさい、京都。

日 付： 5月31日（水）2日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 陳子鑫

今日私たちはまずオムロン京都太陽株式会社の工場を見学し、同社の精神と文化について学んだ。企業精神は「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」というもので、これは創始者の立石一真氏がアメリカでの調査の後に提唱した企業理念である。この理念は企業家としては目新しいものであり、企業家が利益の最大化や効率の最大化に重点を置くのではなく、より良い社会の構築を目標とすることからは、社会全体への貢献を自身の責任とするような大きな心が感じられる。またその提携パートナーである太陽の家の創始者である中村裕氏もまた障がい者への安定的な仕事の提供に力を尽くし、彼らの自立を促進するなど、これもまた社会への貢献を目的としている。最も驚いたのは、オムロン京都太陽のある従業員が給与を受け取った際の「やっと納税ができる」の一言であった。これまで職を得ることが難しかった障がい者にとって、職を得た後にまず考えたのは責任である。こうした器量には感服させられた。工場の見学ではまた、スタッフが作業しやすいように多くの施設が特別に造られ、業務効率が確保されていた。こうした点はこれからもっと広め、より多くの障がい者が仕事の機会を得られるようにすべきだと思った。

午後は京都大学を訪問した。そこでは彼らの自由さと見識に衝撃を受けた。弱者に着目し、強権に対抗する。これこそ大学生の持つべき理念である。また京都大学の教授の「科学には国境はなく、人類の進歩の推進を自らの責任とすべき」の言葉に、私は自分が情けなく感じた。これまで自分の視野はとても狭く、いつも損得ばかりを気にしていた。これは高等教育を受ける人間が持つべき器量ではない。

今日の見学から私は、日本の企業家であれ労働者または学生であれ、皆いづれも広い心を持ち、社会について考えていることを知った。これは正に私たちの先祖が重んじてきたものではないだろうか。私もこれから先、自分の視野を広げ、自分の器量を磨き、社会への恩返しを自分の目標とし努力していきたいと思う。

日 付：5月31日（水）2日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：艾倍兆

「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」

この感動的なフレーズは午前に見学したオムロン京都太陽株式会社のものである。同社の経営理念と目標には本当に感服させられた。単純な収益ではなく、個人の幸福を目標とする企業、その経営者はどれほどの器量と勇気を持っているのだろうか。その従業員はどれほどの誇りを持って仕事をしているのだろうか。太陽の家の創設者である中村裕氏は東京パラリンピックを通じて（他国の選手との比較により）、自国の障がい者の生活条件や機会の劣悪さを感じ、障がい者が個人能力の発揮ができ、独立できる環境を作ることを決心した。こうした「身体や心のハンデは優れた仕事ぶりの妨げにはならない」という考えは、当時ほとんどの人は持っていなかった。

その後、中村裕氏とオムロンの創業者である立石一真氏がオムロン太陽株式会社を設立し成功を収めた。またその成功の後になって、当初中村氏への協力を断った多くの企業が改めて提携の意向を示してきたのである。このことから立石氏の視野の素晴らしさが見て取れる。両氏の社会を思う心、社会に幸福をもたらすことを己の責務とする考えにはとても感動させられた。人生の意義や価値というのは恐らくこういうものに示されているのだと思う。

春秋時代の陶朱公もまた三度家財を投げ打って「忠義を以って国に仕え、智を以って身を立て、商いを以って富を成し、天下に名を知らしめた」。こうした社会貢献の精神は古くから両国に存在している。

この日の午後は日本の著名な国立大学である京都大学を訪れた。京都大学は自由な学風で、多くの素晴らしい指導者が集まり、人材も多く輩出し、学問に力を入れているなど非常に魅力を感じた。京都大学の優秀な学生と討論ができたことはとても嬉しいことであった。彼らは一見大人しそうで、口数も少なそうだが、実際話をするときにはとても論理的で、頭の回転もとても速かった。その後各グループの討論結果の発表は、京都大学自体より長い歴史のある教室で行われた。聞いた話によると、日本で最初のノーベル物理学賞受賞者である湯川秀樹氏もかつてこの場所でスピーチをしたことがあるという。これには、こうした場所で異国と自国の学生の素晴らしい発言に耳を傾けていることに、一種の神聖さと意義深さを感じた。

日 付：5月31日（水）2日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：李美婷

この日の予定はとても詰まっっていて、午前はオムロン京都太陽株式会社を見学し、午後は京都大学で日本の学生との討論を行った。オムロンの企業としての価値観である「ソーシャルニーズの創造、絶えざるチャレンジ、人間性の尊重」および「われわれの働きで われわれの生活を向上し よりよい社会をつくりましょう」の理念には多くを考えさせられた。障がい者は社会的に弱いグループに該当するが、社会特に企業がそうした障がい者への対策を採ることは非常に得難く貴重である。実は企業見学の際、自分の中には複雑な感情があった。身体にハンデがない自分がハンデを持つ人の職場を見学することに、一種の強者による弱者への同情といったものを感じたからである。そのため、作業をしている彼らの姿を見るのさえ躊躇われた。それでも私は、彼らはとても強く、前向きにチャレンジをしている、勇気を以って生活と向き合っている人たちだということは分かっていた。同社はとても人間本位の精神に溢れ、エレベーターの色分けされたボタンから地面に貼られた様々な色のマークまで同社のそうした精神が示されていた。また最も印象深かったのは、同社が作成したビニール袋の開封装置で、手にハンデのある人にとっては、大きく業務効率が高まるだけでなく、従業員の尊厳を守ることに繋がっている。

午後は京都大学を訪れた。先生方の話によると、京都大学は自由な学風と革新の精神で有名であるとのことであった。京都大学は中国国内の大学とは異なっていて、先生が述べた学校の唯一の任務は教育であるという言葉には感慨を覚えた。中国国内の大学では昇進評定等による一定の功利性が存在している。しかし、教師の本業は人を育

てることであることは、中国であれ、日本であれ同じである。それから京都大学の学生は権威や権力といったものに反対し、外部の権力が学校内に入ることを許していないが、こうしたやり方が正しいかどうかについては分からない。ここからは京都大学の学生との交流内容について話したいと思う。彼らとの交流のテーマは多文化共生であった。まずは自己紹介からで、皆は初対面ということで多少の硬さがあったが、その後交流をしていくうちに雰囲気も和らいだ。討論内容の発表は私と雄蔵と一緒にいった。定義、日本の原住民、移民、そして移民が変えられる面と変えられない面などから最終的に、広い心を持ち、他人を思いやり、理解し、多文化社会を構築していく必要があるという結論を導いた。京都大学での交流が終わった後、雄蔵とメールのやりとりをした。私は日本の大学生との交流は今後より増え、さらに深まっていくと確信している。また私自身としても日中友好の懸け橋となることを願っている。

日 付： 6月1日（木） 3日目

大学名： 清華大学

氏 名： 顧欣宇

この日、私たちは一日文化視察を行った。

まず私たちは京都の郊外にある嵐山に向かった。嵐山は標高382メートル、桜と紅葉で名高く、南東側には桂離宮という有名な景勝地がある。この日私たちは周恩来記念碑の見学のために嵐山を訪れた。この詩碑は1979年に日中平和友好条約の締結を記念して日本の周恩来総理記念詩碑建立委員会により建てられた。詩碑には廖承志氏（中日友好協会初代主席）の揮毫による周恩来総理が1919年4月5日に嵐山を訪れて詠んだ『雨中嵐山』の詩が刻まれており、詩の中の「追求すればするほど、分からなくなってくる。」の一文はとても印象深かった。周総理の純真な心に私はとても感動し、私も周総理のように天下のため志を立て、平民のため天命を全うし、聖人のため孔孟の教えを継続し、万世のため太平を構築したいと思った。

次いで私たちは高台寺で座禅を体験した。高台寺は北政所という女性が建立した寺院である。北政所は豊臣秀吉の正室で、豊臣秀吉の死去後に出家をし、夫であった秀吉の冥福を祈るために高台寺は開かれた。座禅の後私たちは続いて茶道を体験した。日本の茶道は茶器や茶の点て方など中国のそれとはまったく異なっていた。昼食の後、私たちは新幹線で小田原に到着し、その後箱根湯本温泉のホテルに到着した。私にとって初めての温泉体験でとても素晴らしかった。

今日一日の文化視察を終えて、最も印象深かったのは日本の素晴らしい風景ときれいな環境であった。嵐山に足を踏み入れるとすぐ目に映ったのは「西塞山前白鷺飛び、桃花流水厥魚肥ゆ」の景色であった。箱根温泉エリアに入ると、そこは至るところに滝が見え、滝の飛沫があがっていた。日本の人々にとってのありきたりな山紫水明の素晴らしい景色は、私たちにとってのありきたりな汚染された空気と同じ存在だと思った。私は中国にも環境に優しい資源の無駄のない社会が構築される日が来ることを願っている。

日 付： 6月1日（木） 3日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 陳子鑫

この日のスケジュールは比較的楽で、主に京都の自然風景の見学と座禅と茶道そして温泉体験であった。午前、私たちは嵐山を訪れ周恩来記念碑を見学した。記念碑には周総理が若かりし頃に詠んだ詩が刻まれており、周総理の学問を修める上での苦労や迷い、そして決心が示されていた。嵐山の風景は素晴らしく、更には多くの寺院もあった。時間の関係で簡単に見ただけで終わったが、今後機会があったらまた見学に来たいと思う。

その後、私たちは高台寺での座禅と茶道体験となった。私の経験上、座禅とは自分の呼吸に集中することで心を静めることであり、座禅の形へのこだわりはない。大師は、休憩時、または車や人を待っている時など、呼吸に集中し「丹

田」により呼吸を調整することで心を静めることができると言っていた。そして茶道を体験した。茶を点てる過程には多くの細かな動作があり、訪日団の学生もこの点について質問をした。私はこうした動作には主に主人の客人への敬意が示されており、客人に快適さを感じてもらうために行っているのだと思う。日常生活においてはここまで細やかなことをする必要はないと思うが、常に他者を思いやり、自分の誠意を感じてもらうべきだと思う。

その後、私たちは新幹線移動となり、箱根温泉のホテルに到着した。中国とは異なり、日本の温泉では身体を洗った後で温泉に浸かる。また髪の毛やタオルなども浸けてはならない。これには日本人にとっての温泉の大切さが表れていた。これは一国の文化における特徴であり、ソフトパワーであると言えるかも知れない。

日 付： 6月1日（木） 3日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 閔一萱

今、箱根温泉のホテルの部屋でこの日の日記を書いている。髪の毛にはまだ温泉に浸かった際のシャンプーの香りが残っていて、頭にもまだ少し幸せなのぼせが残っていた。

朝、京都のホテルを出発し嵐山に向かった。茶色の窓ガラスのバスに乗ったこともあり、透明な景色だったものが、多少どんよりと見えた。そのため嵐山に着くとサングラスもかけずにそのまま車を降りた。日差しは強かったものの、幸い風が心地良かった。周恩来総理の詩碑を見学した後、私たちは多くの修学旅行生が通る道に沿ってバスにもどり、高台寺での座禅と茶道体験に向かった。

座禅は本当に全身をリラックスさせ、脳を解放させるものである。住職が言うように、普段の生活においてわずか数分間で緊張をほぐすものなので、毎日長い時間行う必要はない。茶道は私自身とても好きで、これまでは北京で裏千家茶道の交流会に参加したことがあるだけだったが、今回初めて寺院での本場の日本茶道を体験することができた。日本の茶道を愛好してきた私は、茶道体験の後に、なんと住職から茶道を習ったことはありますかと質問された。住職が言うには、私のお礼の際の姿勢がとても素晴らしかったとのことであった。これには本当に感激し、アイドルから外見を褒められるような嬉しさがあった。

京都駅はとても大きく、人もとても多かった。またさらに修学旅行の季節であったため、多くの日本の修学旅行生を見かけた。新幹線の車内はとても広く、整然と管理がされていた。日本人のこうした精神にはとても感心してしまう。

夕刻に小田原で新幹線を降り、その後箱根湯本の天成園ホテルに到着した。このホテルの景色はとても素晴らしく、山間にあり、前方には小川、後方には滝があり、夜に温泉に浸かった際、山間から吹き付ける風は本当に心地良かった。夕食の際、私たちは出し物を披露し、皆もさらに打ち解けた。一緒に歌を歌ったりゲームをしたりしながら、清華大学の学生も思っていたほどクールで真面目というわけではないと思った(笑)。

明日の旅と見学を楽しみにしている。おやすみ！

(この時窓の外から風に乗って花の良い香りが漂ってきた) 6.1 23:20

日 付： 6月1日（木） 3日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 艾倍兆

渡月橋の下を流れる桂川の水は澄み、魚が泳ぐ様子をはっきりと見ることができる。当時の亀山上皇が「くまなき月の渡るに似る」と詠った光景は見ることにはできないが、それでも見渡す限りとても素晴らしい景色であった。

周恩来総理は1919年に嵐山を訪れ、「雨中嵐山」の詩を残した。この日私たち一行は同じように嵐山を登った。霧雨はなかったが、それでも青年特有の情熱と活力、祖国や人々のために戦うという向上心に似た気持ちを持っていた。周総理の「人の世の真理を追求すればするほど、分からなくなってくる。ぼんやりとしたその中に、偶然に一つだ

けの光明を見いだした時、本当に増々艶やかに感じられる」の言葉は、私たちに方向性を示すものであった。

高台寺での座禅と茶道の体験は私たちと日本の文化との距離をさらに縮めてくれた。大師からは、こうした座禅や茶道の文化は当初中国から日本に伝えられ、日本で継承また進化したものであるとお話があった。また私たちが中国で普及が途絶えた、ひいては無くなった文化を改めて中国に持ち帰ることを願っているとお話されていた。こうした文化への理解と許容、そして世界的視野には頭の下がる思いであった。茶道の体験では、他の学生に譲ったので、その学生からお礼として自ら点てた抹茶をもらい、とても感動した。また私たちの入った茶室は木造ですでに400年余りの歴史があるが、今日まで非常に良く保存されている。日本の多くの建築物は100年以上の歴史を持っているが、一方中国ではこうした「古い」建築物は数えるほどしかなく、とても残念である。古くからの文化や建築物の伝承には人々や政府の努力が必要であり、中国はこうした面でまだまだ不十分である。

夜は箱根で楽しく温泉を堪能した。さらさらと流れる水の音を聴きながら、山間の涼しい風を浴び、リラックスして温泉に浸かれることは得難い幸せであった。

この夜はまた訪日団の6大学の学生がそれぞれ出し物を披露した。私たちが出し物を披露する前、浴衣の帯の結び方で苦戦していたところ、従業員のの方の手助けを受けた(その方の名前は忘れてしまったが、その優しい表情はきっと忘れないと思う)。席上、各大学の代表者が先生方にお酒をすすめていたが、先生方の食事の妨げにならなかったであろうか。本当に申し訳なかった。

日 付： 6月1日 (木) 3日目

大学名： 北京郵電大学

氏 名： 汪佳偉

この日は比較的楽なスケジュールであった。前日まで慌ただしく見学に出発していたのとは異なり、ゆっくりと朝食を済ませた後、この日の最初の目的地である嵐山に向かった。嵐山の景色はとても素晴らしく、皆は足を止めて写真を撮っていた。おしゃべりしながら風景を堪能し、そうしているうちに周恩来記念碑に到着した。そこには周総理が嵐山を訪れた際に詠んだ詩が刻まれていて、皆はそれを朗読した。その当時からすでに時間は経過しているが、この詩からは祖国の復興への強い願いを感じることができた。その後私たちは高台寺で座禅と茶道を体験した。大師の指導の下、私たちは座禅を始めた。わずか10分ほどであったが、初めての座禅体験であった私にとってはとても難しいものがあった。そして二度目はさらに難度の高い足を組む姿勢であった。そのため開始から1分ほどで足が痺れてきたが、それでも最後までやり遂げた。その後は茶道体験となった。茶道については一定の知識があったが、なぜお茶を飲む際に茶碗を回すのかについてはこれまで分からなかった。そして今回説明を受けて、茶碗の一番きれいな部分をもてなす側に見せるためであったことを知った。昼食を終えた私たちは新幹線で小田原に向け出発し、その後バスに乗り換えて箱根温泉のホテルに到着した。ホテルでの夕食の際は、各大学がそれぞれ事前に準備していた出し物を披露した。こうしたイベントを通じて私たちはさらに打ち解けることができた。その後温泉を堪能した。温泉の効果で今夜は良く眠れるよう願っている。

日 付： 6月1日 (木) 3日目

大学名： 北京交通大学

氏 名： 原露恬

京都の近郊にある嵐山、この詩趣に富む名前には、周恩来総理との繋がりを運命づけられていたのかも知れない。青年時代、周総理は救国の道を求め、日本を訪れていた。その際嵐山を訪れ、帰国前の1919年4月5日に再度嵐山を訪れ、「雨中嵐山」の詩を読んだ。この嵐山で「雨中嵐山」の詩を皆で朗読すると、周総理の当時の祖国への情熱と真理を追い求める思いを感じることができた。「中華の復興のために学問を修める」その言葉が改めて脳裏を駆け巡

った。嵐山のこの詩碑は、日中友好の象徴となっている。

その後私たちは座禅と茶道を体験した。これらは中国から日本に伝えられたもので、日本で進化して現在に至っている。座禅と茶道は主に穏やかな心を私たちに伝えたいのだと思った。現代のこの変化のスピードが速く、誘惑の多い社会において、多くの若者は落ち着いて物事を考えることができない。そうした中、座禅や茶道は礼儀作法を通じて心の内を磨くことができる存在である。また私は幸運にも茶道の作法を体験したが、茶器の洗い方から茶のすくい方、点て方、茶碗の出し方それぞれがとても細やかで、一見繁雑なこれらの所作により心を磨いており、これらの所作を繁雑に感じなくなった時が、茶の真髄を本当の意味で理解したと言えるのだと思った。

午後私たちは新幹線で小田原に到着し、その後箱根に向かった。中国と異なるのは、日本では乗客が並ぶ際にホームと平行に並ぶ、こうすることでホームの幅と建設費用を節約している。また新幹線の出発と到着の時間の正確率も非常に有名である。

夜は各大学の団員と一緒に交流を図り、私たちは交通大学の校歌を歌った。交流会はとても和やかな雰囲気であった。

日 付： 6月2日（金） 4日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 秦宇

箱根での温泉体験を通じて日本のソフトパワーについて知識を深めた私は、日本の人々の「生活を楽しむ」スタイルをととても気に入った。私は正にこうした点こそが、日本の人々の幸福指数と平均寿命がいずれも世界のトップレベルにある理由なのだった。

暫しの車での移動の後、東京都国分寺市にある日立製作所中央研究所に到着した。日立はイノベーションと顧客サービスを志向する企業であり、見学においては2つ印象深い点があった。一つめは、日立は技術人材を重視しており、フェロー制度を設けることで役員待遇を与え、さらに継続的な研究業務をさせていることである。この制度は一方で技術人材の研究における積極性と持続性を確保し、もう一方で従業員が能力や貢献に相応しい待遇を得ることを保証している。二つめは、日立は民間企業として未来を牽引することを目標とし、社会的責任感と時代感覚を有している。これも日本企業に共通する特徴である。

午後に訪れた一橋大学では多くの収穫が得られ、さらに沢山の日本の友人を作ることができた。一橋大学の歴史は古いが、小規模で洗練されている。長年の発展においても自身の方向性を見失わず、変わることなく社会科学や商学、法学のエリートを育成し、日本の社会に新たな活力を届けている。現代社会にあって、一橋大学のような存在は稀である。大多数の大学は発展の過程において名声や地位のため次第に自身の方向性を見失う場合が多い。この点について、一橋大学は学ぶべき手本だと思う。

日 付： 6月2日（金） 4日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 李黛雅

朝、箱根を出発し、日立製作所中央研究所に向かった。道中ではかすかに富士山の姿を見ることができた。

日立製作所中央研究所に到着し、バスで敷地内に入るとその様子にとっても驚いた。私は研究所というのは現代的で味気のない建物で、研究スタッフがいつも同じような研究をしているものだと思っていたが、ここでは木々が鬱蒼と茂っていた。また東京のような地価の高い場所にありながら、広い敷地面積の他、緑化が行き届いており、心を落ち着けて仕事ができる環境だと思った。研究スタッフからの紹介の際、印象深かったのは同研究所の石英ガラスによるデータ保存技術で、3億年のデータ保存が可能とのことにとっても驚いた。これにはつい3億年後の人々が3億年前の物を

手にする情景を想像し、とても不思議な感じがした。この技術は伝承と普及におけるイノベーションであり、研究スタッフの発想や知恵というものに感心してしまった。

もう一つの印象深かった技術はTTS技術、つまり音声合成システムであった。この技術の通訳関連における発展と応用に、私は非主流言語人材の将来性について考えさせられ、同時にこれまで以上に自分の専攻学問をしっかり究めなければならないと感じた。

午後は一橋大学を訪れた。対外経済貿易大学で日本語を専攻する多くの先輩方は一橋大学で修士課程を学んでおり、一橋大学の商学部の名声についても早くから聞いていた。講堂や図書館を見学し、非常に特徴のある建物だと思った。また図書館内の自習スペースが個人的にとっても気に入った。机は木製でそれぞれが単独になっていて、机の上にはデスクライトが備え付けられていた。私はここで読書をするのはとても幸せなことだと思った。

この他、一橋大学の学生との交流では、同大学の魅力と姿を感じることができた。夕刻の懇親会では、会場から富士山の姿を眺めることができ、今日の朝しっかり富士山を見られなかった残念な思いが払拭された。

夜ホテルに戻り、部屋の窓から遠くを眺めると、東京タワーを見ることができた。一年前の夢が今こうして実現したのである。人生というのは面白いもので、次の瞬間には誰と会うか分からず、またどんな素晴らしい出来事が起こるか分からないのである。

日 付： 6月2日（金） 4日目

大学名： 北京郵電大学

氏 名： 李美婷

朝早くに天成園ホテルを出発した。昨日は夜10時頃に温泉に浸かった。初めての温泉で身体と心もリフレッシュできたおかげで、昨日の夜はとても良く眠れた。午前中は日立製作所中央研究所を見学した。最先端の技術、イノベーションの発想、人間本位のデザイン、素晴らしい企業制度といったものが私の日立に対する印象であった。同社の音声合成技術には驚かされた。さらに中国人がその中で勤務をしていることに多くの感慨を覚えた。日立はスタッフに静かな業務環境を提供しているが、これは現在の中国企業では真似のできないものだと思う。中国の研究所の多くは市の中心部といった比較的賑やかな場所にあり、森林率も日本よりはるかに低い。日立は10年、20年後の社会の発展に力を入れており、石英ガラスによるデータ保存技術にはとても感動した。人は現在に生きるだけでなく、将来に目を向ける必要がある。これこそ日立が私にもたらした感慨である。同社が厳しい市場競争の中発展を続けているのは、正にこうした長期的目線によるものだと思う。

午後は一橋大学の学生との交流であった。私はまた、何処にいても中国人の姿を見ることが出来るものだと思う。異国の地で旧友に会うというのはオーバーかもしれないが、中国人留学生からもてなしを受けた際はやはり嬉しいものがあつた。欧風の建物、人文的雰囲気満ちた学校というのが私の一橋大学についての印象であった。また私は、激しく照りつける太陽の下、ある一橋大学の学生がベンチに座り一心不乱に読書をしているのを見かけた。ベンチは木陰がなく、陽射しを直に浴びていた。これには一橋大学の学生の知識欲と集中力を見ることができた。討論のテーマは日中の婚姻状況であった。私たちのグループは日中の婚姻における共通点と相違点の比較から討論を行い、教育レベルの向上や経済的な自立に伴い、日中の婚姻問題には同じような変化が起きているという結論に至った。例えば離婚率の上昇などの現象は年々大きな問題となっている。それから私自身ずっと疑問に思っている問題がある。スマートフォンが発達している今日にあって、なぜ日本で使われている携帯電話のタイプがこれほど異なっているのだろうか。京都大学の多くの学生はいまだにガラケーを使っている、一部には旧式の携帯電話を使っている学生もいた。一方一橋大学では多くの学生が 아이폰 を使っていた。

ホテルに戻った後、改めて外を散策した。東京と京都ではやはり大きな違いがあつた。古典的で静かな京都、賑やかな東京、いずれにしても私に多くの物事を体験すべきであることを教えてくれている。

日 付：6月2日（金）4日目

大学名：北京交通大学

氏 名：趙政

日立という企業の名声についてはかねてから耳にしていた。今日その研究所の見学ができたのはとても嬉しかった。中国の多くの公共スペースにおけるエレベーターなどは日立の製作によるもので、信頼性と安全性を最も重視している。研究所に足を踏み入れると、まず整然とした印象を受けた。余計な宣伝や紹介といったものがなく、その整然とした雰囲気はまるで巨大な実験室を思わせた。私たちは6階に上がり、そこで遼寧省出身の研究スタッフからTTSシステムについての紹介を受けた。このシステムは生活のあらゆる場面に応用ができ、言語の違う人同士の交流が可能で、2020年の東京オリンピックでも応用される予定である。その後私たちは同研究所の展示ホールに案内され、そこで3億年のデータ保存が可能な石英ガラスを見かけた。レーザーを使いガラスに情報又はQRコードを100層記録することができる。また表情認識と瞳孔認識において起こる可能性のある問題を克服した第四世代身分証である静脈識別システムも目にすることができ、とても視野が広がった。

昼食の後、私たちは「アジアのハーバード」と呼ばれる一橋大学を訪れた。唯美的なキャンパス、荘厳な講堂、広くて明るい図書館、大きなキャンパス、少人数制、教育資源の豊富さ、学生が自分の趣味に時間を割くことができることに羨ましさを感じた。討論の際私たちは積極的に発言し、意見を交換し合った。各大学にはそれぞれ個性があり、京都大学と比べ、一橋大学の学生はより中国の観念に近い印象を受けた。討論結果の発表の際は、「小異を残して、大同を求める」原則に基づき発表を行った。その後、皆は懇親会で色々な話題について語り合い、互いに親睦を深めた。同年代の人間同士の交流はとても楽しく、お別れの際は名残惜しいものがあつたが、多くの収穫が得られた。

日 付：6月3日（土）5日目

大学名：清華大学

氏 名：王德標

朝、40階のレストランでの朝食の際、無意識に都内を一望できる席を選んでいた。またそこからは遠くに富士山の姿を見ることができた。この幸運は、これから先私に楽しい時間が待っていることを告げているかのようであつた。

午前9時過ぎ、私のホストファミリーのYuさんとその彼氏であるHiroさんがホテルまで私を迎えに来てくれた。こうしてこの日の活動が始まった。私は日本の大学にとっても興味があつたので、まず初めに東京大学を訪れた。Hiroさんは東京大学の卒業生で、彼から東京大学の歴史や建物などについて詳しく教えてもらい、さらに彼が当時学んでいた場所に足を運び、当時の学校生活などについての話を聞いた。とても楽しい時間であつた。

昼食の際、Yuさんはこの近くに動物園があつて、そこにはとても可愛いジャイアントパンダがいると教えてくれたので、食事の後私たちはパンダを見に動物園へ行った。のんびりとしたパンダは遠くから会いに来た私を見ても挨拶することなく、気ままに遊んでいた。それでも無邪気なパンダの様子はとても面白かつた。

その後、私たちは東京駅と銀座駅を訪れ様々な建築物を見て回った。Yuさんは私が土木を学んでいて建築物に興味があることを知っていた。そのため、わざわざこの古典的ながらも現代的な2カ所を案内してくれたのである。この見学では知識を増やせただけでなく、建築物への理解も増やすことができた。とても収穫の多い午後であつた。

銀座駅での見学を終えた後、私たちは地下鉄でYuさんのご両親のお宅へと向かった。彼らは東京の近郊に住んでおり、とても閑静なところで悠々自適な生活をされていた。Yuさんのご両親は丁寧に私を迎えてくれて、わざわざ夕食も準備されていた。夕食の後、私はYuさんのお父さんと日本の宗教信仰について語り合った。印象深かつたのは、Yuさんのお父さんからの、日本人は一般的に複数の神を信仰していて、信仰は個人の問題で他人とは関係がない。世界に一つの神しか存在しないという考えになった場合、自分が信仰する神こそが本当の神だと考えてしまい、その際に色々な危険が生まれるというお話であつた。また神への信仰というものは主に畏敬の心を持つことであり、正しいことをするという事だということもお話もされていた。この交流は自分にとって沢山の収穫があつた。

日 付： 6月3日（土） 5日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 姜雨荷

Homestay day！今日は待ちに待った「養子となる日」で、私たちはそれぞれ日本の一般家庭でのホームステイ体験をすることとなった。

私は北島厚次さんとそのご家族のお宅でのホームステイとなった。北島さんと奥さんはとても親切な方で、英語での交流は多少苦勞したが、それでもとても楽しい一日であった。夕食時、北島さんは彼の中国人の同僚である成さんを招き、その場の雰囲気も和らいだ。そして彼女の説明により、私は北島さんが定年後に再度会社から招聘された非常に優秀な保健学の博士であることを知った。また北島さんは環境問題の研究を続けており、豊富な環境面の知識を持っていた。北島さんと成さんのお話から、私は自分の研究テーマである生活ごみの根本からの分類と資源回収における日本のごみ分類の成功経験に関する知識について多くの理解が得られた。日本のごみ分類は現在、燃えるごみ、燃えないごみ、アルミ製品、ペットボトル、缶そして粗大ごみの6つに大きく分かれており、中国での分類よりも細かく、また定着していることを知った。その後私は北島さんに中国国内の生活ごみの分類についての見解を尋ねた。北島さんからは、中国において十分な生活ごみの分類がされるには少なくともあと10年から20年の時間が必要であろう。生活ごみの分類やその知識に関する教育も初めから全国に普及させることは難しく、沿海地区の比較的発展した都市から始めるなど、急がば回れの姿勢で行うべきで、中国における環境保全の道は遠いものがあるとお話であった。

北島さんと奥さんはまた普段の仕事や生活以外に、写真撮影や料理、ガーデニングなど生活に様々な彩りをもたらしていて、洗練された生活をされていた。この日はとても充実した一日であった。

日 付： 6月3日（土） 5日目

大学名： 對外經濟貿易大学

氏 名： 張元浩

ホームステイの初日、初めはとても緊張していた。

直美ちゃんは事前に夫婦の写真を送ってくれていたが、内心では実際に対面する際に見分けることができず気まずい空気になるのではないかと不安だった。しかし幸い二人は早くに私を迎えに来てくれ、私自身もはっきり見分けることができた。初対面の直美ちゃんはとてもフレンドリーで早速一緒に写真を撮った。ホストファミリーという心理的暗示と二人の親しみやすさから、私にはある種の自宅に戻ったという感覚が生まれた。

その後しげちゃんは一足先に帰宅し、直美ちゃんは私を明治神宮に連れて行ってくれた。明治神宮は初めてだったので付近一帯の状況についてはとても目新しく感じたが、多くの場所が閉館になっていて多少残念であった。

この日全体を通して直美ちゃんはとても親切で、常に私を気遣ってくれていた。日本人のマナーはとても素晴らしく、いつでもどこでも彼らは礼儀正しい。それに対して中国国内では未だ多くの人の素養は高いとは言えない。これは教育の問題だけではなく、社会全体の問題である。今後こうしたマナーの良さが中国国内で広まっていくことを願っている。

日 付： 6月3日（土） 5日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 何雨婷

今日から2日間のホームステイが始まった。

今から1ヵ月前、ホストファザーの佐藤さんがメールで私に連絡をくれて、その際にこの2日間のスケジュールについては大体決めていた。朝早くに起きて身支度を整えて、会場で佐藤さんの到着を待った。佐藤さんとその同僚の小泉

さんは、今回それぞれ私と徐さんのホストファミリーを務めていた。二人は同僚でまた都合よく同じマンションに住んでいた。そのため二人はそれぞれお子さんを連れて私たちを迎えに来た。

またこの時ちょっとしたエピソードがあった。私は佐藤さんのお子さんの名前を聞いた時、佐藤さんから息子さんは友成(佐藤さんの名前は友孝)という名前だと聞いた。親子の名前で同じ「友」の字が使われていたのである。中国では一般に名前に同じ漢字が有る場合は兄弟関係である場合が多い。これも日中のちょっとした違いだと思った。

スケジュールでは、今日は佐藤さんの勤める会社で半年に一度開かれるバーベキューパーティーに参加することになっていた。会場への到着が少し遅れたため、皆はすでに役割分担を済ませて作業を始めていた。自分も普段家族と野外でバーベキューをすることがあるが、この日の会場はとあるホテルの裏庭で、賑やかで交通も便利な場所であった。バーベキューの材料は皆さんが持参したものだ。魚介類が豊富な日本、ここではバーベキューの材料にも多くの魚介類があった。その後皆は食事をしながらおしゃべりをした。この日は多くの社員の家族も来ていて特に多くのお子さんを見かけた。また私たちは二人の香港出身の方と知り合った。またおしゃべりを通じて、社員の多くは大学時代に多少中国語を学んだことがあることを知った。バーベキューパーティーが終わり、皆で後片付けをして記念写真を撮った後、ある社員が今回のパーティーのために実家の北海道から魚介類を取り寄せたり、ワインを持って来たり、美味しいチーズケーキを持って来たりした社員の方々にお礼を述べていたのを見かけた。

この日の夜は、ホストファミリーが中華料理を食べに連れていってくれた。料理店の主人は中国人で、味付けも中国のそれと近かった。量が多いというわけではなかったが、皆はとても美味しくいただいた。夕食の後、私たちは100円ショップを見て回った。ここは中国の2元ショップとは全く異なり、商品が整然と陳列され、種類も非常に多かった。こうした点も中国が学ぶべきところだと思った。

日 付：6月3日(土) 5日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：王芙蓉

私たちに日本の一般的な家庭生活をより良く知ってもらうため、今回私たちには2日間のホームステイが組まれていた。

初めにスケジュールを貰った時から今回のホームステイを楽しみにしていたが、それと同時に自分の日本語が下手なせいでうまく交流できないのではないかと多少の緊張もあった。心の中で様々な想像をしながら私は小倉さんそして奥さんと対面した。小倉さんは私の父親と同年代であったが、感覚的には父親と言うよりかはお兄さんといった感じがした。小倉さんは私が荷物を手にしているのを見て、すぐにその荷物を代わりに持ってくれた。道路を横断するときや地下鉄に乗る際は常に私をかばい、とても良くしてくれた。また私が初来日ということを知っていたので、地下鉄の駅では私のために乗車用のカードを作り、さらに運賃までチャージしてくれた。人が多い時は私を見失わないようお二人はいつも私を二人の間に立たせてくれた。また日本の地下鉄は中国同様人が多いが、空席がある時はいつも私を先に座らせてくれた。そしていつも笑顔で私と大学生活や仕事や勉強の話などをしてくれた。

午前、私たちは浅草の雷門を訪れた。。そこには大きな赤い提灯があった。私は「これは夜には光りますか？」と訊ねたところ、小倉さんはすぐに夜の様子の写真を探し、光らないと教えてくれた。浅草寺に続く路地の両側には沢山の小さな店舗が軒を連ねていた。週末で人が多かったが、笑顔で一軒一軒私に付き添い、さらにこれらのシンボルに込められた意味合いなどを私に教えてくれた。浅草寺に到着した後、私たちはまず手を洗い、その後香を持ち、日本の方式でお参りをした。浅草見学の後は築地を訪れた。築地には大きな市場があり、そこではこれまで見たことがない魚を沢山見かけた。市場の見学の後12時近くになって私たちは築地の小さなお店で昼食となった。お店の面積こそ小さかったが、料理はとても手が込んでいて、魚もとても新鮮で美味しかった。それから私たちは銀座を訪れた。銀座はショッピングの聖地であるが、その多くは贅沢品であるため、小倉さんは学生向きのお店に連れて行ってくれた。そして私が買い物をしている間、小倉さんは外で私を待っていてくれた。

銀座を見学した後、小倉さんは私が歩き疲れたと感じたのか、私を連れて帰宅し、私にゆっくりと休憩を取らせてくれた。

日 付： 6月3日（土） 5日目

大学名： 北京交通大学

氏 名： 趙政

今日はホームステイの日で、皆はロビーからそれぞれのホストファミリーとともに出発していった。私のホストファミリーには二人の可愛い男の子がいて、彼らと一緒に私たちは日本的風情のある鎌倉、八幡宮を見学した。日本の人々のマナーへの重視度合には驚くべきものがあり、ホストファザーやホストマザーは常に子供たちに、神社や寺院の参拝前には清潔にすることやお参りの際のルールなどについて話をしていた。午後私たちはホストファミリーのお宅に戻り、二人のお子さんはスイミングスクールでの授業に出かけた。ここで私が驚いたのは、わずか6歳と9歳の男の子が自分たちだけで自宅から離れた場所に授業を受けに行くのに、ご両親は全く心配していないことであった。「独立」と「マナー」の二つはお子さんたちに余すところなく表れていた。私たちは車で現地のオリンピックというスーパーマーケットを訪れた。三階はリサイクルエリアで、多くのリサイクル商品が売られていて、靴や洋服、鞆、書籍等リサイクル可能な商品が整然と陳列されていた。こうした環境保全意識はすばらしいものと思った。

夕食はホストファミリーと一緒に餃子を作った。異国の地で餃子を食べるのはまた違った趣がある。英語での交流も想像していたよりスムーズで、ホストファザーは今英語を猛勉強中とのことで、今後博士号を取得したいとのことであった。40歳近くになっても学習を続けていることに私はとても感心させられた。またお子さん二人も自発的に勉強をしており、夕食後から就寝前までは本を読んでいた。この年代はアニメを観たりゲームをしたりするものではないのだろうか、私はとても意外に感じた。

自分の部屋に戻り寝る準備をしていると、隣の部屋からホストファザーが英単語の勉強をしている声が聞こえた。彼もまた寝る前に30分ほど英語を勉強しているという話をしていた。これには私自身も語学レベルを高めなければならないと思った。

日 付： 6月4日（日） 6日目

大学名： 清華大学

氏 名： 韓儲銀

あっという間に6日目となり、この日もホストファミリーの柘植さんたちと過ごした。昨晩は初めて畳の上で寝たが、とても気持ち良かったため、朝起きるのが少し遅くなってしまった。

朝、柘植さんたちと一緒に車で観音廟を訪れた。日本の文化の多くは中国ととても似ていることに気が付いた。日本の書道、仏像、寺院、建築、スタイル等は当時中国から伝わったものであり、日本において中国が失った文化を再発見できたことは、私たちに優れた伝統文化を保護することの重要性を教えてくれたかのようであった。

しかしながら中国にも誇るべきところが存在する。柘植さんの自宅から東京に行く際は全長10kmの海底トンネルを通過するが、中国は現在全長50kmの世界で最も長い海上橋である港珠澳大橋を建設中だと伝えたところとても驚いていた。また中国の高速鉄道の運営距離がすでに世界全体の半数以上を占めていると伝えたと、同様にとても驚いていた。ホストマザーは25年前に北京を訪れたことがあり、その時の印象では北京は街中自転車だらけだったとのことであったが、私が現在は北京の地下鉄の一日の利用者数は1000万人以上だと伝えたところ、彼女は「oh, it has changed totally」とコメントした。中国はとても速いスピードで発展しており、ますます強い国になっている。これが私たちの底力であり、また自信の源である。その一方で、日本の人々の中国への理解は未だ不足しており、私たちは日本に学び日本を知る以外にも、日中交流の架け橋となり中国の状況を紹介し、中国の声を届けていく必要がある。

日 付： 6月4日（日） 6日目

大学名： 中国人民大学

氏 名： 李雅嫻

朝食の後、私たちは渋谷のプラネタリウムへ向かった。昨晚、私はホストファミリーの西山さん夫婦とおしゃべりで自分の天文への興味について話をした。そのためこの日はプラネタリウムに行くことにした。地下鉄での移動の際は道程こそ長かったが、期待が薄れることはなかった。私は北京のプラネタリウムの常連であるため、ドームスクリーン映像を見た時には特に興奮してしまった。ここでは北京とは異なり、スタッフが現場で直接解説をしており、より臨場感があった。また多くの人が観賞していて印象深かった。

秋葉原はアニメグッズの聖地で、多くのアニメグッズや家電量販店があり、私もその評判を聞きつけやって来た。予想通り、多くの人が買い物をしていて、中国人観光客の他、中国人店員の姿も見かけた。これには日中両国の経済的交流が見て取れた他、日本のアニメ産業の発展の勢いを感じることができた。アニメは若者間における絶好の交流スタイルと言える文化である。中国のアニメ産業は発展途上にあり、文化の継承や普及については日本には及ばない。現在中国は急速に発展しているが、ソフトパワーについては今後更なる向上が必要であるのは否めない。アニメはソフトパワーにおける一つの側面に過ぎず、座禅、茶道、古詩といった伝統的文化についても継承・発展していくべきだが、残念ながらこれらの優れた文化はそれに相応しい扱いを受けていない。

より明確に対比できるのは、和服と漢服の継承である。日本ではどこでも和服姿の人を見かけるが、もし中国で漢服を着た場合、周りの人から好奇の目を向けられる。漢服は中国伝統の服装であり、独特の美的センスと技法を含んでいる。幸いにも中国は現在それらの保護と発展への対策を講じており、今後中国のソフトパワーも新たなレベルに到達できるものと確信している。

日 付： 6月4日（日） 6日目

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 林子惠

朝はホストファミリーのお宅で朝食を取った。お姉さんは早くに起きて私のために純和式の朝食を作ってくれた。常々その名前を聞いていた納豆を初めて食べた。ご飯に混ぜて食べると、意外なほど美味しかった。食後私たちは近所でお土産を買った。お兄さんやお姉さんはスキンケアマスクやハンドクリームを買い私にプレゼントしてくれた。これには心がとても温かくなった。その後午前中はホストファミリーのお宅で3歳のお子さんと一緒に遊んだ。わずか1日しか経っていないのに、彼女はもう私と仲良くなり、常にお姉ちゃんと呼びながら、気に入っている玩具を私に見せてくれた。私にもこのような妹がいたらどんなに嬉しいことだろうか。昼食もホストファミリーのお宅で食べたのだが、訪日前私はメールでカレーが食べたいとの話をしていたのを覚えていたお姉さんがわざわざカレーを作ってくれたのである。皆さんとても優しい人である。

午後は一家全員で水族館に向かった。週末ということで人は多く、ピクニックをしている人や自転車に乗っている人もいたが、地面にはごみ一つなく、至るところがきれいであった。こうした点は中国人がしっかり学ぶべきものだと思う。それでも今後中国がさらに発展し、一般市民の素養も日本人のように良くなっていくと信じている。水族館では日本特有の魚を沢山見かけた。またそれらの多くは食用とのことである。マグロについてはこれまで中国では食べたことがあったが、マグロ自体がこれほど大きい魚だとは思っても寄らなかった。それ以外にも沢山の印象深いものを発見した。水族館を出るとホテルに戻る時間となった。お兄さんが運転する車でホテルに戻るまでの間、私たちは色々とおしゃべりをした。とても名残惜しかった。人生には本当にたくさんの一期一会がある。だからこそ何をするにもそれを楽しむことが必要なのである。

夜は団員らと新宿に行き、東京の華やかさを目にした。北京の三里屯に少し似ていると思ったが、私個人としてはやはり古風な街並みの方が好みである。現代的な街並みも好きな人は大勢いるだろうが、街に歴史的な建物がなけ

れば、どこか文化的な雰囲気足りない感じがする。

日 付：6月4日（日）6日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：郝琦璘

午後3時40分、「まだ20分あるから東京駅を見に行こう」と入野さんが言った。この時私は本当に感激した。今回のホームステイではとてもお世話になったのに、それでもまだ限られた時間の中で私により多くの体験をさせようとしてくれたのである。そして真美さんも「時間が経つのは早い、もっと色々な体験をさせたかった」と言った。彼らの優しさに私は、彼らともっと一緒にいるために時間がゆっくり流れて欲しいと思った。

異国の地で、入野さん一家は私に家族の優しさを感じさせてくれた。これは中国国内の多くの人にとっての日本人の印象とは異なる、ひいては逆のものであった。確かに中国と同じように、日本人の中にも中国人に良い印象を持っていない人がいる。こうした状況は互いの交流不足がもたらしたものである。

日中両国とも情報への規制はとても厳しく、ニュースやネットだけでは互いの事を知るには不十分である。そこで、両国の民間の交流は特に重要になってくる。今回の活動のような深いレベルでの理解と交流は、両国関係の進展にとって非常に重要である。民間の交流が充分であれば、必然的に相手への印象も変わり、これまでより良くなるかも知れないし、そうはならないかも知れない。いずれにしても様々な角度から見て、知ることができる。これは主観のみに頼り判断するのと同じで、一部の報道や歴史のみで結論を下してはならない。歴史は忘れてはならないが、それだけにとらわれてはだめなのである。さもないと膠着状態になり、自国にとって不利な結果をもたらすことになりかねない。

だからこそ、私は民間交流の重要性をひしひしと感じ、日中友好に貢献するという願いがより強まった。特にこの数日、中日友好協会の方々、日中経済協会の方々から日中友好への努力における達成感を感じることができた。今後私も日中友好の大業に彩りを添えるような何らかの貢献をしたいと思う。

日 付：6月4日（日）6日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：都平

ホストファミリー宅で気持ちの良い一晚を過ごした私はなんとかベッドから起きドアを開けると、ホストファミリーの笑顔とあいさつの言葉で迎えられ、その瞬間心が温かさで感動に包まれた。私は魚介類が苦手ということを考慮し、彼らは普段のお味噌汁ではなく、わざわざハムと野菜のスープを作ってくれた。そしてホストファザーはわざわざ北海道のステーキをサラダにし、さらにパンケーキを焼くなど、完全に私の好みに合わせてくれた。こうした細やかさに、私は彼らのおもてなしの心を感じた。

朝食の後、私はホストマザーと一緒に土産を買いに出かけた。一家で唯一海外を経験した私は家族のためにお土産を買い、彼らの笑顔を想像すると私自身とても嬉しい気持ちになった。ホストマザーは新宿から銀座、銀座から東京駅へと私とあちこちを歩き、日本の文化的特徴などを詳しく紹介してくれた。見るものすべてがとても新鮮であった。そして歩き疲れを心配したホストマザーはわざわざ私をマッサージに連れて行ってくれた。これには彼らの細やかさと優しさに驚きを禁じ得なかった。日本は完全に儒教の「礼」と「和」を習得していて、さらにその真髄を彼らの日常生活や学習そしてマナーに浸透させている。だからこそこれほど物腰が柔らかく、礼儀正しいのである。そして中国は残念ながら日本ほどそうしたものが継承されていない。中国は失ったものが多すぎて、「社会が失った伝統文化については民間でそれを探さなければならない」という言葉まで存在する。これは中華の文化にとっての悲しい部分である。

マッサージを終え、うどんを食べた後、ホストファミリーは私をホテルまで送り届けてくれた。お別れの際彼らはまた私にプレゼントをくれた。私もまた対面した当初、梅の柄の唐傘と貫入の入った花瓶をプレゼントしていた。私は今回

のホームステイで彼らとここまで親しくなれるとは思っていなかった。今回の体験は一生忘れないだろう。

日 付：6月4日（日）6日目

大学名：北京交通大学

氏 名：原露恬

昨晚お母さんはわざわざ私のためにお兄さんの部屋を片付け、私に好きなタオルを選ばせてくれて、そして就寝前には喉が乾いたら下の階に飲み物があるからと伝えてくれるなど、こうした細やかな心遣いに私は家に帰ったような感覚がした。

この日朝早く、お母さんは私たちを車に乗せ芦ノ湖へ向かった。しかし天気の影響で富士山の姿を見ることができなかったのは残念であった。芦ノ湖は火山活動で形成された火山湖であり、私たちは箱根関所でこの一帯の地形について調べた後、ロープウェイで大涌谷に向かうことにした。しかし桃源台と大涌谷間のロープウェイがこの日丁度メンテナンスのため運航していなかった。それを知ったお母さんはとても申し訳なさそうに、バスで大涌谷に行ってそれからロープウェイで早雲山に向かうしかないと教えてくれた。お母さんの申し訳なさそうな表情を見て、この2日間のために彼らがとても念入りに計画をしていたことを改めて感じた私はとても感動した。突発的な事情で予定とは違ったが、それでも私はとても感謝している。私は風景よりも美しい彼らの熱意と優しさを見た思いがした。

大涌谷に近づくと、だんだんと硫黄の匂いがしてきた。鼻を突くというほどではないが、匂いははっきりと分かった。山には霧が立ち上り、大量の湯煙が谷底から噴き上がっていてとても壮観であった。私たちは大涌谷の有名な黒たまごを食べた。温泉で茹でた黒たまごを食べると寿命が7年延びるとのことである。科学的根拠はないものの、これも一種の願掛けに近いものがある。その後私たちは電車で早雲山を下り、勾配を緩和する有名な「スイッチバック式」鉄道を直に体験した。私は娘さんに「スイッチバック式」は詹天佑という人が京張鉄道を建設する際に初めて使ったものだと教えると、彼女は中国と日本には沢山の文化的交流があるといった感想を口にしていた。下山によって時間がかかり、午後4時までにホテルに戻ることができなくなったので、お母さんはわざわざ事前にスタッフに連絡して私を安全に送り届ける旨を説明してくれた。

お別れの際、私は涙を抑えることができなかった。中国での再会を楽しみにしている。

日 付：6月5日（月）7日目

大学名：北京外国語大学

氏 名：秦諾雅

時間が経つのは早いもので、あっという間に8日間の旅も残すところあと1日となった。今日は4つの活動と充実したスケジュールで、多くの収穫が得られた。

午前には三井住友銀行の見学、お昼は日比谷公園の松本楼での昼食であった。ウェイターのサービスはとても細やかで、どのスプーンでどのスイーツを食べるかまで教えてくれた。そしてこの日最も大きな収穫が得られたのは午後と夜であった。午後私たちは中国駐日大使館を訪問し、夜は三菱商事の見学と懇親会であった。

午後の大使館では、汪参事官から日中関係における最前線のスタッフの目線から見た両国関係の現状について、現在は改善に向かっているが未だ多くの複雑で敏感な要素が残っていると紹介があった。また汪参事官の言うとおり、私たちは日中関係を正しく客観的にとらえなければならず、少なくとも常軌を逸した行為により政府に迷惑をかけてはならないと思った。実際中国が日本から学ぶべき所は沢山ある。日本の厳格な法律、ハイテクを利用した汚染物質の排出による空の青さ、伝統文化の継承及び他国の優れた文化や技術の応用、日本人の他人へのマナー、優しさ等、これらはいずれも私たちが学ぶべきものであり、私たちがより成長していくための武器である。

その後私たちは三菱商事を訪れた。約1時間、私たちは小山氏による紹介と質疑応答を通じて三菱商事について

一定の理解を得ることができた。その後の懇親会では、私たちは同社の社員の方々との交流を行った。私は同社の採用条件などの面について質問をし、同社は採用時に知識よりも個人の人柄を重視する。人柄とは違い、知識は後で学ぶことができる。そのため重視されるのは自分に長所があるか、そしてそれを伸ばしているか、ボランティアといった社会的な活動に参加をしているか、リーダーシップが有るかどうかといった点であるとの回答を頂いた。そのため、私たち大学生は尚のこと日本の大学生のように、アルバイトや旅行、そして様々な活動に参加をしなければならないと思う。勉強はしなければならないが、勉強に影響のない範囲で自身の社会性を育てる、これこそが中国の教育に欠けているもので、日本に学ぶべき点だと思う。

日 付： 6月5日（月） 7日目

大学名： 北京外国語大学

氏 名： 何雨婷

この日の私たちのスケジュールはとても詰まっていた。

初めに、私たちは日本屈指の金融機関である三井住友銀行を見学した。そこで驚いたのは、三井と住友はこの三井住友銀行以外の分野ではライバル関係にあるということであった。三井住友銀行の藤盛部長は多忙の中私たちをもてなし、さらに同銀行の長い歴史について紹介を頂いた。また私たちがいずれも翌年または翌々年に卒業を控えていることから、同銀行の中国人社員2名による業務状況の紹介も手配頂いた。初めに紹介があったのは、北京大学で哲学を専攻した女性社員であった。彼女はとても活発で可愛らしく、想像していた日本企業で働く社員の様子とは全く異なっていた。彼女の経験は私にとってとても手本になるもので、将来外国で働くことへの可能性を私にもたらしものであった。そしてスタッフの案内の下、私たちは三井住友銀行のデジタル地球儀そして金融ミュージアムを見学した。デジタル地球儀では世界の船舶・航空運輸等の状況を確認できる他、衛星を介して各国・各地区の街の状況も見る事ができる。金融ミュージアムは一般の博物館とは違い、複数の大きなタッチパネル式の柱があり、文字や写真、映像形式の様々な資料を見ることができた。

次いで、私たち一行は中国大使館を訪れ、暫しの帰国を果たした。私たちを出迎えてくれたのは大使夫人である汪参事官であった。汪参事官からは、現在の駐日大使が2010年2月に着任以降に発生した一連の重要な出来事についての紹介があった。またお話の中では、友好交流課の「民間が先行、民が官を促す」の方針について強調されていた。私は光栄にも学生代表としてスピーチを行い、大学生の交流の角度から一橋大学での討論会について紹介を行った。

そして最後に私たちは三菱商事を訪れた。同社は日本トップクラスの総合商社で、事業範囲が広く、物流や金融以外にも環境保全等の分野においても大きな貢献をしている。三菱はまた中国の各大企業と密接な関係にあり、会社内には多くの中国人社員及び中国語が堪能な日本人社員がいる。紹介を担当された小山氏もまた「中国通」であり、中国語が堪能で、意欲的に学生等と交流をしていた。

今日の3つのスケジュールはいずれも充実したものであり、大使館への訪問では国際情勢についてより明確な理解が得られ、その他2つの大企業では日本企業の国際化における積極的な姿勢について知ることができた。

日 付： 6月5日（月） 7日目

大学名： 北京交通大学

氏 名： 王紫嫣

ホストファミリーとお別れをし、これまでの見学の旅が再開した。最終日の前日であるこの日もスケジュールが充実していた。朝早くに三井住友銀行に到着し、その雄大な様を目に収めた。三井住友銀行では様々な業務を展開しており、また長い歴史の中でどんどん新しく変革し、時代の発展や変化の機会を素早く捉え、絶えずサービス分野やサー

ビス範囲を拡大し、自身の優位性と地位を確固たるものにしている。またハイテクのサポートの下前進を続けており、デジタル地球儀やデジタル図書館のような展覧室以外に、同社のマスコットキャラクターにも大きな魅力を感じた。これは子どもという将来の潜在顧客への親しみやすさを考慮したものだった。

その後私たちは近代の日中関係と深い繋がりのある日比谷松本楼での昼食となった。ゲートを開けるとそこには宋慶齡女史が使用していたピアノがあった。松本楼と関係の深い二人の人物といえば、孫中山、梅屋庄吉両氏である。国父と梅屋氏は日頃から仲が良く、彼が当時各地で革命活動を行った際の大部分の資金は、梅屋氏が支援したものである。二人の関係は、現在の日中関係の構図について改めて考えさせられるものであった。

その後、私たちは中国駐日大使館を訪れ、汪参事官から出迎えを受けた。そして参事官からの詳しい紹介により、私たちは本当の意味で現在の日中関係の状況について知ることができた。懸念や明るい材料などあるが、最終的には両国がさらに交流を増やし、誤解や壁を取り除き、世界の安定と繁栄のために共に努力していくことが必要だと言う結論に皆が賛同した。

この日の最後は長きに渡り高い評判を得ている三菱商事への訪問であった。また同社は今回唯一私たちのネームプレートを作ってくれた企業であった。同社の中核事業は私の専攻とも関係があったことから、私はこの機会に様々な質問をした。その後の懇親会では、三菱商事の経営幹部の方とも踏み込んだ交流をすることができた。普段学校では企業の調査研究活動も行われるが、この「走近日企」の活動ほどの便利な条件は整わない。今回の訪日の旅が間もなく終わることに寂しさを感じた。

日 付： 6月5日（月） 7日目

大学名： 北京交通大学

氏 名： 任二祥

今日は訪日7日目、スケジュールが最も詰まった、また最も充実した一日であった。この日は日本の三大銀行の一つである三井住友銀行、日本トップクラスの商社である三菱商事、そして中国駐日大使館、日比谷松本楼を見学した。

午前、私たちは三井住友銀行を見学した。100年以上の歴史を持つ世界の10大商業銀行の中の一行として、三井住友銀行は世界に幅広く支店を展開している他、新入社員の研修にも力を入れており、国際化の現在において海外従業員の招聘や育成については日本でも先頭を走っており、会社のグローバル化における基礎構築に貢献している。

お昼は日比谷松本楼を訪れ、豪勢な昼食を堪能した。そして梅屋庄吉氏と孫中山氏の革命時における友情についての話を聞き、とても感動させられた。二人は共通の理想のために助け合い、梅屋氏は「君は兵を挙げよ、我は財をもって支援す」の誓いを立て、中国の革命のために1300億人民元相当もの資金を投じた。梅屋庄吉氏はまた、孫中山氏の死後に彼の精神を積極的に広め、後の世代に日中の友好を継承するなど両国の友好に一生涯力を尽くしたのである。

その後私たちは一時の「帰国」となる中華人民共和国駐日本国大使館を訪問した。ここでは大使夫人である汪参事官から、ここ10数年における日中関係の発展における困難な道程や参事官自身の日中関係に対する観点についてのお話があり、実際の日中関係は私が想像しているような簡単なものではないこと、そして両国関係のデリケートさと特殊性について知ることができた。

大使館を後にした私たちは、三菱商事を訪れた。三菱商事は日本最大規模の総合商社で、事業範囲が生活のあらゆる面に及んでいることにとても驚いた。中国ではこれほど大規模の財団はなく、また「商社」という概念の企業も存在しない。「商社」というのは国民生活のあらゆる面に浸透しており、国家経済の命脈を握る存在だと思った。懇親会では同社の中国人従業員と交流した。彼らはここで素晴らしい教育と待遇を受けているとのことで、私自身国際的企業で働くことへの願望がより強くなった。

日 付：6月6日（火）8日目

大学名：清華大学

氏 名：鐘玲

今日は訪日の最終日。あっという間に8日間が過ぎ、間もなく日本を離れることになる。とても名残惜しい。

朝は私たちが宿泊したホテルであるホテルニューオータニを見学した。同ホテルは東京でも最高クラスのホテルであり、1964年の東京オリンピックに合わせて開業した大型ホテルである。私たちはホテルニューオータニの汚水処理システムを見学した。同ホテルは環境保全の面で非常に進んでおり、毎日発生する約5トンの生ごみの100%再利用を実現している他、活性汚泥方式により厨房で発生する1000トンの排水を浄化し、ホテル内の樹木やローズガーデンの灌漑そしてトイレの洗浄用として活用している。私たちはまた山や魚そして滝のあるホテル内の美しい日本庭園を見学した。

その後歓送会となった。歓送会では訪日団の学生等が今回の訪日への感想を述べた。その感想の内容から、皆は今回日本で多くの収穫が得られ、日本を離れることに名残惜しさを感じているようであった。そして私たちは「和你一樣（あなたと同じ）」を合唱し、今回私たちをもてなしてくれた方々とお別れし、帰国の途に就いた。

今回日本では本当に多くの収穫があった。京都大学と一橋大学では中国のそれとは全く異なる学風を体験し、面白かったと同時に自分の将来設計についても影響をもたらすものであった。と言うのも、私自身今後海外での生活を考えており、日本での留学も考えたことがあるというのがその理由である。日立やオムロン等の企業でも視野が大きく広がり、まるで新世界の門を開いたかのように、新たな企業の在り方を知ることができた。

さようなら、日本。また会いましょう。

日 付：6月6日（火）8日目

大学名：對外經濟貿易大学

氏 名：閆一萱

時間の流れる早さのために息をつくしかなかった。帰国の機内で日記を書いているこの時、本当に名残惜しいものがあった。月には満ち欠けがあり、人には出会いや別れなどがあるとは言え、実際に皆とお別れし日本を離れるこの時、心にぽっかりと穴が開いた様で、東京も昨日私たちが三菱商事の見学を終えた頃から雨が降り出し、そういった心情を代弁しているかのようにあった。

朝は私たちが宿泊したホテルニューオータニのエコシステムを見学した。ここでは汚水や生ごみが再利用されていて、私は日本人の細やかさと環境保全への真摯な姿勢に感心した。同ホテルはまた長い歴史と優れたサービスで名高い。私は、こうした間近での観察を通してこそ日本企業の長寿の秘訣を知ることができると思った。

お昼、私たちは今回の訪日における最後のイベントである歓送会に参加した。歓送会には今回の訪日活動の主催側、運営側そしてホストファミリーの皆さんが集まった。私のホストファザーである宇田川さんも会場を訪れていた。私はこの日對外經濟貿易大学を代表して日本語でのスピーチを行ったが、今回のスピーチほど自分の本音で話せたことはなかった。そのため、スピーチの際は心の底から日本を離れる寂しさを感じた。ホストファザーからも二人の娘さんが会いたがっているので、今度いつまた会いに来てくれるのかと聞かれた。渡る世間に鬼は無く、心は互いに響き合うものである。その瞬間、私は本当に帰国したくなかった。

勿論、私たちとこの数日間行動を共にした程団長、王麟先生、左先生、王先生、横山さん、中島さんそして団員の皆に対しても名残惜しい気持ちがある。今回の旅そして出会いは一生忘れることのないものであった。空港でセキュリティチェックに向かう際、後ろを振り返ると中島さんが涙を拭っているのを見かけ、人と人との絆の素晴らしさを感じた。この8日間を通じて私自身成長することができた。この数日間の経験や気持ちについて一つひとつ記すことはできないが、心の中に永遠に刻もうと思う。ありがとうございました！

6.6 機内にて

日 付：6月6日（火）8日目

大学名：北京郵電大学

氏 名：王芙蓉

最終日の朝、私の心の中にある別れへの寂しさを吹き払うかの様に風が吹いていた。

この日のテーマはお世話になった方々への感謝である。午前中はホテルニューオータニでの見学であった。知っての通り、日本の水道水は直接飲むことができる。そして5つ星ホテルであるホテルニューオータニでは毎日の水使用量がとても多く、水の再利用やごみの回収再利用は特に重要なものとなっている。地下三階の水処理プラント内は通気が悪く、汚水を処理しているのもとても蒸し暑かったが、水には完全な処理がされていた。私が特に驚いたのは、木製の水槽で、その殺菌効果は素晴らしく、日本の木造家屋の建築方法で造られているため、釘がなかった。ホテルニューオータニには16基の水槽があり、最大のもは900トン規模である。このことから同ホテルの正常な運営を保証するためにどれだけの貯水量が必要か分かる。その後私たちはごみの再利用プラントを見学した。日本には厳しいごみの分類規則があり、その理由のひとつは回収への利便性追求のためである。同ホテルでは同様に厳しいごみの分類規則があるが、ホテルのスタッフはそれらを種類ごとに回収再利用している。

ホテルニューオータニは建物自体の雄大さ以外にも、優美な庭園がある。そこには川が流れ、蓮やツツジの花が咲き、夜には蛍が現れ、夜に彩を添えている。15分ほど庭園を見て回った後、私たちは歓送会の会場に集合した。歓送会には多くのホストファミリーの方々が駆けつけていた。残念ながら私のホストファミリーの姿はなかったが、それでも他の方を通じて言伝を頂き、とても温かい気持ちになった。歓送会が始まり皆は食事をしながらこの数日間の様々な出来事や将来の事などについておしゃべりをした。そうした中でも時間は過ぎていき、そして日本商會と訪日団の各代表からの総括があった。その後、各大学の代表者から英語または日本語でのスピーチがあった。皆は自身が体験した様々な出来事から感想を述べていた。そして最後に皆さんへの感謝を表すため、私たちは訪日団の歌である『和你一樣（あなたと同じ）』を合唱した。

機内でこの最後の日記を書いているが、ここまで書いて急にどのように書いたらいいか分からなくなった。別れの名残惜しさと嬉しさが入り混じった感覚である。嬉しいというのは私たちが今回の活動が無事終了されたことへの嬉しさであり、名残惜しいというのは今回行動を共にした団員の皆で、それぞれ学校は違うがとても馬が合った。そして師であり友である団長、そして上手な通訳など、私たちの世話をしてくれた王先生、勿論日々常に私たちのために奔走してくれた中島さん、そして皆と語り合った8日間についても名残惜しく感じている。それでもお別れは避けられない。将来再会した際にまた共に語り、歌い、遊べることを願っている。

日 付：6月6日（火）8日目

大学名：北京交通大学

氏 名：任二祥

今日は訪日の8日目でも最終日でもある。朝起きて自分が間もなく日本を離れることを改めて感じ、視界に入るものが自然とより大事に見えた。

朝食ではまたもやお粥を4杯食べた。お粥と漬物は毎朝欠かせないものである。ここ数日は日本料理を食べているが中々慣れない。日本料理については将来日本に来た時にまた体験したいと思う。朝食を済ませ、私たちはホテルニューオータニの見学を始めた。私は同ホテルの環境保全における理念とその行動に感心させられた。同ホテルは自ら污水处理施設を建設し、汚水を浄化した後に再利用することで、毎年約200万人民元相当の経費を節約している。汚水の処理過程を見ていると気持ち悪くなってくるが、処理を終えた様子を見ると、心には称賛と敬服の気持ち、さらにそれ以上に残念な気持ちが芽生えた。残念な理由は、中国の多くの工場では工業廃水などを直接排出し、環境や水源を汚染しているからである。歴史は似たものであり、40数年前の日本においても環境汚染がひどく、河川では魚が死ぬといった状況があった。中国は現在痛みの時期にあり、私たちは日本から環境保全の技術や理念を学ぶ必

要がある。

ホテルニューオータニでは木製の貯水タンクを造り、ゲストに上質の飲用水を提供している。またごみを細かく分類し、生ごみについては肥料プラントを通じて有機肥料に変え、野菜等の仕入先に提供することで循環利用を形成している。エコロジー経済学の面については、中国はまだ多くを学ばなければならない。

歓送会での昼食の際、ホストファミリーのお父さんとお母さんと再会した。彼らとは二日間足らず一緒に生活しただけだが、彼らの親近感と優しさに感動した私は次回また日本を訪れ彼らと再会することを約束し、また彼らを中国に招待した。

歓送会の席上良いニュースが入った。中国が提唱する「一帯一路」構想に対して、日本の安倍晋三首相が将来的な参加に前向きな姿勢を示したのである。これは中国と日本にとって良いニュースであり、日中関係が平和・友好的、また互恵的な方向へ健全に発展していくことを願っている。私は両国友好のボランティアとして、周りの人々に真実の日本の様子を知ってもらふ為に、日本で見聞きしたことを伝えていきたいと思う。

学生たちの観た日本

大学名： 清華大学

氏 名： 王徳標

テーマ： 4.日中間の交流

私たちは幼いころから、日中両国が一衣帯水の隣国であることを知っている。両国には古の時代から密接な交流があり、鑑真が日本に渡ったのもその実例の一つである。しかし近代以降、両国は戦争を経験したことにより、それ以降の交流の減少をもたらした。両国の国交正常化45周年の今年にあっても、交流はまだまだ不足しているという現状である。

中国駐日大使館からの説明によると、2016年、日中両国合計で約900万人の行き来があったが、中国から日本を訪れた人数は600万人に達したのに対し、日本から中国を訪れたのは300万人に満たない数字となっている。これは多くの中国人が日本及び日本の文化を知ろうとしているのに対し、日本人、特に若者の中国への情熱は低く、両国間の交流は未だ楽観できないことを意味している。

ホストファミリーとの交流では、日本の若い世代の中国への知識の少なさ、ひいては中国への誤解というものを感じた。この点については、メディアの報道の原因もあるが、それとともに日中両国の交流不足も大きな原因だと言える。十分な意思疎通や交流なくしては、互いの情報の信憑性と正確性を保証することはできないのである。今後、両国がこれまで以上に交流や提携を深め、中国人が真実の日本を、また日本人が真実の中国を知ることができるよう願っている。

個人的な視点で言えば、私たちは日本での学習や交流の機会にできるだけ多くの日本の文化や伝統を体験し、日本人の性格や特徴を知る必要がある。また学校の視点で言えば、可能な限り交流や提携を強化し、双方の青年に対話の場を設ける必要がある。そして国の角度で言えば、私たちはメディアや書籍などに真実の日本を紹介させ、両国の提携を強化し、共にアジアの台頭を促進していく必要がある。

このほど日本の安倍首相が一带一路へのサポートの意向を示したことが日本のメディアなどで大きく報じられ、両国の交流により良い条件をもたらした。今後日中両国の各方面は互いに手を取り合い、交流促進のためそれぞれの貢献をしていかなければならない。

大学名： 清華大学

氏 名： 顧欣宇

テーマ： 1.国民性についての理解

8日間の旅を通じて、私は日本の経済、政治、文化等様々な面について体験し、多くの感銘を受けた。以下にいくつか述べたいと思う。

一つめは、日本は非常に発達した国で、経済も発展し、人々は物質的にとても豊かで、精神面では平等と博愛を重視している。「人々の平等、人間本位」の考え方は日本人の生活のあらゆる面に浸透しており、それは企業運営においても例外ではない。企業の命名にしても日本人の平等への意識が表れている(三井住友銀行)。そして従業員の多くが障がい者であるオムロン京都太陽株式会社を見学した際は、その思いはより強くなった。同社では障がい者に対して物質的な単純な福利ではなく、精神的な満足感をもたらすべく様々な工夫をしている。例えば工場内の各機械

の配置などは身体にハンデを持つ従業員のために工夫されたもので、同社は彼らに生存の権利のみならず、生活の権利や尊厳をもたらし、従業員に労働を通じて自分の生き甲斐を実現できるよう配慮している。しかも身体にハンデを持つ彼らの給与待遇はその他一般の人と同等である。こうした点は中国国内の企業や慈善事業機構が学ぶべきものである。

二つめは、日本は時間にとっても正確な国で、今回の訪日におけるあらゆる活動は全て事前に定められたスケジュールに基づき正確に行われた。見学先の企業もまた、私たちが時間を無駄にすることのないよう事前に私たちを出迎えており、見学においてもスケジュールを厳守していた。それに比べて、私たちは日頃校内で会議を行う際、いつも遅刻をする人がいて、それが当たり前となり、心にもかけなくなっている。そのため、時間への正確さについては私たちもしっかり日本に学ぶべきだと思う。

三つめは、日本人はとても礼儀正しい。「ありがとうございます」という言葉はしょっちゅう耳にすることができる。身分や地位の違いなど関係なく、皆が礼儀を以って他人と接している。店員のサービスマナーも素晴らしく、親切で細やか、そして丁寧で気配りが行き届いている。これらは私たちがしっかり日本に学ぶべきものである。私たちは「礼儀の国」を自称しており、失われた礼は野に求めなければならないのである。

大学名： 清華大学

氏 名： 韓儲銀

テーマ： 1.国民性についての理解

4.日中間の交流

日本での8日間において、私は一連の活動を通じて日本の様々な面について知ることができた。ここでは、日本の人々が他国の優れた物事を学ぶことに長けていることと、日中の交流は未だ不足しているという二つの点について述べていく。

ホームステイの際、私は日本の中学校の教科書において『桃花源記』、『史記』、『論語』、『紅樓夢』等の古詩や文章、ことわざなど中国の伝統文化について沢山掲載されていることに気が付いた。ホストマザーは、「私たち一家はとも中国の文化が好きで、中国の文化には素晴らしいものが非常に多く、私たちはそれを吸収し自分のものとしていかなければならない。そうしてこそ私たちはより良く成長できる。」と述べていた。以前から日本人は学ぶことに長けているという話を聞いたことがあるが、今回の経験はやはり驚くべきものであった。他国の優れた点を学び自分を高める、こうした意識は日本人の深層心理にあるものなのかもしれない。これは素晴らしい力であると同時に恐るべき力である。日本民族の生命力の強さは、学ぶことに長けているという国民性と切り離す事ができないものである。

しかしながら、日本の一般市民の中国への理解は未だ不足している。ホストマザーは25年前に北京を訪れたことがあり、彼女から北京の街では今でも沢山の自転車が走り、人々は薄暗い色合いの洋服を着て出かけているのかと聞かれ、私が北京は今では国際的な大都市で、毎日1000万人以上が地下鉄を利用していると話したところ、とても驚いていた。大使館での汪参事官からの日中関係についての紹介では、中国を訪れる日本人は毎年200万人以上いるが、大多数が仕事の関係での訪中であり、真に中国を知り、中国人と交流を持とうとする日本人はとても少ないとのことであった。交流が少ない現状から、多くの日本人の中国への印象は、20世紀ひいては第二次世界大戦当時のものに止まっている。そのため、日中両国の交流を強化することは非常に重要である。今回私たちは日本を訪れたが、日本の優れた部分を学ぶ以外に、私たちは日本人の人々に中国の現状を紹介し、中国の声を伝え、中国の在り方を示さなければならない。これこそが今回の訪日における最も大きな意義である。

大学名： 清華大学

氏 名： 鍾玲

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

ここでは日本のマナーや思いやりについて語ってみたい。まずマナーについて私は、日本とはとてもマナーを重視する国だと思った。友人であれ、またはホテルのサービススタッフであれ、顔を合わせる度に会釈や挨拶をする。これには私たちも、中国に戻って以降学校の宿舎で警備員を見かけたら、会釈をしてさらに「おはよう」と声をかけるようになるかもしれないと冗談を言い合った。食事の前には「いただきます」と言うことで料理に携わった方々への感謝を示し、お酒をすすめる際は、自分でお酒を持ち、相手にお酒を注いでから乾杯する、これらは中国とは多少異なるものである。茶道においてはよりマナーを重視しており、茶菓子を食べてから茶を飲む、茶碗が置かれる際は茶碗の柄のきれいな面がこちら側を向いており、茶を飲む際はきれいな柄を相手側に向ける、飲み終える際には吸い切りの音を出すことで美味しかったことを知らせる、飲み終えたら茶碗を拭く、これらのマナーから日本人のマナーへの重視度合が見て取れる。

それから思いやりの面について私は、彼らはいつも私たちが食べられないもの、苦手なものを気に掛け、マンゴーへのアレルギーのある学生へ別のものを準備するなど、とても他人を気遣い、またとても友好的で親切だと思った。私のホストファミリーは私を連れて出かける際、常に私の行きたい場所などの意見を聞いてくれた他、私に付き添って街を散策したり、私の食べたい料理を作ってくれたり、食材の買い出しの際は私の食べたいものを聞いてくれて、さらには私の誕生日のお祝いまでしてくれた。彼らは本当にとても私の意向を尊重してくれた。

私は、日本には沢山の中国とは異なるマナーがあり、彼らはそれらのマナーを厳しく守っていると感じた。そして日本人はとても友好的で、他人を思いやり、他人の意向を尊重すると感じた。

大学名： 清華大学

氏 名： 連鵬龍

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

3.マナーのよさと思いやり

今回の8日間の訪問と交流を通じて、私は日本について新たな認識と理解を得ることができた。

総じて言えば、私の日本への感覚は「それぞれがそれぞれの道を行く」である。人と人、人と自然のいずれもそうである。「それぞれがそれぞれの道を行く」、これは決して互いを隔絶するわけではなく、逆に、常に他人やその他の物について考え、それらへの利便性をもたらすことで全てを調和させている。日本人は万物にはいずれも神が存在していると信じている。そのため彼らは自然を尊重また保護し、人と自然の調和を実現している。

当然、若い世代の日本人もそうした「それぞれがそれぞれの道を行く」の民族的特性の影響を多少なりとも受けており、他人との間にはマナーはあるが、情といったものについては多少欠けている。だがいずれにしても、こうした「それぞれがそれぞれの道を行く」の特性によって日本の社会はとても調和がとれている。

この他、日本人の集団帰属意識について私はとても感心している。彼らは複数の会社から一つの商社を構成し、提携と競争を通じて共に発展をしている。また彼らは世界を視野に入れ、広い心で全人類の生存や発展に関わる命題に取り組んでおり、何代も事業を継続し、何十年ひいては何百年の歴史を持つ企業をいくつも創っているのである。

日本人のマナーや思いやりにはとても感心させられた。よくよく考えると、これは正に私たちの古代文化において提唱されていた品性ではなかっただろうか？しかしながら、日本人はこの面で私たちよりも優秀である。法律に定められてはいないものの、日本人は自発的にエスカレーターでは片側に立ち、急いでいる人のために道を空けている。

今回の8日間の訪問で、私は日本について新たな認識が得られた。日中間の交流や提携が今後さらに増えていくことを願っている。また私自身も将来日中友好提携に何らかの貢献ができることを願っている。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 姜雨荷

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

「皆にはそれぞれ帰る場所がある」、これは8日間の日本での生活を通じた私の感想で、日本ではぬくもりや帰属感というものを感ずることができた。

「従業員は家族で、会社は家である」、いくつかの企業を見学したが、各企業の理念には「従業員を思いやり、人材を重視する」といった意味合いが込められていた。また同時に私たちが実際に会った各企業の従業員もまた彼らの笑顔や仕事への情熱を通じて、彼ら自身もまた仕事を重要なものとして捉え、同じ目標または社会そして理想のために、また昇進やお金のためだけでなく、自分自身そして企業という「家族」のために奮闘している。

「自分の学校が提供する舞台で自由に能力を発揮する」、これは日本の大学及び大学生についての私の印象である。或いは京都大学や一橋大学の学生数が比較的少ないため学校側も学生に対しての方向性を持った管理がしやすいという面も有るかもしれないが、私たちが交流をした際、大部分の日本の学生は学校のリソースを利用し自身を高めていることを知った。図書館、海外交流、科学研究など、学校側は学生のために大きな舞台を構築し、学生らはそれらをうまく活用している。反対に中国国内の状況について私は、大部分の人が学校の入学通知を受け取った後、学校のリソースを活用せず、教育資源を無駄にしていると感じている。そのため、私たちは日本の学生に学び、口より手を動かし、将来へのプラン設定をしっかり行い、学校や身の回りの教師そして学生と良い関係を構築していく必要がある。

最後に、この文の初めの一言について改めて説明をしたいと思う。「皆にはそれぞれ帰る場所がある」というのは、一種の精神的な帰属感のことで、自分の情熱を傾けることができる場所、つまり仕事や学習またはその他の趣味、ひいては例えば他人に優しい、細かいことに拘らないといった一種の生活態度のことをいう。そしてそれらの情熱を持ち、追求をしている。これがこの数日間において日本の大部分の人から受けた印象である。

そして個人的には、今回の旅における最大の意義は、自分自身が学習や学習環境そして専攻の意義というものを見直すことができたことにあると思う。成績や順位とは関係なく、最も重要なのは自分を高め充実させることであり、自分の今後数十年の生活のための投資をすることである。順位は他人との比較だが、しっかり学べたかどうかは自分自身の問題である。だからこそ学習は自分にとって何よりも重要で、急を要するものである。

先生方や仲間の皆にはとても感謝している。今回皆で有意義な8日間を過ごすことができた。今回の収穫を自分の力として、再会の時には最高の自分でいられることを願っている。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 陳子鑫

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

ここでは主に日本人のマナーと思いやり、そしてその表現方法について語ってみたい。まず日本人のマナーの良さは有名で、人と人が会う際は決まって挨拶やお辞儀をする。ひいては見知らぬ人同士目が合った場合でも、互いに笑顔で挨拶をする。また彼らは言葉におけるマナーを重視する。こんにちは、ありがとう、さようなら等は毎回のお辞儀の際に使う言葉である。彼らとの交流では、おのずと自分が尊重そして重視されているという感覚が生まれる。

私は、日本人のマナーは彼らが他人の気持ちを重視していて、自分の真心を全力で相手に伝えようとしていることから来ているのだと思う。実際に彼らの茶道がその点を最もよく表しており、主人が茶碗の最もきれいな部分を客に向ける動作は、客への重視と尊重を示している。そして客が茶碗を180度回す動作、茶を吸い切る音、そして自分の口を付けた部分を拭き取るといった動作もまた主人への尊重を示している。こうして私たちが知る日本人のマナーが形成されている。そうしたマナーの多くは動作と言葉が共存している。

日本人の生活においては、他人の気持ちをとても重視する。公共スペースでは大声で話をする人はほとんどいなく、小声で話をする人も少ない。公共施設ではほぼ全ての人の需要を現実のものとしており、各人が必要な機能を見つけることができる。レストランやホテルといったサービス業では客の評価が最も重要な要素で、彼らのサービスを受けたことがあれば、あらゆる面で行き届いていることが分かる。

他人の思いに配慮することはすでに日本人の習慣になっており、私はこれもまた人間の品性の表れだと思う。孔子が言った「己の欲せざる所は人に施すことなかれ」の言葉も同様である。そして日本ではすでに他人の思いにまでも配慮し、しかもほぼすべての人がそれを実行できている。これには本当に頭の下がる思いである。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 李雅嫻

テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー

日本のソフトパワーは誰もが認めるところである。アニメを例にとると、日本のアニメ産業は一つの完全な産業チェーンを構築しており、様々なノベルから漫画、そしてアニメひいては様々な関連グッズまで完全に整備されており、規模も非常に大きく発展している。

秋葉原は有名な二次元商品の聖地であり、沢山のアニメリソースや体験ショップ、グッズショップにより、特に購買力のある若い世代を引き付けそして経済の発展を牽引している。また同時にアニメは輸出文化として様々な角度から自国の文化を発信している。例えば、漫画などでしばしば登場する神社や茶道、和服といったシンボリックな文化については、作品の中で生き生きと描写されており、文化大使の役割を果たしている。

またアニメだけではなく、日本は文化の継承についても素晴らしいものがあり、元来中国から伝わった茶道や座禅、建築等の文化はいずれも今日まで確実に継承されており、冷遇されることはない。それに比べて中国は5000年の文化や歴史など途切れることなく続いてはいるが、現代においては茶芸や刺繍、漢服、伝統音楽といったものは次第に冷遇され、多くの無形文化遺産は継承者がいないという難題を抱えている。例えば伝統的な舞台芸術を例にすると、国粹である京劇については授業で取り上げることは増えつつあるが、影絵芝居や樂亭太鼓といった私の出身地である唐山地域を代表する芸術については、現在ではほとんど目にすることはない。

こうした芸術についてはその存在を守る以外に、さらに積極的に革新をして新たな形で発展させる、または新たな表現形式を追求することで私たちの文化を継承し、真の文化継承と文化輸出を実現する必要がある。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 秦宇

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

今回のスケジュールにおいて最も収穫があり、また印象的だったのは日本の伝統文化の継承とそうした文化の国民一人ひとりにおける内在化であった。日本では伝統文化は国を構成する重要な要素であり、政府が大いにPRをしている。また文化や古跡などの保護に資金を投じており、日本の国民は伝統文化をとて尊重し、自発的に継承そして発揚をしている。日本の街中では和服姿の人をあちこちで見かけ、しかも人混みの中でも全く違和感がなく、日本人にとっては当たり前の光景となっている。中国から伝わった茶道もまた、日本の人々はしっかりと継承し、マナーを以て古代からの伝統を学んでいる。こうした環境の下、日本の伝統文化は日本の国民一人ひとりに浸透し、自分たち自身のものとして、また国民性として、国民一人ひとりに良い影響をもたらす文化となっている。正に汪参事官の言葉にあったように、こうした文化の内在化は日本の国民に温和、親切、マナーの良さといった特徴をもたらし、全体的な国民の素養をさらに高めたと言える。

この点については、中国はまだ多くを学ぶ必要があると思う。たとえ経済が急速に発展しても、文化や精神面の発展が遅れてはならず、物質と精神が共に発展してこそ、中国は真に強い国になることができると思う。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 呉成庚

テーマ：6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

「夷の長所を以て夷を制す」、これは近代の先達が当時の国民を啓発した理念であるが、今日では「夷の長所を以て共に進歩を促進する」必要があり、中国が歩むべき道となっている。

日本訪問期間中は日本企業の視野の広さと将来への方向性の素晴らしさを感じた。利益を確保した上で、全人類、全社会に目を向ける理念は学ぶべきものと思った。そうした中私は、いくつかの事について将来中国で大きく発展するのではないかと感じた。

一つめは介護産業である。訪日期间中、交流過程や街中、地下鉄、ホームステイまたは温泉など様々な場所において高齢者の姿を見かけた。日本では高齢者の生活はとても充実していて、高齢者向けの製品なども存在している。今回の訪問では介護産業に関わることはなかったが、高齢者比率が日増しに高まる中国では、将来的に大きな発展が見込まれる産業だと感じた。

二つめは病院の運営管理レベルの向上である。日立の見学の際、同社が病院運営改善シミュレーションシステムにより病院のサービス・運営効率改善をしているのを目にした。ここ数年、中国の病院では問題が続出し、政府が急ピッチで改革を進めている背景の下、病院の運営管理レベルの向上は医療体制改革と一体となるべきもので、関連のコンピューターやビッグデータ技術への需要も拡大していくことが見込まれると感じた。

この他、ハイブリッド自動車の開發生産、ホテル等の商業施設運営におけるエネルギー管理技術などへの需要も中国では今後拡大していくと思われる。

外国の進んだ理念の学習を通じて、技術を発展させ、社会全体の発展を推進する。これが中国がより豊かで強い国となり、大国の責任を果たしていくための道である。

大学名： 對外經濟貿易大学

氏 名： 閆一萱

テーマ：1.国民性についての理解
3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

ホームステイは私の今回の日本訪問において最も忘れ難い体験であった。訪日前から宇田川さんは私の行きたい場所や食べたいものなどをリサーチしてくれて、さらに天気の状態まで考慮に入れた上でとても細かなスケジュールを作ってくれた。そして宇田川さん一家と共に神楽坂、お台場、井の頭公園そして吉祥寺の商店街などに行った。皆さんとても親切であった。実のところ私は多少人見知りなので、初対面の際は緊張で私の日本語もとても拙かったが、神楽坂で不二家の抹茶味の鯛焼きを買ってもらった際に宇田川さんの娘さん(enaさん)の笑顔を見た瞬間、それまでであった緊張感が綺麗になくなった。宇田川さん一家は閑静な住宅街に住んでいて、近くには小学校や小さな商店がある。また広くてきれいなバス、坂が連なる小さな道、生い茂る草花、そして子供を連れて散歩する沢山の家族の姿を見かけた。お台場海浜公園の夜景はとても壮観で、自由の女神像やレインボーブリッジそして東京湾が織りなす景色、吹き付ける海風、泳ぐクラゲの姿が見えるほど透き通った水などが印象深かった。そして井の頭公園の景色はとてもきれいで、多くのミュージシャンが演奏をしていた。また吉祥寺の賑やかな商店街、多くの人でごった返す書店、行列が途切れることのないお店などを見かけた。また宇田川さんの二人の娘さんはとても可愛かった。そして宇田川さんの奥さんは韓国人であり、その日の夜は日本という異国での生活について奥さんと沢山おしゃべりをし、日本在住の外国人の視点から日本という国を知ることができた。

日本は本当に優しい国で優しい心を持っていると思った。私は訪日団の仲間と自由時間を利用して居酒屋に行ったが、その際お店の人は私たちが中国人だと知って、話すスピードを緩めてくれ、またその笑顔はとても優しかった。その他住宅街にある古い歴史を感じさせる駄菓子屋、そして道を走る自動車が常に歩行者を優先していることなどが印象深かった。

人間性というものは本当にしっかり考えるべき問題である。日本の国民性にある他人に迷惑をかけない、穏やかに物事を行うといった部分にはとても魅力を感じた。

大学名：对外経済貿易大学
氏 名：李黛雅

テーマ：3.マナーのよさと思いやり
4.日中間の交流

今回の日本での旅において最も名残惜しいのはホストファミリーの皆さんである。彼らとの一泊二日の交流を通じて日本人の細やかさと優しさをより深く感じる事ができた。

ホストファミリーのお母さんは優しく可愛らしい人だった。食事の際は笑顔で無理をしなくていいから、食べきれなかったら残しても大丈夫だからと声をかけてくれた。ショッピングの際はお店の商品の美しさを心から褒め、おしゃべりの際は、私が日本語の組立ができずどう話していいかわからない時でも私が話すのを待ってくれて、さらに慌てずゆっくり考えてと言ってくれた。ホームステイの二日目では前の日は良く休めたかどうか、食事は口に合ったかどうかを何度も気にしてくれていた。そして陽射しが強かったため事前に私のために外出用の帽子まで準備してくれていた。

ホストファミリーのお父さんもまた優しくとても親身にしてくれた。私が行きたい場所や食べたいものなどについて、私が日本に来る前からメールで確認をしてくれた。そして私が東京の観光スポットに詳しくなかったので、観光スポットの紹介HPなども送ってくれた。またスカイツリーを予約し、私に展望台からの東京一帯の景色を見せてくれて、色々と説明をしてくれた。夕食後のおしゃべりでは日本語を上達させるための方法など沢山のことを教えてくれて、とても参

考になった。

娘さんもまたとても明るく、私は本当に彼女のことが気に入った。年齢こそ私より若いですが、色々と私の世話をしてくれた。おしゃべりの際は、私が聞き取りやすいように話すスピードを緩め、身振り手振りを使って説明してくれた。二日目は部活の関係で一緒に遊ぶことはできなかったが、それでもわざわざホテルまで私を見送りに来て、さらに手紙までくれた。私は本当に彼女のことが好きである。

それからおじいさんはとてもユーモアがあり、また細やかな気遣いをしてくれた。おじいさんとのおしゃべりではいつも笑い声が絶えなかった。またおじいさんからもらった草加せんべいはとても美味しく、また桜の風景写真はとても綺麗であった。

彼らとの交流では、彼らの心からのおもてなしや思いやりにとっても感動させられた。今後彼らを中国に招待し、同様に中国人の優しさを感じてもらえる機会があることを願っている。

大学名：対外経済貿易大学

氏 名：林子恵

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本での約1週間の旅では沢山の収穫が得られた。その中でも印象深かったものは二つある。

一つめは日本人のマナーである。どんな時でも日本人に出会うと、彼らはとても穏やかな声で話をする。またエレベーターに乗る際は一言「すみません」と言う。ホテルやコンビニの従業員などはいつも笑顔で客からの様々な要望に対応している。この点は中国と比べると大きな違いである。またホームステイの舞台は住宅街であったが、至るところに趣のある白い家があり、その様子はとても可愛らしかった。また午後に庭でバーベキューをしている時、隣の家の人が出かけるのを見かけるとすぐに挨拶をし、さらにできたての肉を先に相手に渡していた。ホストマザーが言うには、近所同士の関係はとても良く、何かある際は互いに助け合っているとのことであった。

二つめは日本の衛生面である。この点については初日に飛行機を降りてすぐに感じる事ができた。道路にはごみ一つ落ちてなく、至るところがきれいであった。ホテルのトイレも驚くほどのきれいさで実家のトイレと変わりなかった。地面や便器など汚れが全くなく、頻繁に清掃をしているのが分かった。また日本の道路を走る車は車輪が輝いていた。先生の話によると、日本のドライバーは時間があると車内で寝るのではなく、車を磨いていて、こうしたメンテナンスも重視しているとのことである。

大学名：対外経済貿易大学

氏 名：陳卓

テーマ：1.国民性についての理解

「秋近き心の寄るや四畳半」

これは日本の著名な俳人である松尾芭蕉の句で、夫婦の感情を描いたものである。四畳半というのは夫婦が生活を共にする居間のことで、ここの机といす、絵や屏風はいずれも二人の生活の証しで、深い思いが満たされたものであり、夫婦二人の愛情が続いていく様を想像することができる。

なんと細やかな感情であろうか、これこそ穏やかな日本人の姿である。

私が実際に見た日本人もまた穏やかで優しかった。

優しい車、小さな家、狭い街、笑う人、会釈、譲る道、きれいな地面そして空気などもまた清々しかった。

私にはあたかも柔らかな日本の心が脈々と流れているのが聞こえたかのようであった。

大学名：対外経済貿易大学

氏 名：張元浩

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

3.マナーのよさと思いやり

今回の走近日企の活動への参加を通じて、私は日本についてこれまで以上にはっきりとした理解や認識を得ることができた他、日本への印象もこれまで以上に良くなった。個人的には社会の二大主体である市民と企業について印象深いものがあつた。

初めに市民についてだが、私の体験から言うと日本人はとてもマナーが行き届いた民族である。いつでも礼儀正しくあることはとても難しいことであり、こうしたマナーへの重視が社会全体に一種の調和をもたらしている。そのため、人と人とのいざこざも比較的少ない。また日本人は相手を思いやる能力がとても優れていて、日本人と一緒にいると不快に感じることはなく、春の風を浴びるかのように爽やかな気持ちになる。こうした思いやりというものは私たちが学ぶべきものである。

次に企業についてだが、日本には沢山の長い歴史のある企業が存在しているが、その理由は彼らの先進的な理念にあると思う。日立の「Inspire the Next」のスローガンは特に印象深いものがあつた。こうした未来に向けて革新を続ける理念はとても意義深いものがある。この他、日本企業の社会的責任感もとても強く、オムロン京都太陽であれ、または三菱商事の震災後の復興への貢献であれいずれも重要なものである。社会には企業の責任感が必要であり、一つの形にこだわらず様々な形式の福祉を展開し、政策と企業の福祉が組み合わさって完全な社会福祉が構築されてこそ、より良い社会になっていくと思う。

大学名：北京外国語大学

氏 名：艾倍兆

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

私たちは8日間の日本での旅において企業への訪問や大学での交流、そして文化体験などを通じ様々な角度から日本を感じ、日本を知ることができた。初めて日本を訪れた私の日本への第一印象は、親しみやすい国であつた。道路はとてもきれいで、住宅の外観もとても素晴らしく、人々は皆礼儀正しく、コンビニの店員から企業や大学の役員までいずれも謙虚な印象を受けた。「お待たせしました」や「ありがとうございます」といった一言や会釈といったわずかなことからまた忘れ難い素晴らしさを感じることができた。中国にはこうした礼儀がないわけではなく、またこうした教育も欠けているわけではないが、人々は感謝やお詫びといった言葉または動作をすることが少なく、どちらかと言うと自分より年長で地位の高い人への尊敬を示す傾向にある。私個人について言えば、日頃から学校の食堂などで食堂の従業員に「ありがとうございます」と言っているが、周りではそうした人はさほど多くない。そのため、時折従業員が私の感謝の言葉を聞いて驚いたあとで嬉しそうに「どういたしまして」と返事をするのを聞くと、私の心は複雑な気持ちにな

る。彼らが驚くのは私たち学生が普段感謝の気持ちを表すという意識に欠けていることを意味していて、ひいては彼らの長年の労働について考えることなく、お金を払っているのだからサービスを受けて当然というような浅はかな考えを持っているからだと思う。いつになったら私たちの社会が年齢や地位といった制限のない礼儀を身に着け、他人を思いやり、また他人による自分へのサービスなどを当たり前のものとしなくなるのだろうか。

一連の訪問を終えた私の日本への二つめの印象は「科学技術によるイノベーションを追求する社会」である。日立の研究所での見学において私たちは人へのサポートやより良い生活を創造するために作られた、人工知能による話者識別翻訳システム等のイノベーション製品を沢山見かけた。未来の中国は世界においてより活発に重要な役割を果たしていき、これまで以上に多くの国際的プロジェクトが展開されるであろう。そのためこうした複数言語の識別翻訳のシステムは国際交流において広く利用されるであろう。次にホテルニューオータニにおける資源の循環利用技術も中国において広く普及されるべきであり、日増しに増加する人々の資源需要と資源自体の有限性との矛盾を緩和することで、より環境に優しい生活状態を実現していく必要がある。

大学名：北京外国語大学

氏 名：秦諾雅

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

中国では日本人のマナーの良さについて色々と耳にするが、今回日本を訪れて私自身そうした認識への理解を深めることができた。まずレストランではスタッフが常に笑顔で「いらっしゃいませ」や「ありがとうございます」といった言葉を何度も口にしていた。また40過ぎの中年の男性スタッフや女性スタッフが私たち大学生に対しても会釈をし、敬意を示していた。ホテルに到着した際は私たち一行30数名の一人ひとりに対してスタッフから歓迎の言葉があった。そしてこの8日間路上で慣れることのなかった事と言えば、車が歩行者に道を譲る事であった。前方に道を横断しようとする人がいる場合、全ての車が止まり歩行者に道を譲るのである。エレベーターに乗る際は互いに見知らぬ関係であっても会釈をし、挨拶をする。こうした様々なやさやかな行為は、これまで外国に来たことのない私にとっては想像がつかないものであった。今回日本を訪れ日本のこうした文化を間近で感じる事ができたことは、自分にとっては意義深いことであった。中華民族の伝統文化にもこうした精神は存在しているが、時間の経過により、また私たちは生活に追われ、こうした精神を忘れてしまっている。私たちは日本の優れた部分に学び、さらには私たちの伝統を復活させ、継承していく必要がある。

次に日中間の交流について見てみる。今回私たちは2日間のホームステイを体験した。私のホストファミリーは今回初めてこうした活動に参加したとのことで、彼らとの交流の際には、ホストファザーが中国に出張で行く以外に他の人は中国に行ったことがなく、彼らの中国への印象はいずれもマスコミの報道によるものであることが分かった。しかしマスコミの中国への報道は誇張されているか事実とは違う場合が多く、彼らの中国への間違った認識に繋がっている。また他の団員の話によると、彼らのホストファミリーは中国に自動車が見物車走っていることや高速鉄道の存在があることに信じられない様子であったとのことであった。それと同様に私たち大部分の中国人の日本への印象や理解もマスコミの報道と密接に関連している。そのためこの点が両国の国民に誤解が生まれる原因となっている。相手の国に赴き、自分の行動で彼らに真実の中国の姿を知らせることは、日中両国関係の友好的な発展を促進する効果があると思う。

大学名：北京外国語大学

氏 名：郝琦璘

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の訪日では沢山の素晴らしい印象深い思い出が残った。日本の環境は素晴らしく、サービスの態度も良く、多くの優れた文化をさらに高めている礼儀の国であることはかねてより聞いていた。そして今回実際に日本を訪れ、まさに評判通りだと感じた。スモッグの都市である北京を離れ、飛行機は関西国際空港に着陸した。きれいな空気、空にきらめく星々、そしてサービススタッフによる細やかなサービス、これらいずれも私の期待をさらに膨らませるものとなった。日本の道路はとてもきれいで、塵一つないほど清潔といった感覚である。そして日本のタクシーはどれも車体がきれいに磨かれている。タクシードライバーは時間を見つけては車を磨き、タイヤすらもきれいにしている。そして彼らは紳士的な制服を身に纏い、とても礼儀正しい。タイヤまできれいにする必要はあるのか、毎回お客を下した後車を磨く必要はあるのかと思ってしまうが、よくよく考えると、これは日本人の「こだわり」の表れではなく、すでに何世代にもわたって積み上げられた浸透している習慣なのだと感じた。私のホストファミリーについてもそうしたことが言え、ホストマザーは家の中をととてもきれいにしており、装飾品もとても美しく、部屋全体があたたかさと上品さに満ちていた。そして毎朝部屋の掃除から一日が始まる。中国には「家の掃除ができない者は、どうして天下の掃除ができるのか」という言葉があり、私は日本人とは正にこの言葉を実践しているのだと思った。家庭という小さな単位から始まり国全体まで、各人が自発的にこうした行いをする事で、自然と驚くべき効果が示され、こうした些細な部分を重視する秩序立った態度は次第に日本人の国民性となり名高いものとなったのである。「逆に」と言うよりかはそれぞれの良さがあると言ったほうが良いかもしれないが、北京のタクシードライバーを例にすると、彼らの制服は情熱の黄色で、車内では楽しく乗客とおしゃべりをする。時には環境や渋滞のことなどについて愚痴をこぼしたりもするが、ほとんどが優しく親切である。私は日中両国のこのような比較的明確な違いは、両国の異なる文化や環境の影響によるものだと思う。優劣をつけることはできないが、相手側の手法から良い部分を汲み取ることはできると思う。実際に日本のきれいさに比べると、私たちはまだまだ成長できるはずであるが、私たちはこれまですでに大きな進歩を遂げている。また日本では多くの公共スペースにおいて自動設備が整っていて、人々が有意義に活用することができる。そのため自然と公共施設を保護し他人の利便性を考慮する考えが生まれ、日本の公共スペースは安定した運営がされている。こうした点は中国も学ぶべきだと思う。

大学名：北京外国語大学

氏 名：徐杭

テーマ：4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の活動は絶えず交流を続けた旅であった。日中関係が前進あるのみという今日にあり、日本のマスコミによる故意の曲解報道や歴史問題に関する中国の民族感情から、インターネットメディアだけをあてにした交流では不十分であり、小範囲の面と向かった交流がより効果的であると考えられる。

一橋大学では両国の大学生の就職活動について討論を行った。そしてこうした討論を通じて私たちは、日本の大学生は事前に卒業論文を完成させ、三年生からは就職活動を始め、様々な実習を通じて経験を積み、自分に適した

企業を見つけ、一連のテストや面接により「内定」を獲得して就職活動が終了するということを知った。彼らはまたタイムラインでそのプロセスを示してくれた。それと比べて中国の大学生の就職活動の時間は固定されておらず、はっきりとタイムラインで示すことは不可能である。だがそうした中でも、交流を通じて私たちは、両国の大学生の仕事の探し方や経歴を充実させる方法、及び仕事や企業の選択基準などについてはとても似ていることに気が付いた。私たちは正に「相違点」から一部の「共通点」を見つけ、さらにより具体的な「相違点」を見つけることができた。そしてこうした「相違点」について討論をすることで相手の国への理解がより深まる。これが私の交流というものについての理解である。

そして日立製作所中央研究所の見学では、同社の静脈認証技術について知ることができた。インターネットが日々発達する今日、安全問題は終始大きなリスクとなっており、特に中国では電子決済サービスが大きく発展している中、ユーザーのプライバシーや財産の安全は十分に重視されるべき問題である。現行の顔・指紋認証と比べ、静脈認証は本人のみがロック解除が可能のため、より安全であり、この技術は今後幅広く応用されていくであろう。そして人工知能による言語認証と転換技術においては、最終的に二つの異なる言語を話す人のスムーズな意思疎通を実現する。この技術もまた中国で大きく活用されるべきものである。中国の世界市場における役割が今後ますます大きくなり、加えて「一帯一路」等の国際プロジェクトの展開により、中国と密接な関わりを持つ国は増えていき、民間交流にとっても、関連言語の翻訳者を一人育てるのには時間的・経済的なコストがとても高いため、この技術は外国語人材への需要を大きく緩和するものである。

以上が日中交流及び新たな技術の面における私の拙い意見である。だが私は今後の学習を通じて自分の認識を広めることで、真に国際的視野を持つ人間になれると確信している。

大学名：北京外国語大学
氏 名：何雨婷

テーマ：4.日中間の交流

日中間の交流は政府間の交流のみならず、それよりさらに頻繁に行われているのは民間交流である。

今回の訪日活動において、私たちは一橋大学の学生と交流そして討論を行った。この時のグループ討論は日本語グループと英語グループに分かれて行われた。これは民間交流における有利な要素の一つである共通の言語によるものである。相手の話す内容を理解することができてこそ交流が実現できるのである。また交流を深めるには、相手を受け入れるまたは良い点を吸収するという態度が必要である。一橋大学の学生との交流では、皆はテーマについて事前に準備をしており、討論の際は話の筋道もはっきりとしていた。日中双方の相違点の比較の際、私たちは実際の中国の状況をありのままに紹介し、日本の学生からも多くの意見が出され、より様々な角度からの思考が可能になった。今回の討論会で最も印象深かったのは、情報の記録と発信における筋道である。筋道をつくるには情報を集約する能力が求められる。例えば一橋大学の学生はタイムラインを使い日本の大学生の就職活動状況を説明した。これは口で説明するよりも直観的である。今回のような大学生の交流活動もまた民間交流の一部分であり、また非常に効果のあるものである。こうした交流自体は非常に得難いものではあるが、人に与えるインパクトは通常の旅行などに比べてより大きいものである。

日中両国は一衣帯水の隣国であり、深い歴史的つながりと幅広い共通の利益を持っている。民間交流は非常に重要であり、「民が官を促す」形式は早くから実践されている。上で述べた大学生の交流活動以外にも私たちは旅行での交流や貿易での交流等を行っている。今回の訪日活動において見学した日本の大企業もまた中国と何らかの提携や交流を行っている。この他インターネットによる交流も若者の間で流行している。科学技術の発展により、私たちはインターネット上でより多くの気が合う友人を見つけることができるようになり、その中には多くの外国の友人も存在して

いる。こうした民間交流の方式はより手軽で、時間や労力が節約できる他資源の節約にも繋がっている。

日中両国間における友好は両者にとっても利益となり、争いは両者が被害を受けることになる。私たちは現有の資源を活用し交流や提携を行うことで両国関係の友好促進への努力をしていく必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏 名：李美婷

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本について取り上げる際、日本についての知識がない人は必ず日本民族は粗暴で冷酷だと言う。これは日本の侵略戦争がもたらしたマイナスイメージによるものである。私は日本語を学んでいることから日本の文化についてはある程度知っている。日本人はマナーを重んじる一方、他人に親切で、その思いやりには感心するほどである。オムロン京都太陽の工場では身体にハンデを持つ従業員の方々が早くから私たちを出迎え、会議室では水やペン、そして資料やイヤホン等必要なものがすべて準備されていた。そしてお別れの際もまた皆さんが私たちの車が視界から消えるまで見送ってくれた。日立製作所中央研究所、三井住友銀行、三菱商事、ホテルニューオータニそして交流をした二つの大学ではどこでも、スタッフが私たち皆に会釈や挨拶をし、見送りの際も同様に礼儀正しかった。日本人とはこれほどまでに親切でマナーを重んじる民族であることを私はこの時初めて知った。他人への思いやりという点については、ホームステイの2日間で最も強く感じる事ができた。ホストファミリーとの外出ではいつでもどこでも私は彼らの間の位置であった。ホストファザーが前で案内し、ホストマザーが私の後ろを歩いていた。時にホストマザーが道を案内したが、その時は私がはぐれないように彼女が5秒おきくらいに私の方を振り返っていた。こうした日本人の他人への思いやりはとても貴いものだった。食事の際も同様で、私が食べ始めてから皆も食事を始めた。こうした事もまた日本人のマナーである。夜におしゃべりをしていた際家族から電話があり、影山さんは私に気にしないでと伝え、私は隣の部屋で電話に出た。そして寝る前には歯ブラシやパジャマなどを持っているかを聞かれ、さらには冷蔵庫の中にあるものやWIFIのパスワードなど、あらゆることを教えてくれた。次の日には良く休めたかや、外出時にはたくさん歩いて疲れてないか、熱くないかなどを聞いてくれて、また日陰を歩くと涼しいと教えてくれた。こうした細やかな心配り、そして心温まる挨拶の中にも私自身のプライベートな空間も提供してくれる、これが、私が今回触れ合った日本人である。

お別れは名残惜しいものがある。日本の人々はホテルのゲートを出て私たちが彼らの視線から消えるまで見送ってくれた。他人に対して礼儀正しく素養が高い日本人は、他人に親切で、また他人を思いやっている。これらは私たちが学ぶべきものである。社会をより良くするため、私たちはこれらを周りの人に伝え、彼らを感化することで、より良い社会を構築していく必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏 名：張少臻

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

今回の活動において最も印象深いことについて話をするとした場合、きっと私以外の多くの団員もホームステイを取り上げると思う。日本の人々の思いやりやマナーそして熱意といったものは団員の皆を感動させた。

先人の言葉に、礼を失った場合、野にそれを求めることができる、というのがある。

ここでいう野については、日本であると言うしかない。すでに多くの伝統文化を失った私たちに比べ、日本は中国文

化、東アジア文化におけるノアの方舟としてこれらの貴重な文化を継承し続けてきた。日本の人々のマナーの良さそして他人への思いやりに、私たちは感動すると同時に畏敬の念を覚えた。

マナーについてホームステイの初日から話をする。私のホストファミリーは他のホストファミリーよりも多少到着が遅れ、私は一人で20分ほど待った。その後彼らは繰り返し私にお詫びをした。それは遅刻に対してのお詫びではなく、私を不安な気持ちにさせたことへのお詫びであった。90度のお辞儀についてはかねてより話には聞いていたが、やはりその様子には驚かされた。それからホストファミリーのお宅に到着した時とお宅を離れる時には、家族全員が出てきて挨拶またはお別れをしてくれ、しきりにお辞儀をしていた。これは初めての体験であり、現在の中国人にとっては面倒に感じるかもしれないが、こうしたマナーは双方を尊重するもので、互いを認め合うものである。

他人への思いやりについてはさらに驚かされた。ホストファミリーは私が帰国する際のお土産のことを考え、貴重な日本酒をくれた以外にも、さらに安くて良い品を色々と教えてくれた。化粧品を買う際、とある商品が人気で売り切れだったが、彼らはドラッグストア、コンビニ、デパート、化粧品専門店など手分けして探してくれた。最初の店になかった際私は買うのを諦めようとしたが、彼らは私や私の友人をがっかりさせたくないと言ってあちこち探してくれた。

この他面白かったのは、ホームステイの2日間での外出においては、一部のルートにおいて徒歩、自転車、バイク、自動車、タクシー、地下鉄、電車といった手段で移動できたことで、日本の様々な交通手段を体験できたことにとても感謝している。

ホストファミリーは私にこれまで感じたことのない温もりを与えてくれた。経済が急速に発展する中、私たちは失った中国のマナーというものと改めて向き合う必要がある。

大学名：北京郵電大学

氏 名：汪佳偉

テーマ：4.日中間の交流

今回参加した「走近日企」の活動において最も大きな収穫があったのはホームステイでの2日間であった。

この2日間では面白かった事や感動した事など沢山あったが、その中でも印象深かったのはホストファミリーとの交流であった。鎌倉へ行く途中、「紳士服」の看板を見かけた私は、中国にも「紳士」という言葉があるが、現在若者の間では紳士という言葉について意味合いが変わっていると話したところ、彼らはとても驚いていた。その後私たちはさらに、日中両国に存在するが意味が違う言葉について語り合った。例えば日本語で言う饅頭には餡が入っている、などである。ホストファミリーの中ではホストマザーとの交流が一番多かった。彼女は外国人向けに日本語を教えているため、私は自分が日本語を学習する際に感じた問題点やより良い学習法等について意見を交換した。

お別れの際、この2日間どこが面白かったか聞かれた私は、皆さんと一緒に交流できたことが一番面白かったと答えた。交流を強化することでのみ、日中両国は互いへの理解を深めることができるのである。

大学名：北京郵電大学

氏 名：都平

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本がとても矛盾した民族であることは、彼らの横暴でありながらも礼儀正しい民族的性格に表れている。近代以前、日本は中国という強大な民族に対して大きな善意と穏やかな姿勢を示してきたが、近代以降中国が零落すると、日本はまたかつての師であった中国への悪意や攻撃の意志を隠そうとせず、さらには今日に至るまで中国が急速に成長している事実を認めようとしない。彼らの学ぶことに長けた性格は彼らをより優秀にしているが、弱い者いじめの性格もまた彼らの曲がった根性を示している。しかし当然ながら、私は全ての民族における国民性には二面性があると思っているが、日本の国民性におけるこうした特徴について知った上で中国が唯一採るべき方法は、中国がこれまで以上に強くなることだと思う。今日に至るまで日本の民族には一部前述の欠点も存在するが、彼らはまた「礼」の真髄を理解しており、人と付き合い物事に接する態度については完璧だと言える。最も直観的なもので言えば、私たちが企業を見学を訪れる際には従業員の皆さんが事前に迎えに出て、お別れの際には私たちの姿が視界から消えるまで手を振って見送る。太陽が照りつける暑い日でも、雨が降る寒い日でもそれは変わらなかった。これには日本側からの大きな熱意と歓迎の意思を感じることができた。

習主席の言葉にあるとおり、現在の日中関係は正念場にあり、前進あるのみといった重要な時期を迎えており、今後の動向は両国の発展において非常に重要なものとなる。新たな時代におけるアジアインフラ投資銀行や一帯一路等の構築は、日中両国の交流をこれまで以上に緊密そして重要なものとする。そしてこうした重要な時期にあつて、青年・学生の交流は両国の発展を大きく促進する役割を果たす。青年は将来の国の発展における中核となる力であり、両国の青年の日中関係への態度は将来の両国関係の行方を左右するものである。そのため、中国は自身の文化におけるソフトパワーをアピールし、日本の青年にとって魅力ある存在となることで、日本の中国への認識や理解を高めていく必要がある。

大学名：北京郵電大学
氏 名：王芙蓉

テーマ：3.マナーのよさと思いやり 4.日中間の交流

まず私が感じた日本人のマナーの良さと思いやりについて述べたい。企業見学の際、企業側は私たちのバスが停車する場所まで迎えに出てきてくれた。そして笑顔でお辞儀をしながら「こんにちは」そして「おはようございます」と挨拶をするなど、彼らからは親しみやすさを感じることができた。その後の企業紹介の際は中国語を使い、日本語を使う際も中国語の通訳者がいて通訳を行うなどとても配慮がされていた。見学の際もスタッフが身近に付き添い説明してくれた。そして各活動においては予定の時間をしっかり守っていた。そして見学を終えお別れをする際は、スタッフがバスのある場所まで出てきて、私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。ホームステイでは、どこに遊びに行きたいか、今お風呂に入るか等々、何をするにもホストファザーがまず私の意見を尊重してくれた。そして最も心が温かくなったのは、私が湖南省出身で辛い物が好きと知ったホストファザーが、次の日の朝に辛い調味料を準備してくれたことであった。こうした細やかな点から、私は日本人の行き届いたマナーや思いやりを感じることができた。

今回の活動においてももう一つ印象深かったのは日中間の交流であった。京都大学や一橋大学ではいずれも交流や懇親会の機会があった。一橋大学では「日中の就職活動」について討論を行った。日本の就活には比較的明確なタイムスケジュールがあるが、中国の場合はそれが不明確である。私たちは大学三年生、四年生の時間別、そして国別にその相違点と共通点についてまとめ、その後皆の前で討論の内容や結果の発表を行った。京都大学でもまたこのような交流を通じて日本の状況について知ることができた。討論の後には懇親会があり、そこでは日中双方の学生が食事をしながら沢山の話をした。私自身日本語を専攻していて日本に関して基本的な知識はあったので特段驚い

たということはなかったが、日本の大学生との交流では、多くの日本の学生は中国が昔のままだと考えていた。またホストファザーも中国には興味があるが、中国の現状についてはさほど知識がなかった。こうしたことはまさに日中両国には基本的な交流が不足していることを示している。国と国の交流を促進すると同時に、日本人と中国人の直接的な交流にも配慮をすべきだと思う。

大学名：北京交通大学

氏 名：趙政

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

京都大学での韓准教授との交流を通じて私は、日本人は集団帰属意識が強く、責任感があることを知った。それを中国の古い言葉で言えば「在其位、謀其政(自分の仕事を全うする)」で、集団の各人がその集団に責任を持ち、自分のすべきことを極限まで全うしている。私はこれにとっても衝撃を受けた。こうしたことの実現には非常に強い責任感と大局観が必要であり、これらは集団意識の中核とも言えるものである。

マナーの面では自分自身がとても恥ずかしくなった。日本の大学生との交流が終わった際、たまたまとある女子学生が水の入ったケースを運んでいて、見たところとても大変そうだったので運ぶのを手伝った。すると日本の学生が、私が運んでいる姿を見かけてすぐに「あなたはゲストです。これは私がやります。」と、とても上手な中国語で話しかけてきた。私は大きな衝撃を受けた。彼自身は接待側のスタッフではなかったのだが、それでも自発的に「ゲスト」である私たちの手伝いをしたのである。こうした点から、私の日本人のマナーへの印象はより強くなった。

企業のスタッフや大学生との交流においては、沢山の共通の話題や観点そして考え方を発見し、それにより交流の楽しさも増した。京都大学の学生との交流の際、とある女子学生には授業があったのだが、彼女は「皆さんとの交流は楽しくて有意義なので、ここに残って色々な話をしたい。」と言っていた。私もまた恋愛やキャリアプラン等、現代の日本の大学生のあらゆる面について知ることができとても楽しかった。私はこうした大学生同士の交流を今後さらに進めていってほしいと思う。将来は私たち若い世代にかかっており、私たちもまた互いに理解し友好を深めたいと思っている。

大学名：北京交通大学

氏 名：王紫嫣

テーマ：1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

汪婉参事官も認めるように、日本の国民の特徴の一つは他人にとっても優しいことである。今回の活動を通じて、ホテルのスタッフであれ、またホストファミリー、日本の大学生、さらには見知らぬ他人であれ、彼らは私に最高の笑顔を見せてくれた。日本のサービス業はとても発達しており、彼らのサービスはとても行き届いていた。私はこうした親切さは彼らの国民性となっていると感じた。箱根の温泉旅館で温泉に浸かっていた際、とある物腰の柔らかそうなおばあさんが入ってきた。彼女は私たちが中国から来て日本語ができないと知った後でも、笑顔で私たちとおしゃべりをしようとしていた。私は、優しさというのはきっと日本の突出した国民性の一つなのだと思った。ホームステイの時、渡辺さん一家もまた私にとっても良くしてくれた。彼らとの交流はとても楽しく、私たちはそれぞれの国の状況について紹介し互いに

称賛しあった。これらからはいずれも日本人の親近感が感じられた。

それ以外にも、日本人はマナーを非常に重視していた。私は席を離れる際には椅子を元の場所に戻す、食事の際は残さず食べる、遅刻をしないといった様々なマナーや習慣というものを今回学んだ。一部のものについてはこれまで気に掛けることがなく、一部のものについては中国にそういった習慣がなかった。しかしこれらは私にとってとても印象深いものであった。私はまた京都での茶道体験を思い出した。茶道は客をもてなす際の作法の一つでもあると聞いた私は、これはとても素晴らしいことだと思った。日本人は客を尊重し、客を親身にもてなしている。私は、日本人は「礼儀」を文化として継承しているのではなく、そうした習慣を自らに浸透させて代々継承しているのだと思った。

大学名：北京交通大学

氏 名：原露恬

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本に来る前から日本人は礼儀正しく謙虚でマナーを重んじる民族だということは知っていたが、この8日間の旅により私のそうした印象はさらに深まった。またホームステイでの交流がその点をはっきりと認識させてくれた。

日本への出発の前からホストファミリーは私の緊張感を和らげ、互いの距離を近づけようと幾度もメールで私とやり取りし、娘さんはわざわざ微信(WeChat)をダウンロードし、私と交流をしてくれた。食べ物の面では、彼らは私が刺身を食べられるかななどを細かに聞き、さらにはホームステイの前に実際に食べてみて、もし苦手な場合はホームステイの際は他のものにしても問題ないと話してくれた。また私のためにわざわざお兄さんの部屋を片付け、そして様々なタオルから好きなものを選ばせてくれて、さらには可愛らしい私への歓迎の言葉を机の上に飾ってくれた。こうした細やかさに私はとても温かい気持ちになった。朝食の際にはご飯をよそい過ぎたかを聞き、食べる前には楽しそうに「いただきます」と言う。これは食べ物やそれらを作った人への感謝を示す言葉であり、こうした点はいずれも、彼らがマナーを重んじ他人を思いやっていることを示している。

企業訪問や文化体験などでは、皆が30度から45度の角度でお辞儀をして私たちを歓迎してくれた。エスカレーターに乗る際は皆が左側に立ち、右側を急ぐ人のために空けていた。日本の街中ではゴミ箱をほとんど見かけることがなく、皆がゴミを自宅に持ち帰って捨てていた。ゴミ箱のある場所では瓶、ペットボトル、缶、雑誌類、燃えるゴミ、燃えないゴミ等に分類されていた。電車内では暇そうに携帯電話をいじっている人も少なく、大声で電話に出ている人もいなかった。家や会社の中では外履きを脱ぎ、時間に正確に目的地に到着する。食事の際は茶碗を持ち、静かに食事をする。茶道では茶碗のきれいな部分を相手側に向け、吸い切りの音で茶の美味しさを表すといった事はいずれも日本人のマナーの表れである。中国は文明・礼儀の国ではあるが、日本のマナーや思いやりといったものについては私たちが学ぶべきだと思った。

大学名：北京交通大学

氏 名：申婉玉

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

一橋大学の学生との交流で、私たちは就職の問題について討論をした。その際従業員の会社における地位の問題になり、日本の従業員は経験を積み年齢を重ねるほど待遇や地位も高くなり、業績とは直接の関連がないとのことであった。そして中国では年齢を重ねた従業員は技術と革新能力不足により会社から解雇されるといった危機に瀕し

ている。清華大学では博士号を取得し海外から帰国した教授であっても十分な研究成果がないという理由で離職の憂き目を見ている。こうしたことから、日本の従業員の集団帰属意識が強いというのも、それなりの理由があるからだということが分かる。

オムロン京都太陽での見学の際、私たちは同社が身体にハンデを持つ従業員の業務における利便性を高めるために業務設備をデザインし、新たなツールを開発し、彼らのプライドを守るため全ての従業員が同じ設備を使い業務を行う様子を目にした。同社はさらに従業員と設計スタッフが共同でツールの設計プランを作成している。これは彼らの身体機能を尊重するのみならず、知能の面からも彼らの能力と努力を認めていることを意味している。これほど身体や心をケアする企業への帰属感が強いのは当然のことである。

日本の従業員の企業への帰属感はこうした思いやりや理解が少しずつ積み重なってできたものであり、また企業の文化や真心がもたらす魅力や感動によるものであり、決して根拠のないことではなく、無理にこじつけたものでもない。これは中国の企業が改善すべき部分であり、現代の青年が頻繁に転職をする局面を如何にして変えていくかについては、こうした細かな部分から改善をしていく必要がある。

もちろん、企業の逞しく安定した経営というのも帰属感が存在するための保障である。

大学名：北京交通大学

氏 名：任二祥

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

かねてより日本人は非常に礼儀正しいというのは聞いていたが、実際に日本を訪れ、親切的な彼らにはやはりとても驚かされた。

学校や企業での交流では、必ずと言って良いほど出迎えのスタッフが事前に私たちの到着を待ってくれていた。そしてお別れの際は私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。中島さんの話によると、「見えなくなるまで手でガラスを拭く」とのことであった。これは礼儀と言うよりは、一種の相手への尊重だと私は感じた。自分を尊重してくれる人と付き合いたくない人は誰もいないと思う。

ホテルニューオータニでの朝食の際は、入口のスタッフの笑顔とサービスでその日一日の良いスタートが切れた。お店での買い物の際は、店員さんがとても親切に、また常に笑顔で対応をしてくれた。企業の見学では従業員が仕事の手を休め、立ち上がって会釈で私たちへ挨拶をしてくれた。日本人には感謝の言葉やお辞儀また会釈の習慣があり、団員の一人は「この数日で自分の腰がだめになりそうだ」と話していた。このことから、日本ではお辞儀や会釈がいかに当たり前の事が分かる。

ホームステイの際、佳子お母さん一家は私をスカイツリーに連れて行ってくれた。そしてエレベーターを待つ間、娘さんがわざわざ中国語のパンフレットを探してきてくれた。昼食の際は日本料理が好きかと聞かれ、私が少し苦手だと言うと、彼らは西洋料理のレストランでの食事に切り換えてくれた。夕食の際もまた刺身などの生ものはなく、火の通った料理であった。3人の娘さんもととても親切で、ゲームのルールを丁寧に教えてくれて一緒にゲームをして遊んだ。そして最も感動したのは、お母さんが事前にお風呂を沸かしてくれて、タオルや歯ブラシも準備し、私が最初にお風呂に入るように言ってくれたことであった。彼らは私がお風呂を済ませてからそれぞれお風呂に入った、これには私はとても感動した。

日本人のマナーはすでに彼らの民族的品性となっている。これは恐ろしい能力だが、また尊敬すべき能力でもある。私たちはこの強大な隣国に正しく向き合い、良好な日中関係を維持し、良い隣人となる必要がある。

学生たちの撮った写真



オムロン京都太陽：会社理念の説明を聴く



オムロン京都太陽：活発な質疑応答



京都大学：学生代表によるキャンパス案内



京都大学：韓立友准教授による大学の紹介



京都大学：時計台の前で記念撮影



京都大学：川添副学長の歓迎の辞



京都嵐山：周恩来総理の詩「雨中嵐山」を一同で朗誦する



京都高台寺：初めての座禅体験 法師の警策を自ら受ける



京都高台寺：茶道の師匠から、お手前の手解きを受ける



箱根湯本温泉：宴会場に浴衣姿で参集



日立製作所 中央研究所：広大な庭園を散策



日立製作所 中央研究所：大池で白鳥を眺める



一橋大学：兼松講堂前で記念撮影



一橋大学：青木教授(左)の司会と大学紹介、中国人留学生の自己紹介



一橋大学：中野副学長の歓迎の辞



一橋大学：英語・日本語班に分かれて討論



三井住友銀行：藤盛東アジア統括部長の歓迎の辞



三井住友銀行：中国人行員による会社紹介と質疑



日比谷松本楼：小坂文乃社長による梅屋庄吉、徳子夫妻と孫文・宋慶齡の交友史を聴く



日比谷松本楼：小坂社長を入れて記念撮影



中国大使館：汪婉大使夫人・参事官から日中関係の講話を伺う



中国大使館：大使館前で記念撮影



三菱商事：会社玄関前で記念撮影



三菱商事：松井顧問(左)による挨拶、小山アドバイザー(右)による講演



ホテルニューオータニ：厨房の生ゴミは100%堆肥化される



ホテルニューオータニ：ホテルが棲む庭園で、記念撮影



歓送会：お世話になった皆様に感謝を込めて、合唱



歓送会：ホームステイファミリーも入って記念撮影



日立製作所

ホームステイ



歌舞伎の登場人物(日本駄右衛門)と同じ「見得」を切ってみる



同僚の方も招待してホームパーティーが開かれた



庶民的な居酒屋で家族と食事



子供の大好きなドラエモンの前で一枚



ご夫妻とラーメンと焼き餃子を食べる



中国でも大人気のコミックを手にとって見る



中国が発明した紙、日本で和紙の手漉きに挑戦する
@埼玉県比企郡小川町



ご家族宅にある茶室で茶道のお手前の手解きを受ける



国立劇場の歌舞伎観賞教室(演目:毛抜)に連れて行って貰いました



東京ワンピースタワーで、子供と記念撮影



静かな海辺で家族と食事、寛いだ時間を過ごす